

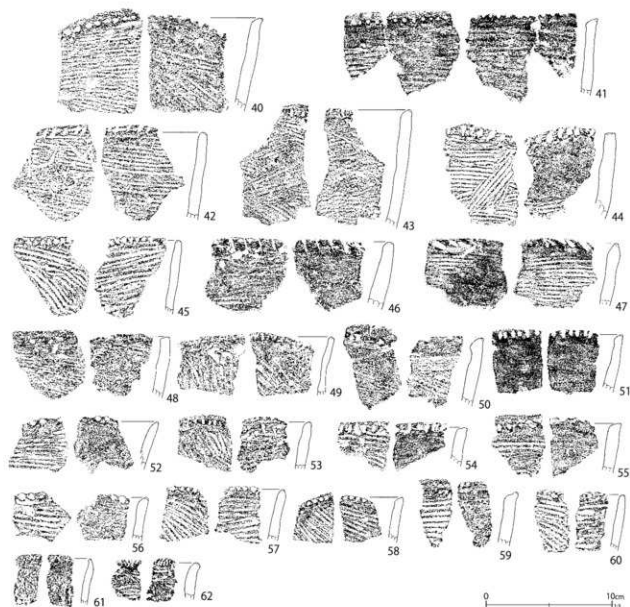
東海系の天神山式土器である。非常に薄く、繊維を含まず、指頭整形痕が残るもので、条線を弧状に施文する。33は天神山式の影響を受けた在地の条痕文土器と思われる。

第5種 (34～36)

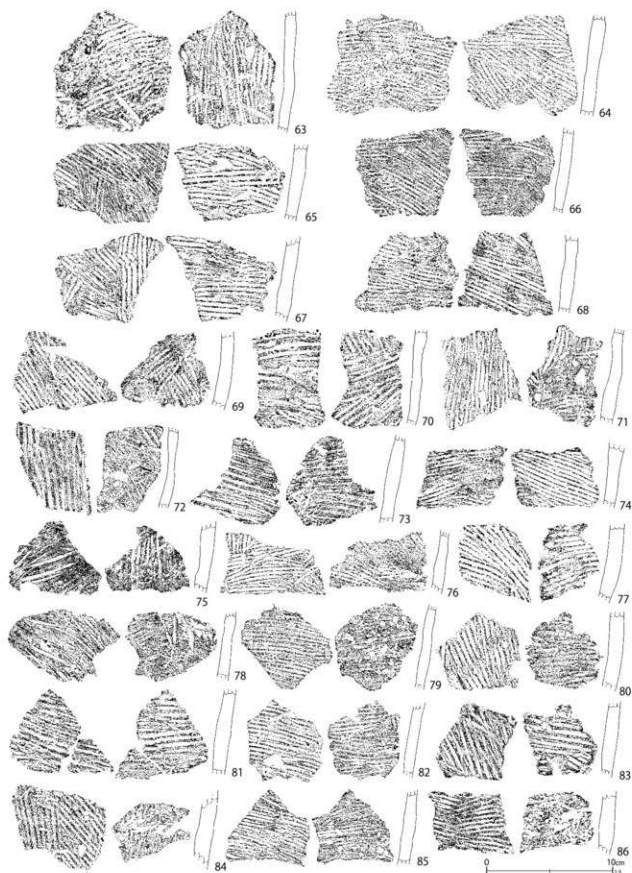
条痕文系土器群最終末の下吉井式土器に相当するものを一括する。34、35は半截竹管状工具で波状文を描き、36は口唇上に貝殻背圧痕文を施文する。

第8類土器 (第193～198図)

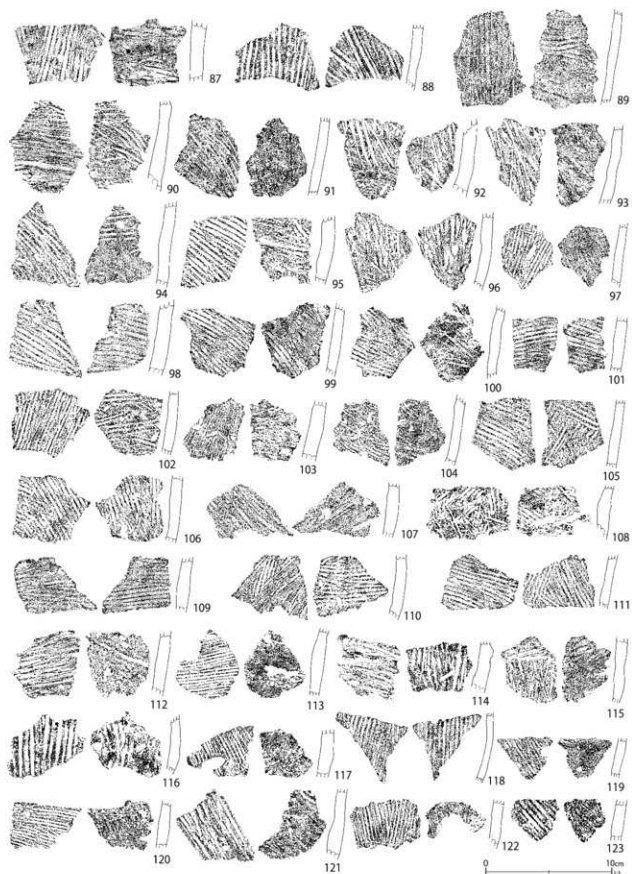
条痕文のみ施文する土器群を一括する。本遺跡から出土した条痕文系土器群は第3類の野島式から第7類の茅山上層式以降の土器群を含んでおり、型式にして9型式程の土器群で構成されている。その中で、第4類の鵜ガ島台式土器が主体を占めているが、条痕文のみの土器群では繊維を多く含むものが目立っている。有文土器は少ないものの、茅山下層式、茅山上層式、茅山上層式以降の土器



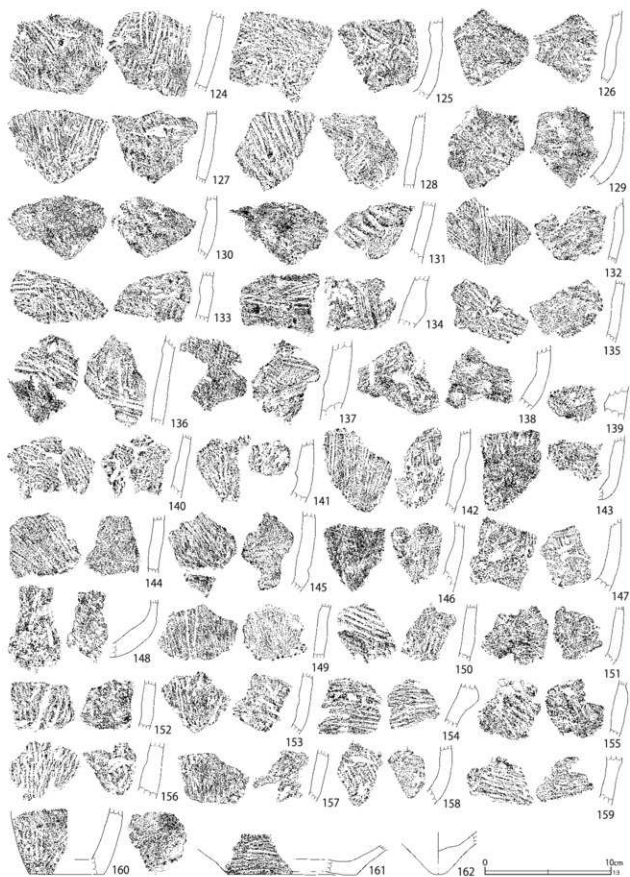
第194図 グリッド出土縄文早期土器 (17)



第195図 グリッド出土縄文早期土器(18)



第196図 グリッド出土縄文早期土器(19)



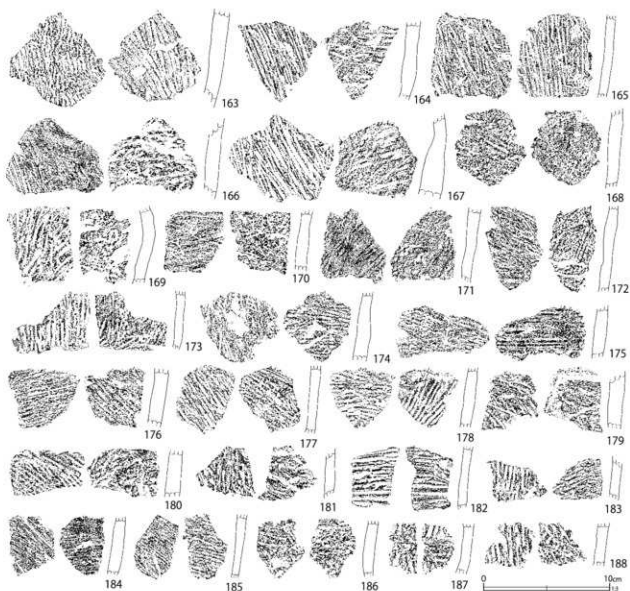
第197図 グリッド出土縄文早期土器(20)

群も多数含まれているものと思われる。

第193、194図は口縁部破片で、第193図に口唇部に刻みのない破片を中心に、第194図に刻みを施す破片を中心にして示した。刻みのない破片は口唇部が先細りの丸頭状になる傾向があり、刻みのあるものは角頭状になる傾向がある。角頭状口唇部の内外端部に刻みを施すものは、鶴ガ島台式に多い。また、貝殻背圧痕を施文するものは茅山上層式に比定される可能性が高い。

第195～198図には胴部破片と、底部破片を一括して示した。平底は鶴ガ島台式土器の底部が大半であると思われるが、茅山下層式や上層式のものも少量含まれる可能性がある。

また、胴部破片は型式区分が難しいものの、第198図には比較的単一的な胎土で、砂粒が少なく、繊維を多く含む整形の粗い茅山上層式以降と思われる土器群について、まとめて示した。あくまでも傾向で分類したものである。



第198図 グリッド出土縄文早期土器(21)

3 第Ⅱ群土器

第Ⅱ群土器(第199～217図)

前期の土器群を一括する。

第1類土器(第200図1～18)

花積下層式土器を一括した。1～3は隆線による文様を持つ土器である。1は細い隆線で区画された幅の狭い口縁部文様帯を有し、緩い波状口縁と推定される。口縁部は細い隆帯によって二段に区画され、斜行する隆帯と組み合わせられて鋸歯状あるいは「V」字状にモチーフ構成されるものと推定され、隆帯上には斜めの刻みが施されている。地文はRL縄文である。3も同様のモチーフを持つものと推定される。

2は口唇下の隆帯に突起が付されている。2、3の地文は不明である。いずれも繊維を多く含み、軽質の印象を受ける胎土である。

4～15は羽状縄文が施文される土器群である。地文は0段多条の単節縄文で、RLとLRの原体を斜めに施文し、条の傾きが強い菱形の羽状縄文となっている。9は口縁部から胴部にかけての破片で、文様帯が隆帯で区画されている。5～8、10～15は胴部破片である。18は直線的に開く深鉢

形の無文土器で、器面には擦痕状の整形痕が残されている。

第2類土器(第200図19～24)

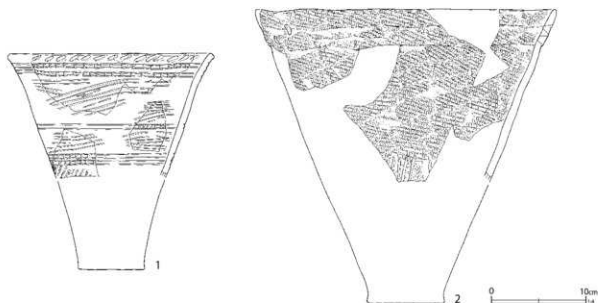
関山式土器を一括した。大木戸遺跡での出土量はきわめて少ない。20は半截竹管により鋸歯状ないしは格子目状のモチーフが描かれる土器である。19、21、24は縄文地文のみの土器で、19は0段多条の原体である。いずれも胎土に繊維を含む。

第3類土器(第200図25～45)

黒浜式土器を一括した。25、31～34、37、40は半截竹管によりモチーフが描かれた土器である。25は小破片で文様構成が明確ではないが、恐らく格子目状のモチーフが描かれるものと想定される。平行沈線施文後に、同一工具で沈線間に爪形文が施文されている。

31は縦区画線間に斜行する沈線が施文された肋骨文系の土器と考えられる。文様は胴中位で収束し以下が縄文施文されるが、文様と地文との境に区画はない。32は格子目文土器であろうか。

33はいわゆるユニオンジャックの文様が施文された土器で、文様帯の区画が明瞭である。文様は平行沈線で描かれ、沈線間に爪形文が施文されて



第199図 グリッド出土縄文前期土器(1)

いる。31と同様の土質だが繊維を含まず砂粒混じりの胎土である。

37、43は格子目文の土器で、37は縦位の沈線が見られることから、区画線をもつ可能性がある。

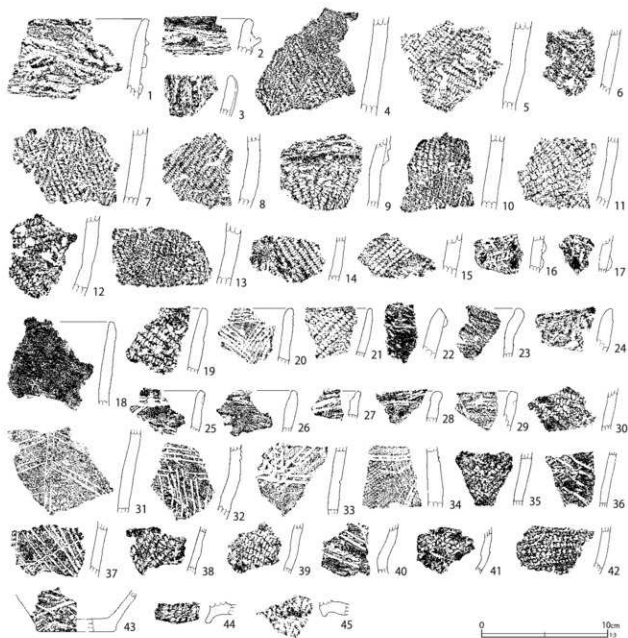
43は単沈線による格子目文の土器であろう。

40は斜行する平行沈線が施文された土器で、いわゆる植房式に属する土器と考えられる。

34は半截竹管に爪形文が施文された土器で、文

様構成は不明だが、器面の一部が磨消されていることや、地文が節の細かい単節縄文であること、繊維を含まず砂粒が多い硬質な印象を受ける胎土であることから、諸磯a式の可能性がある。

30、35、36、38、39、41、42は縄文施文の胴部破片である。このうち36は附加条縄文である。44、45は上げ底状で底部に縄文が施文されていることから、関山式に属する可能性がある。



第200図 グリッド出土縄文前期土器(2)

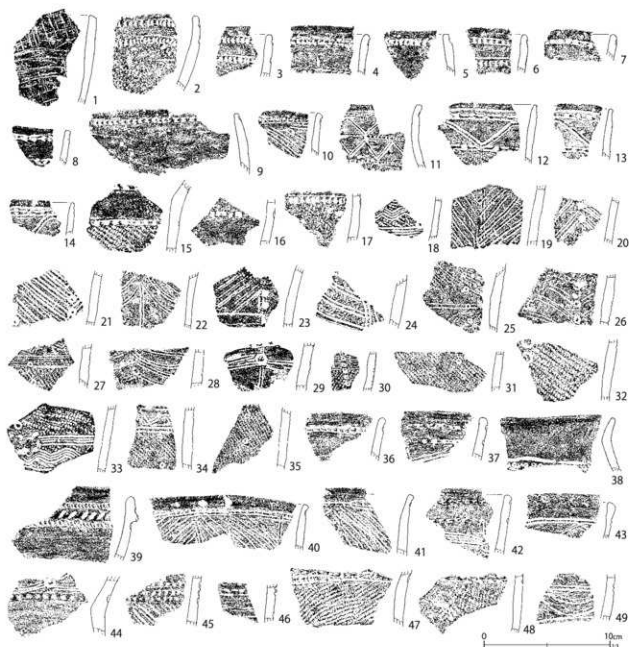
第4類土器(第201図)

諸磯a式土器を一括した。施文の在り方などから新旧に区分される可能性があり、1～35が古い部分、36～49が新しい部分に相当する。

1は口唇下に格子目文、以下に肋骨文が施文されている。変則的なモチーフ構成だが、胎土や整形等は他と同一であることから、諸磯a式の古い部分に相当するものと判断した。

2～9は口唇に沿って爪形文列が廻る土器で、爪形文間に文様は施されない。9は口縁が内湾することから、浅鉢形であろう。

10～14、18は口縁部の爪形文間に鋸歯状の沈線文が施文される土器である。半截竹管を用いて施文されており、爪形文と同一工具である。鋸歯文は一列の場合と二列に施文されるものがある。胴部以下には縄文が施文されるものと考えられる。



第201図 グリッド出土縄文前期土器(3)

15～17に見るように胴部は縄文施文のみの土器群である。

18、27、33、34は縄文地文上に半截竹管や櫛状工具による鋸歯状ないしは小波状の文様が描かれた土器である。縦区画線はないが、円形刺突が文様の施文部分を超えて器面を垂下するものが多い。

19～26、28は肋骨文系の土器である。器面を垂下する縦区画線は、半截竹管による平行沈線を用いて描かれ、この沈線に重ねて円形刺突が施文されたものが多いようである。縦区画間には弧状や直線的な沈線で肋骨文が描かれている。

29はいわゆるユニオンジャックの文様を持つ土器である。縦区画線間と菱形文様の接点に円形刺突を施す。この段階の資料はきわめて少ない。

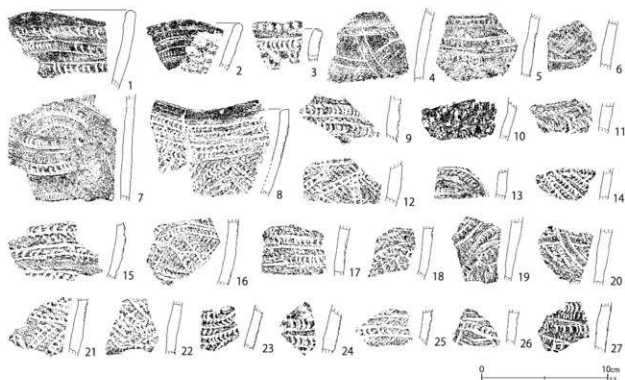
36以下が諸磯a式でも新しい段階と想定される土器である。36、37の文様は詳細不明だが37は竹管文下に平行沈線による木の葉状のモチーフが施文されるらしい。恐らく38も同様の文様を持つ土器であろう。

40、41は肋骨文の土器で、縦区画線が密で斜行する沈線もやや雑な印象を受ける。42は楕円形のモチーフが重層して描かれる土器と考えられる。

39は隆帯両側に爪形文が施文され、隆帯上には斜めの刺突が加えられている。二単位大波状口縁にこの種の文様が多いようである。44は39と同類で、木の葉状入り組み文が施文されている。

第5類土器(第202図)

諸磯b式のうち浮線文出現以前のb1式土器を本類とした。比較的幅広い平行沈線と爪形文で文様が施文される土器群が主体となっている。文様の展開が不明瞭な個体が多いが、口縁部に施文される主文様は7、16、19のような木の葉状入り組み文系統が多いようである。21～23も同様の文様が描かれると考えられる。胴部は平行沈線と爪形文で、多帯に区画されるものと推定される。器形がわかる資料が少ないが、8のように口縁が内湾し波状となるものや、2のように緩い波状となる形状から、二単位大波状口縁の深鉢形土器が存在す



第202図 グリッド出土縄文前期土器(4)

るものと考えられる。

第6類土器 (第199、203図)

浮線文を伴う諸磯b式のうち、沈線文の土器を本類とした。これらは浮線文の古い段階と新しい段階の土器群とに二分される可能性が高く、第203図1～17の土器群を古い段階、第203図18～27の土器群を新しい段階と考え、それぞれ第6a類と第6b類に区分した。

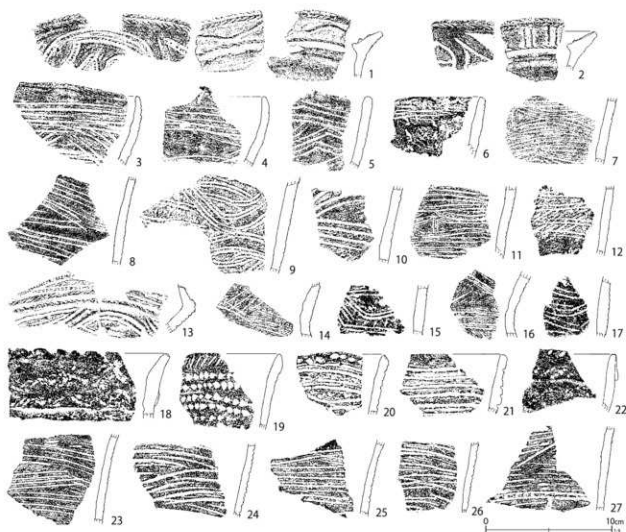
第6a類は諸磯b2式の古い段階とした土器群である。この段階の資料には、浮線文が少なく沈線文で施文される土器群が主体となっているようである。

第203図1～2は鉢形土器と推定され、口唇内

面が肥厚し、内面にも文様が施文されている。いずれも内面の口唇に平行して細い浮線が貼付され、斜めの刻みが施されている。並行する浮線間に1では波状の浮線文が、2では二条一単位の縦の浮線文が貼付されているが、刻みは施されていない。

器面の文様は、いずれも木の葉状入り組み文で、1は半截竹管状工具による平行沈線と爪形文で文様が描かれ、地文縄文は施されないようである。2は単沈線による文様で、文様間の地文は磨消されている。緻密な印象を受ける胎土で、器内外面には丁寧なナデやミガキが施されている。

3～12は沈線で文様が描かれた土器である。器面は平行沈線で多帯に区画され、区画内に3～5



第203図 グリッド出土縄文前期土器(5)

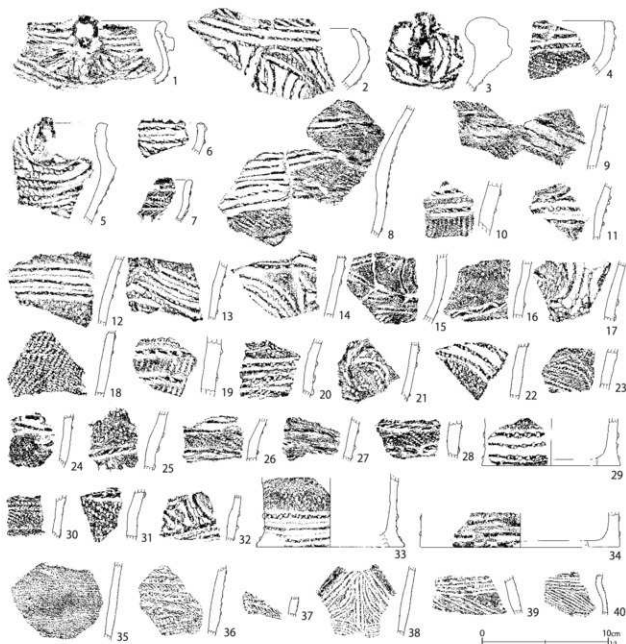
の鋸歯状文や、7、11のような縦区画線間に対弧状の連続するモチーフが描かれた土器で構成されている。8、9は木の葉状の入り組み文の可能性がある。6、9、10、12には地文が認められるが、磨消し手法は認められない。

第203図13は「く」字状に屈曲した浅鉢形土器と考えられる。屈曲部を横走る二条の浮線で胴上半と下半を区分している。浮線上には向きを異に

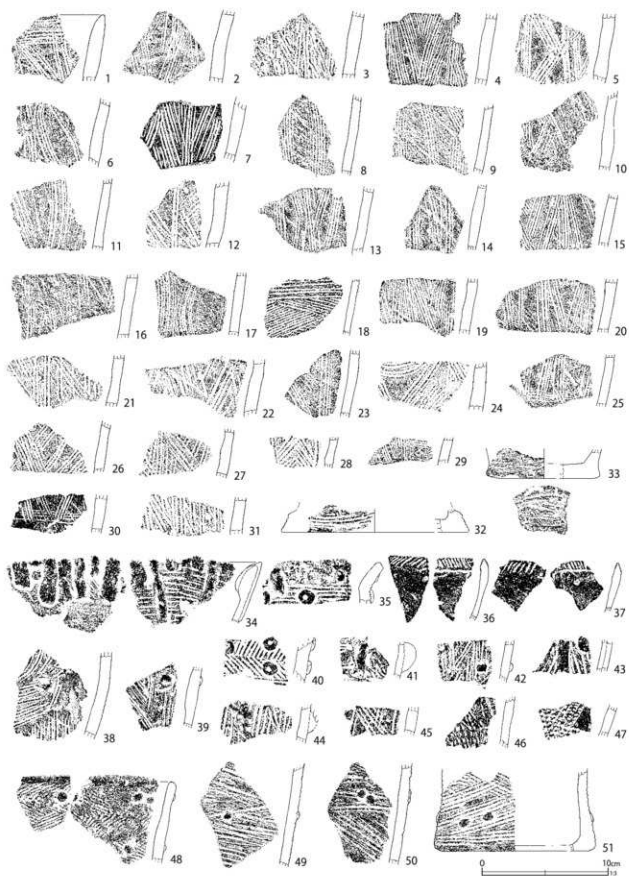
した刻みに加えられ、矢羽根状の印象を与えている。上半部には半截竹管状工具による平行沈線と爪形文、下半には同様の工具による平行沈線文が描かれている。下半は連続する対弧状のモチーフが描かれるものと推定される。

第6 b 類は諸磯 b 2式でも新しい段階の土器群で、第203図18～27の資料が該当する。

20～27は沈線文の土器である。第199図1、2、



第204図 グリッド出土縄文前期土器(6)



第205図 グリッド出土縄文前期土器(7)

第203図18～27は浮島式と考えられる土器である。

第199図1は緩やかに外反する深鉢形土器で口唇部は平坦に面取りされ、口唇外面にヘラ状工具により斜位の押圧が施されている。胴部は多帯構成で、残存部位から見て竹管文により横帯区画されたものと推定される。文様は鋸歯状のモチーフであろう。推定口径21.8cm、現存高6.8cmである。

2は縄文のみの粗製土器である。底部から直線的に開く深鉢形土器と推定される。外面の口唇下には粘土帯が残されているが、残存するのは口唇直下のみで、それ以下や内面は丁寧に整形されていることから、意図的に残されているものと考えられる。浮島式から興津式にかけては、折り返し口縁が顕著であることから、該期の特徴を持った粗製土器と考えられる。胴下部には沈線が垂下することから、モチーフが描かれていたものと考えられるが、詳細は明らかではない。口径32cm、現存高18cmである。砂粒分に富んだ胎土である。諸磯式と比較すると総じて色調が灰白色で砂粒分の多い胎土である。

第203図20、21、23～27は横帯間に鋸歯状あるいは斜行沈線で文様が描かれている。18、22は折り返し口縁で、器面には縄文が施文されている。18は口唇上面部が押圧されており、器面には結節縄文が施文されている。第199図2と比較すると後出の要素が窺われることから、前期終末の東関東系土器の可能性が高い。19は口唇外面がやや肥厚し、縦の刻みが施され、三角形の連続する刺突が加えられている。22は口唇端に刻みが施され、器面に縄文が施文される粗製土器で、口唇部の形状は19に近く、浮島3式土器と想定され、諸磯b3式段階に下がる可能性がある。

第7類土器(第204図1～34)

諸磯b2式浮線文の土器を本類とした。b2式の中葉段階の土器群である。器形は口縁がキャリパー状の深鉢形土器で、地文縄文上に浮線による横区画線や文様が描かれており、浮線は刻みや刺

突によって加飾されている。

モチーフ構成は明瞭ではないが、口縁部には対孤状の連続するモチーフや、入り組み文が主体となり、胴部以下は横走する浮線で多帯に区画されるものと想定される。

1、2の口縁部は湾曲の度合いが強く、b2式でも新しい段階の特徴を示している。四つの粘土瘤を組み合わせ、環状の突起を構成している。2、3、5は同一個体と考えられ、3、5にはイノシシと思われる獣面突起が貼付されている。

いずれの破片も地文に縄文が施文され、浮線には斜めの刻みや棒状工具による押圧が施されているが、15のように浮線のみの土器もある。29、33、34は底部破片で、やや張り出したような形状を有している。

第8類土器(第204図35～40)

第7類に後続する土器を一括した。諸磯b2式新段階からb3式土器を含むものと考えられる。浮線文と沈線文の土器がある。36、37は、b2式段階と比較すると扁平な浮線によって文様や区画線が描かれる土器である。浮線上に密な刻みが施される特徴があることから、b2式新段階ないしはb3式古段階と考えられる。

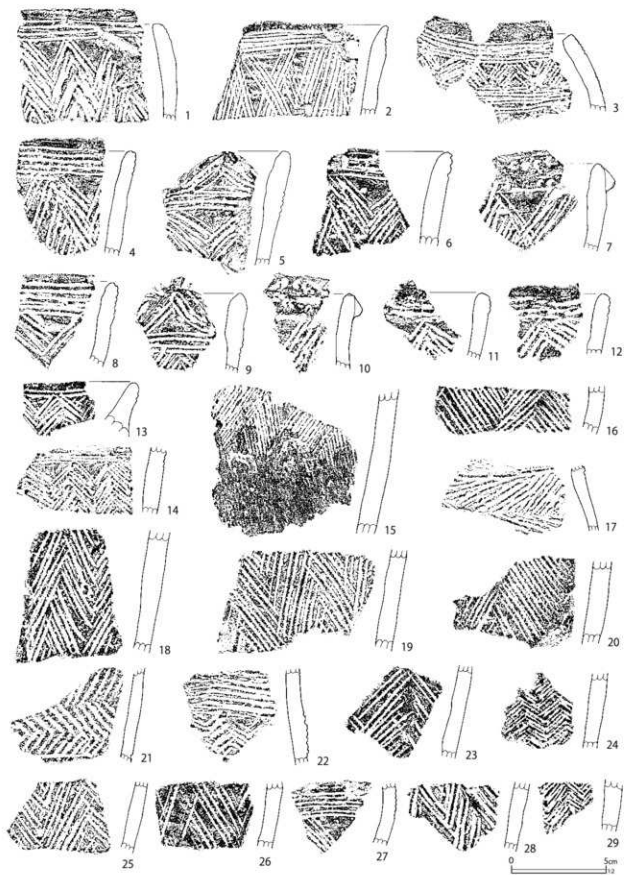
35は沈線文の土器で、密な沈線で施文されている。b3式段階の土器であろう。

38～40も沈線文の土器だが、38は波状口縁で、波頂部から垂下する縦の沈線で口縁部が縦区画されることから、b3式新段階ないしは諸磯c式最古段階の可能性が高い。

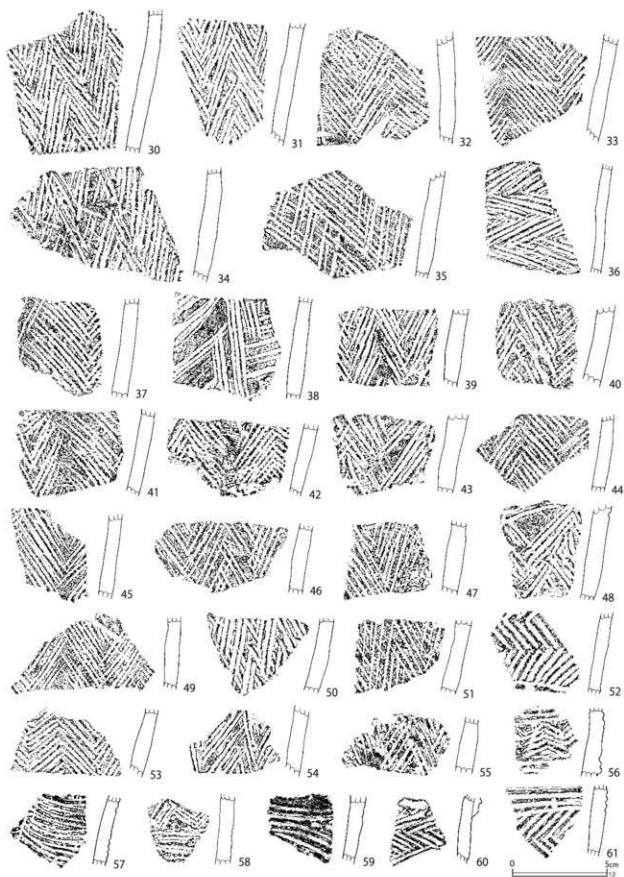
諸磯c式土器を第9～11類とした。口縁部の破片が少ないため決め難い部分も多いが、施文の特徴などから三段階に区分される可能性が想定される。

第9類土器(第205図1～33)

諸磯c式でも古い段階の土器群と考えられる。1は縦区画線間に直線的な斜行沈線を組み合わせ、菱形のモチーフが描かれるものと推定される。



第206図 グリッド出土縄文前期土器(8)



第207図 グリッド出土縄文前期土器(9)

2～31は幅広い胴部文様の破片で、施文具は半截竹管あるいは櫛状工具により密な沈線文が描かれる土器である。文様は6、8、11、17のように縦方向の孤線を対に施文したレンズ状のモチーフと、直線的な沈線を組み合わせて、対抗する「V」字状や菱形状のモチーフを描くものとの2種類が存在するようである。恐らくほとんどに縦区画線が伴っていると考えられる。また、この段階で地文を有する資料は見当たらない。18は横帯内に密な斜行沈線で文様が描かれた土器で、胎土や施文手法などからこの段階に含めた。

25、30は胴下部の破片で、横区画線で文様域が収束し、33のような底部に移行するものと推定される。33は底面に沈線が施されているが、モチーフ構成はないようである。32の底部は外方に突出していることから、或いはこの段階に含まれない可能性がある。

第10類土器 (第205図34～47)

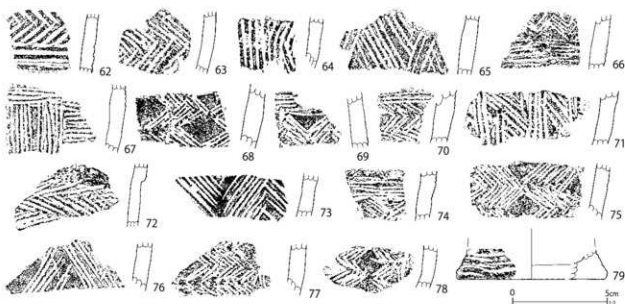
諸磯c式でも中位の段階の土器群を本類とした。前段階と比較すると、地文をもたない点やモチーフは共通しているが、沈線が深く半円彫り状の印象を与えるものがあり、貼付も施されるなど、よ

り立体的な土器となっている。

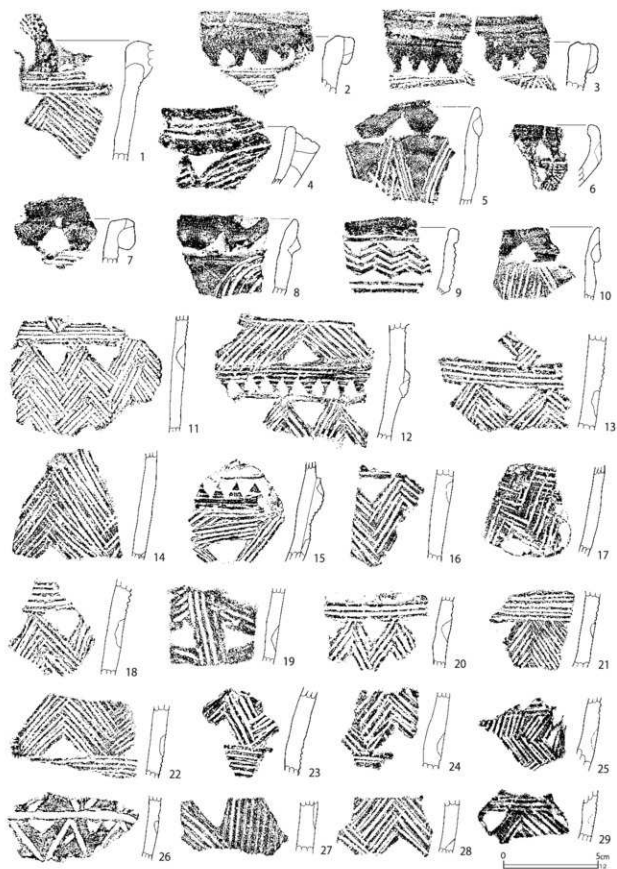
34は肥厚した口唇内面に斜行沈線が施文されている。器内面から外面にかけて、断面カマボコ形の棒状浮文が貼付され、器面を垂下するものと口唇上面で止まるものとが数条おきに繰り返して貼付されている。35も同様の土器と考えられるが、内面は肥厚せず、口端が「く」字状に外反する。35と40は同一個体であろう。胴部は縦区画線間に対抗する「V」字状あるいは菱形状のモチーフが描かれ、41のような比高差のある貼付や、40のようなボタン状の貼付が加えられている。

36、37は器壁が薄く口唇端が鋭角に形成されていることや、残存部位に文様が認められないなどの点が他と異なっている。口唇内外に密な刻みが施され、上面から見ると矢羽根状に施文されており、諸磯c式土器の口唇部の施文との共通性が見いだされることから、同時期の所産とした。胎土に他と異なる特徴はないが、西日本の系譜を引く土器の可能性も考えられよう。

46、47は興津式土器である。46は恐らく貝殻腹縁、47は半截竹管状工具による文様が施文されている。



第208図 グリッド出土縄文前期土器(10)



第209図 グリッド出土縄文前期土器(11)

第11類土器(第205図48～51)

諸磯c式の新しい段階の土器群を本類とした。48は器面にRとLの結束縄文で羽状施文され、地文上に二個一對の円形浮文が貼付されている。49、50には縦区画線がなく、やや幅狭い横帯間に斜行沈線が施され、沈線上に二個一對の円形浮文が貼付されている。51も同様の構成を持つ底部破片である。49～51は、胎土に石英や雲母粒を含み、諸磯c式中段階までの土器とは胎土を異にしている。また、横帯構成が主となる点は十三菩提式に近似した部分がある。

第12a類土器(第206～208図)

十三菩提式古段階で、印刻を持たない沈線文の土器を本類とした。大木戸遺跡の十三菩提式では最も出土量が多い土器である。器形や文様の詳細がわかる資料はないが、胴部が幅広い文様帯のものと、幅狭く多帯の土器とが存在するようで、前者の占める割合が圧倒的に高い。

前者では第206図1や4のように鋸歯文を横方向に施文し、さらに縦方向に密に施文した土器が主体を占めている。沈線文の描き方は必ずしも厳密ではなく、上方から下方に移行するに従いずれが生じるためか、頂部が斜めにずれて施文された土器も多いようである。2は沈線を交差させ「X」字状のモチーフを描いているが、この種のモチーフは少ないようである。

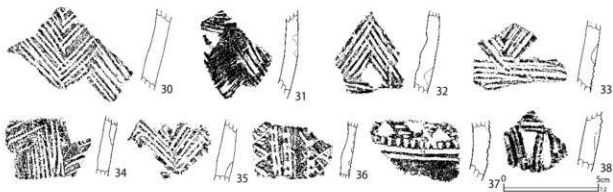
3は内湾する深鉢で、多帯の幅広い横帯内に横位の鋸歯文が施文された土器である。破片が小さいため確定しがたいが、7～13、第207図56、58、第208図69、74も多帯構成と考えられるが、これ以外にも同種の土器が多数含まれている可能性がある。7は口唇外面が肥厚し、円形刺突が施されている。

第206図21、第207図52、第208図68、75、78は鋸歯文が縦位に施文される土器で、75、78は菱形状に施文されていることから、多帯構成ではなく幅広い胴部文様帯の可能性もある。

第208図67は縦区画線を持ち、区画間に横方向の沈線が施文されていることから、諸磯c式の文様系と考えられる。

第12b類土器(第209～210図)

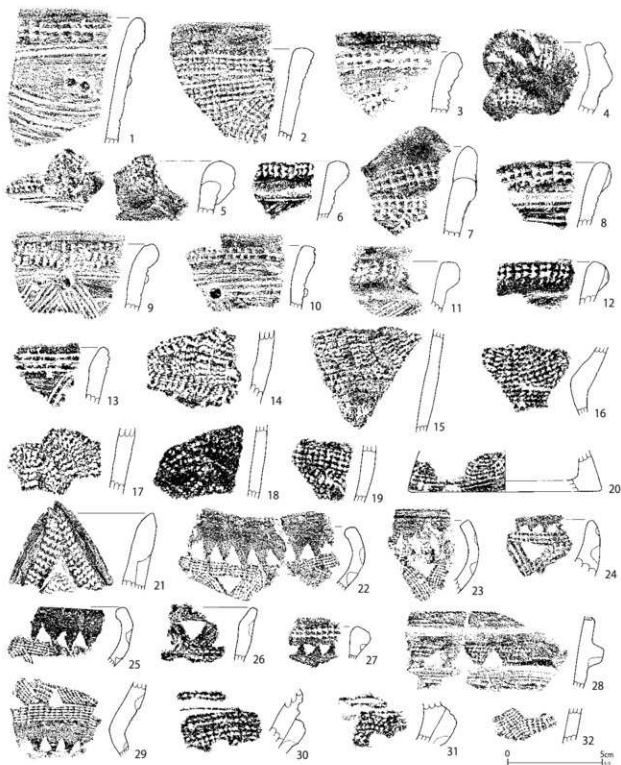
沈線文間に印刻が施される土器を本類とした。前者では胴部に幅広い文様体を持つ土器が卓越するが、本類では多帯構成の土器が主体となっている。第209図1～10は無文の口唇部に印刻が施される土器で、1～3、7は粘土帯を貼付し肥厚した口唇部に印刻を施している。1は口唇部の突起に結節沈線が施されている。4は口唇直下に隆帯が廻り、突出した口唇部を作出している。11以下は口唇部を欠くが、印刻が施されていた可能性が高い。横帯区画線や区画内の文様は、半截竹管か櫛状工具により横位の鋸歯状文が施文され、モチ



第210図 グリッド出土縄文前期土器(12)

ーフの空白部に印刻を施すことにより、立体感のある文様を作出している。5は胴部文様に印刻が施されたかは不明である。12、15は粘土帯を貼付

し肥厚させた部分に横帯区画線を描き、印刻を施している。26は横帯や文様が単沈線で描かれ、小ぶりの印刻が施されている。この種の文様は本例



第211図 グリッド出土縄文前期土器(13)

のみである。

19は縦区画線間に対向する鋸歯文が施文された文様のようにある。第210図36にも縦区画線があり、文様は格子目状の沈線文で印刻が施された形跡がある。38は縦の対弧状のモチーフ間に印刻が施されていることから、或いは扇平系の土器の可能性もある。

図示した資料は、いずれも円筒形で器形の変化に乏しい深鉢形土器と考えられる。

第13a類土器(第211図1～20)

結節沈線により文様が描かれ、印刻を持たない土器を本類とした。1、6、8～13は口唇部にのみ結節沈線が施文され、以下は半截竹管による沈線文で、対弧状あるいは鋸歯状の沈線文が施文されており、多帯構成の土器が存在する可能性がある。文様帯空白部には一個あるいは二個一対の円形浮文が貼付されている。2～5、7、14～21は文様や区画線全てが結節沈線で描かれる土器で、前者とは異なり、曲線的な文様が施文されていることから文様体の幅広い土器と考えられる。21は突出した波状口縁で、結節沈線による文様が施文されていることから、14～20と同種のいわゆる桜沢系の土器の可能性もある。

第13b類土器(第211図21～32)

結節沈線文に印刻が施された土器を本類とした。

基本となる文様構成は第13a類と共通し、口唇無文部や文様空白部に印刻が施されており、第12b類の文様を結節沈線に置き換えるとともに印刻を加えた土器であり、第12類、13類は文様描出技法に差はあるものの、同時期存在と考えて問題ないであろう。

第13類土器は雲母を含み、硬質な印象を与えることが大きな特徴で、他の土器群にこのような胎土は認められない。

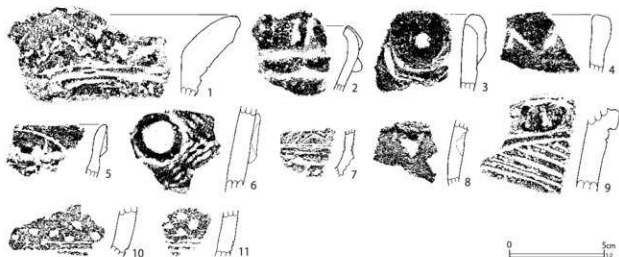
第14類土器(第212図)

いわゆる扇平系と思われる土器を本類とした。

1は口唇部に弧状の扁平な隆帯を貼付した土器である。3は中央部に盲孔を持つ円形の貼付文を有する。6は環状の粘土紐が貼付されている。いずれも小破片でまとまりに欠け、あるいは他類が含まれている可能性もある。

第15類土器(第213図1～29)

結節浮線文の土器を本類とした。他とは異なり、地文に縄文が施文されることも大きな特徴である。浮線は横帯や文様ともに二～三条を一単位とし、文様構成は、1～5、7のように横帯による多帯で、横帯間に6のような弧線や8のような鋸歯文が施文される土器が多いようである。



第212図 グリッド出土縄文前期土器(14)

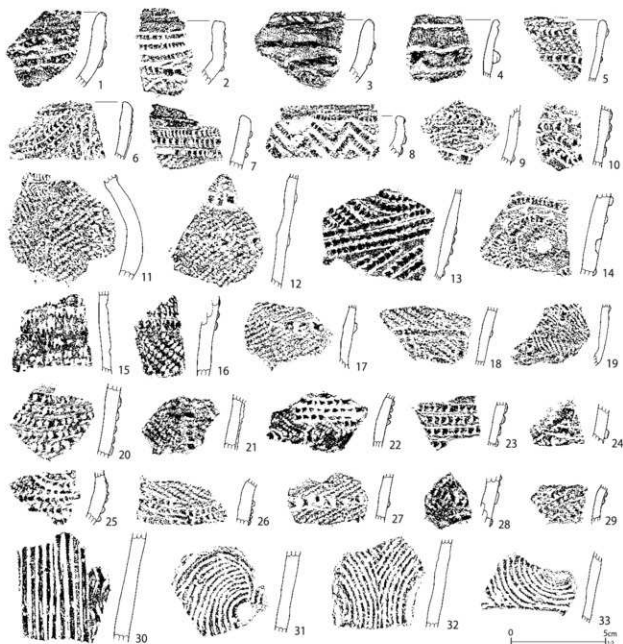
14は文様端部が渦巻き状に構成されているが、同類の資料中にこのような構成を持つものは少ないようである。

13は横帯間に直線と曲線のモチーフが配されている。本例のみ地文をもたないことから、あるいは鍋屋町的な土器かもしれない。

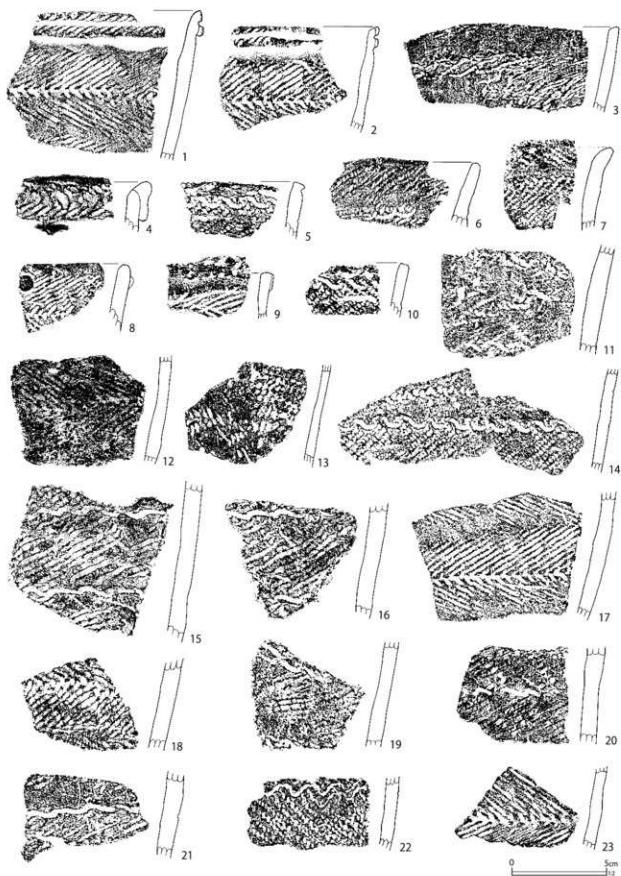
第16類土器 (第213図30～33)

胴部破片のみだが、地文をもたず密な沈線文で

文様が描かれた土器である。30は直線的に垂下す縦区画線と考えられる沈線を有する。31は外郭線の内部を充填するような描出法をもっており、北陸地方に分布する福浦上層式的なモチーフを想起させる。32は恐らく双環状となるモチーフが描かれるものと考えられることから、諸磯c式的であるモチーフの系譜を引く中部的な様相を持った土器の可能性はある。



第213図 グリッド出土縄文前期土器(15)



第214図 グリッド出土縄文前期土器(16)

第17類土器 (第216図1)

外反する胴上半部に隆帯が貼付された土器で、隆帯上には縦や斜めに押圧されている。

第18類土器 (第216図2～16、18～30)

櫛状工具あるいは半截竹管状工具による地文上に、口唇から直線的に垂下する短い浮線文や、斜行する結節浮線を組み合わせ、鋸歯状に表現したものなどがある。十三菩提式古段階の関東西部地域の特徴的な土器群である。地文は縦方向に粗い条線が施文される例が多いが、23のようにモチーフを描いたと思われるものもある。単純に開く深鉢形や、内湾する深鉢形が多いが、22のように屈曲する器形もあり、26のように浮線でモチーフを描いた土器も存在する。

第19類土器 (第216図31～35、第217図36～39)

円形刺突が廻る土器群である。棒状工具を斜めに刺突し、片側に粘土を盛り上げたような特徴を持っている。刺突列以下には沈線文が施文される。第7類同様地域的な土器と考えられる。

第20類土器 (第217図40～44)

口唇直下に隆帯を小波状に貼付した土器群であ

る。隆帯は二条と一条があり、二条のものは菱形状となっている。指頭によるナデや工具によって小波状に整形しているものと思われる。地文に縄文を持つことや、胎土との比較から第4類に近い土器と想定した。

第21類土器 (第216図17)

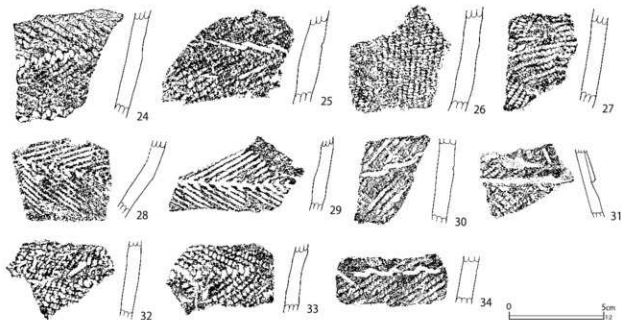
原体の側面圧痕を持つ土器で、東関東のいわゆる粟島台式に相当する。本例のみである。

第22類土器 (第217図45～56)

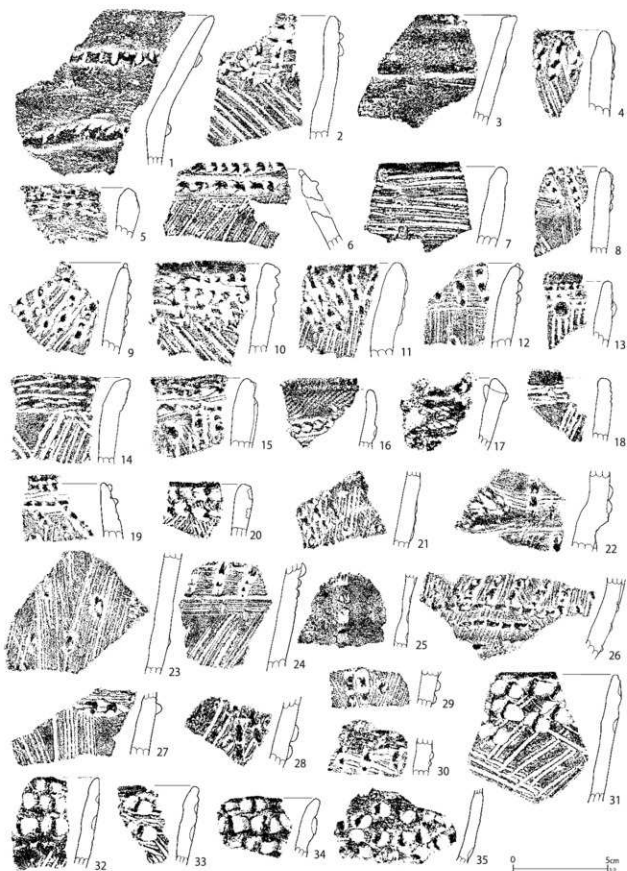
十三菩提式新段階の土器群である。出土量も少なくまとまりに欠ける。45、48は口唇にいわゆるソーメン状の粘土紐を貼付した土器である。屈曲部には斜行する沈線文が施文されている。49は口唇に沈線が施文され、粘土紐の貼付と同様の施文効果を図っている。47は雲形状のモチーフ間が格子目状の沈線で充填され、空白部に印刻が施され

51は対弧状の隆帯を持ち、隆帯下の沈線文描出手法が55に類似することからこの段階に含めた。ている。

54は縦沈線、55、56は縦沈線に斜めの浅い沈線が加えられており、終末段階に属する土器であろう。



第215図 グリッド出土縄文前期土器 (17)



第216図 グリッド出土縄文前期土器(18)

第23類土器 (第214～215図)

縄文のみの粗製土器を本群とした。多くの資料が十三菩提式期に含められるものと考えられる。結束と非結束の原体による羽状縄文が多いほか、「S」字状の結束回転施文も多いことが特徴である。結束による羽状縄文は1、2、17、18、23、24、28、29がRとL、33がRLとLRである。非結束による羽状縄文は4、12がRとL原体、7がRLとLR原体である。1、2は同一個体で、口唇部に二条の隆帯が廻る。地文はRとLの結束による羽状縄文で、隆帯上にもLの縄文が施文されている。

結節は5、6、10、11、14～16、19～22、25、30、34に認められる。8は口唇直下に円形浮文が貼付されており、諸磯c式の可能性がある。胎土には砂粒が多く含まれているが、27には少量の雲母が含まれている。

4 第Ⅲ群土器

第Ⅲ群土器 (第218図)

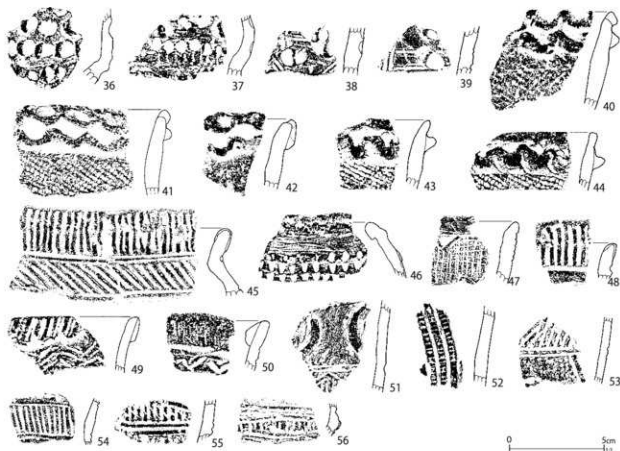
中期の土器群を一括する。

第1類土器 (第218図1～14)

五領ヶ台式土器を本類とした。第218図1～7は集合沈線文系の土器である。1は口縁部が内湾し、円形の貼付文上に刻みが施されている。口縁部には斜位の沈線が充填されており、同様の沈線文は3、4、6にも認められる。

2は口唇内面が突出し、波頂部内面には印刻が施されている。緩い波状口縁で、波頂部に突起が付されている。5も波状口縁で、波頂部が外方に強く張りだしている。文様の詳細は不明である。

8は「く」字状に屈曲し、口縁部を廻る沈線には斜めの刻みが施されている。9は格子目状の沈線でモチーフが描かれ、文様空白部に印刻を有する



第217図 グリッド出土縄文前期土器 (19)

ことから、或いは前期終末の可能性がある。

10、13、14は細線文系土器で、モチーフ間が細かな刻みで充填され、印刻が施されている。

第2類土器(第218図15～17)

中期前葉の土器を本類とした。15、16には爪形文が施され銘沢式と考えられる。17は勝版式に属する土器であろう。

第3類土器(第218図18、19)

加曾利EⅡ式古段階の土器を本類とした。18はキャリバー形深鉢であり、頸部を区画する二本の隆帯と垂下する懸垂文が施される。地文は撚糸文のLである。19は曾利系無文口縁部破片である。

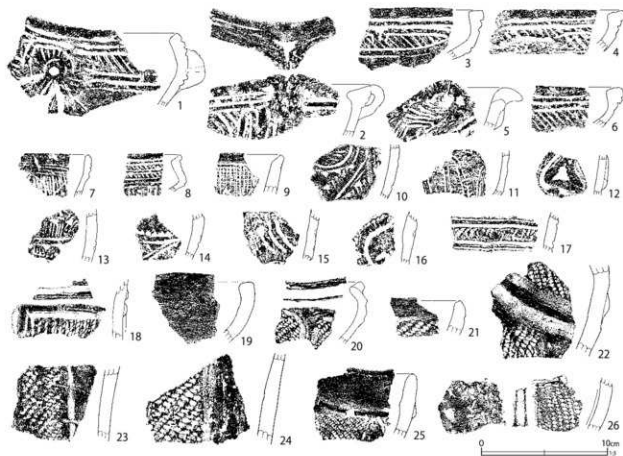
第4類土器(第218図20～24)

加曾利EⅢ式キャリバー形の深鉢を本類とした。20～22が口縁部、23、24が胴部破片である。20は沈線で文様が描かれ、地文は単節RLの縄文を縦方

向に施文する。21も単節RLを縦方向に施文する。22は口縁部に隆帯で文様が施され、隆帯の両脇には幅広い沈線文が施される。地文は口縁部は単節RLの縄文を横方向に施文し、胴部は単節RLの縄文を縦方向に施文している。23、24は胴部破片で二本の沈線文を垂下させて間を磨消す。文様と蛇行沈線文を交互に施文する。地文は単節RLの縄文を縦方向に施している。

第5類土器(第218図25、26)

加曾利EⅣ式で後期初頭に並行するものを便宜上本類とした。25は口縁部破片で口縁部と胴部が微隆起線文で区画され、胴部には鋸歯状の模様が沈線で施文されている。残存部の地文は単節LRの縄文を縦方向に施文している。26は胴部破片で微隆起線文による文様が描かれ、地文は単節LRの縄文を斜め方向に施している。



第218図 グリッド出土縄文中期土器

5 第Ⅳ群土器

縄文時代後期の土器を一括した。

- 第1類土器 称名寺1式
- 第2類土器 称名寺2式
- 第3類土器 堀之内1式
- 第4類土器 堀之内2式
- 第5類土器 後期前葉の土器
- 第6類土器 加曾利B1式
- 第7類土器 加曾利B2式
- 第8類土器 紐線文
- 第9類土器 格子目文
- 第10類土器 後期中葉の土器
- 第11類土器 安行2式

第1類土器は、称名寺1式であり、以下の順で掲載した。

第1種 地文に縄文を持つもの

第2類土器は、称名寺2式であり、以下の順で掲載した。

- 第1種 地文に点を持つもので、その点が丸いもの
- 第2種 地文に点を持つもので、その点が長いもの
- 第3種 地文に点を持つもので、その点が複数列のもの
- 第4種 地文に縄文も点も持たないもの

第3類土器は、堀之内1式であり、以下の順で掲載した。

- 第1種 波状口縁の深鉢
- 第2種 平縁の深鉢で口唇部直下に沈線が見られるもの。地文に縄文を持つ
- 第3種 平縁の深鉢で口唇部直下に沈線が見られるもの。地文がない
- 第4種 隆帯に刻みを持つもの
- 第5種 口唇直下に円形刺突列を持つもの
- 第6種 その他の口縁部と胴部破片

第4類土器は、堀之内2式であり、以下の順で掲載した。

第1種 刻みのはいた隆帯があるいは紐線文が見られる口縁部破片で、「8」字状の貼付を持つもの

第2種 その胴部

第3種 刻みのはいた隆帯があるいは紐線文が見られる口縁部破片で、「8」字状の貼付を持たないもの

第4種 その胴部

第5種 紐線文を持たない磨消縄文が見られる口縁部破片

第6種 その胴部

第7種 縄文を持たない口縁部破片

第8種 内文が見られる深鉢と浅鉢

第9種 内文が見られない深鉢と浅鉢

第10種 胎土が異質な土器群

第5類土器は、後期前葉の土器であり、以下の順で掲載した。

- 第1種 沈線文の深鉢の口縁部破片
- 第2種 円形刺突列のある口縁
- 第3種 櫛歯状条線を持つ口縁で深鉢、壺、浅鉢
- 第4種 その他の深鉢
- 第5種 縄文施文の深鉢
- 第6種 無文の深鉢
- 第7種 注口土器
- 第8種 把手

第6類土器は、加曾利B1式であり、以下の順で掲載した。

- 第1種 内文を持ち口唇部に円形刺突列のある深鉢
- 第2種 内文を持ち口唇部に円形刺突列のある浅鉢
- 第3種 内文を持ち口唇部に貼付文のある深鉢
- 第4種 内文を持ち口唇部に貼付文のある浅鉢
- 第5種 内文を持ち円形刺突列や貼付文のな

い深鉢

第6種 内文を持ち円形刻突列や貼付文のない浅鉢

第7種 内文を持ち円形刻突列や貼付文の有無がわからない鉢類胴部破片

第8種 内文がない深鉢

第9種 内文がない浅鉢

第10種 横帯文を持ち区切り文が見られる深鉢

第11種 横帯文を持ち区切り文が見られる浅鉢

第12種 区切り文がやや新しい特徴を示す鉢類

第7類土器は、加曾利B2式であり、以下の順で掲載した。

第1種 括弧文を持つ鉢類

第2種 弧線文を持ち磨消縄文が見られるもの

第3種 磨消縄文が見られるもの

第4種 口唇に突起を持つもの

第5種 矢羽根状沈線を持つ文様帯を持つもの

第6種 矢羽根状沈線を持つもの

第7種 いわゆる中妻系列

第8種 遠部三類

第9種 その他

第10種 把手

第11種 注口

第8類土器は、いわゆる紐線文土器であり、以下の順で掲載した。

第1種 半截竹管を使用し、横帯文が見られ、または懸垂コンパス文が見られるもので、口縁まで縄文が施文されており、原則として波状口縁を呈しているもの

第2種 第1種に似るが半截竹管を使用しておらず、単沈線が用いられるもので、口縁まで縄文が施文されており、原

則として波状口縁を呈しているもの。

第3種 半截竹管を使用し、斜位、横位の短沈線を施すもの

第4種 区切り文が見られる横帯文を持つもの

第5種 沈線と縄文が見られるもの

第6種 横帯文

第7種 縄文を施文したもの

第8種 縄文を施文し紐線が口唇に近いか付着しているもの

第9種 二重線の対弧が見られるもの

第10種 櫛歯状工具による対弧が見られるもの

第11種 櫛歯状工具による格子が見られるもの

第12種 単沈線による縦位弧線が見られるもの

第13種 無文のもの

第14種 二重紐線

第15種 無文帯を持つ二重紐線

第16種 格子目を持つもの

第9類土器は、いわゆる格子目文土器であり、以下の順で掲載した。

第1種 沈線により一次区画文を二本描き、その中を斜格子で充填したもので、口縁部には無文帯が見られる

第2種 斜格子を帯状に施した後に、一次区画文を描いたもので、口縁部には無文帯が見られる

第3種 一次区画文を持たない斜格子が、口唇部からやや離れて帯状に見られるもので、無文帯が見られるもの

第4種 一次区画文を持たない斜格子が、口唇近くに帯状に見られ、無文帯が見られないもの

第10類土器は、安行2式である。

第1種 波状口縁の深鉢

第1類土器(第219図1～4)

称名寺1式土器を一括した。

第1種(第219図1～4)

1～4は口縁部破片で、「J」字のモチーフが描かれ、縄文が施文されている。

第2類土器(第219図5～29、第220図)

称名寺2式土器を一括した。

第1種(第219図5～17)

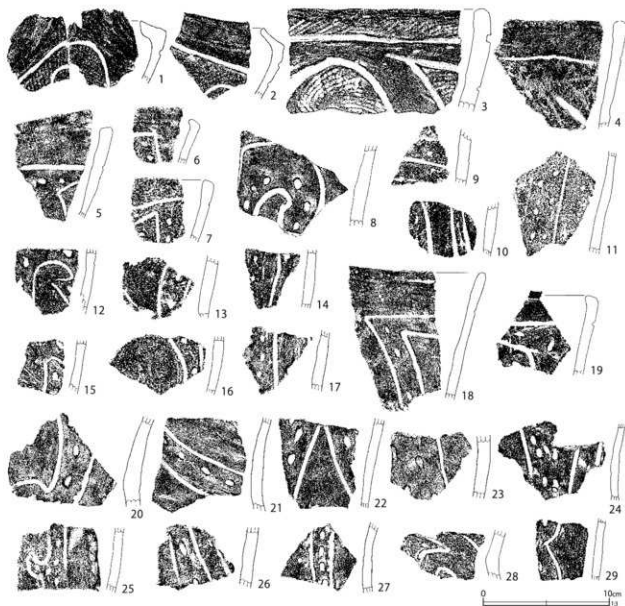
5～17は「J」字のモチーフの中にやや丸い点が

施されている。5～7は口縁部、8～17は胴部破片である。

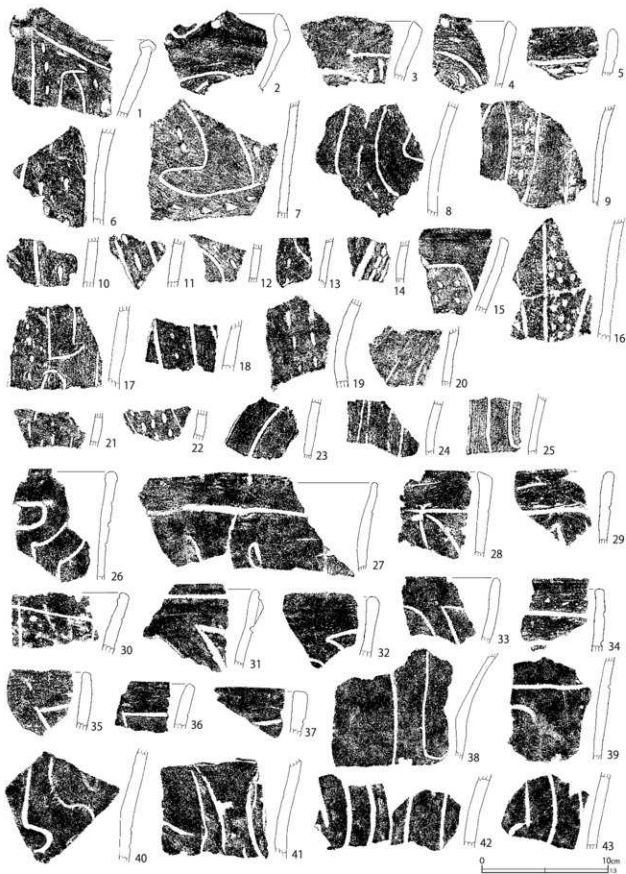
第2種(第219図18～29、第220図1～14)

18～29は「J」字のモチーフの中に前者に比べるとやや長い点が施されている。18、19は口縁部、20～29は胴部破片である。

第220図1～14は「J」字のモチーフの中にかなり長い点が施されている。1～5は口縁部、6～14は胴部破片である。



第219図 グリッド出土縄文後期土器(1)



第220図 グリッド出土縄文後期土器(2)

第3種(第220図15～25)

15～24は「J」字のモチーフの中に複数列の点が施されている。15は口縁部、16～24は胴部破片である。25は「J」字のモチーフの中に櫛歯状工具で平行線が施されている。

第4種(第220図26～43)

26～43は「J」字の中が無文である。26～37は口縁部、38～43は胴部破片である。

第3類土器(第223～225図)

堀之内1式土器を一括した。

第1種(第223図1～15)

波状口縁の深鉢を一括した。

第2種(第223図16～34)

平口縁の深鉢で地文に縄文を持つものを一括した。沈線によって様々なモチーフが描かれている。多くの場合、沈線は二～四本が一組の単位として

用いられている。29は半截竹管が用いられている。

第3種(第224図1～14)

平口縁の深鉢で口唇部直下に沈線が見られ、地文に縄文を持たないものを一括した。第2種同様に、多くの場合、胴部文様には沈線二～四本が一組の単位として用いられている。

第4種(第224図15～25)

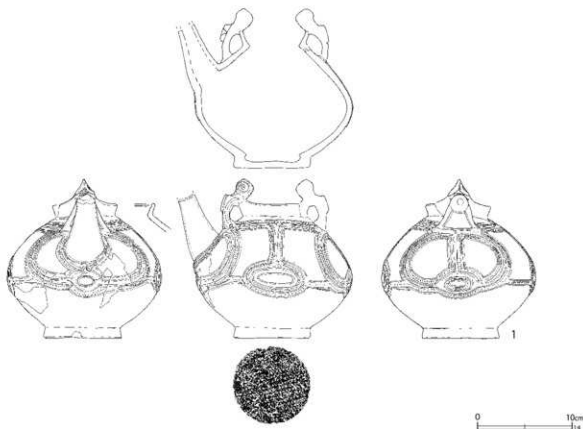
隆帯に刻みを持つものを一括した。15、22は横位に、16、18～21は斜位に、17、23～25は縦位にそれぞれ刻みが施されている。

第5種(第224図26～30)

口唇部直下に円形刺突列を持つものを一括した。26、28、30は中空の工具が使用されている。27は風化により不明であり、29は刻みが施されている。

第6種(第222図2、3、第225図)

その他のものを一括した。



第221図 グリッド出土縄文後期土器(3)

第222図2は、堀之内1式の深鉢である。口縁部に沈線×画を持ち、胴部上半には太い沈線による斜格子目文が施されている。

3は加曾利B1式の浅鉢で、口縁部にはL Rの磨消縄文による文様が施されている。一部、単位文が残存している。高台状の底部を持つ。

第225図1は縦方向の沈線を施す。2は口縁に沿って4本の沈線と斜位の沈線を施す。3は口縁部に沿って沈線を施す。4は口唇直下に沈線、刻み列、沈線を施し、さらに四角いモチーフを施す。5は半截竹管を用いている。6は口縁部に横方向

の沈線を施す。7～9は波状口縁の波頂部に円形の刺突が見られる。8は波頂部から垂下する沈線を施す。10は波状口縁で口唇に円形刺突を施す。11は口唇がつままれ、体部には橢圓状工具による数本の沈線が施される。12は円形貼り付け文を施す。13は口唇に円形刺突を施し垂下する短い隆帯が見られる。14は円形刺突と隆帯を施す。15は円形刺突、刻みの入った隆帯、沈線を施す。16は垂下する隆帯、円形貼り付け文、沈線を施す。17は隆帯、円形刺突、沈線を施す。18は円形刺突と沈線を施す。19は「8」字状の貼付文と沈線を施す。20は沈線と刺突の入った把手が付けられている。

21、22は沈線に扶まれた円形刺突列を施す。23は円形刺突、隆帯、沈線を施す。24、25は沈線を施す。

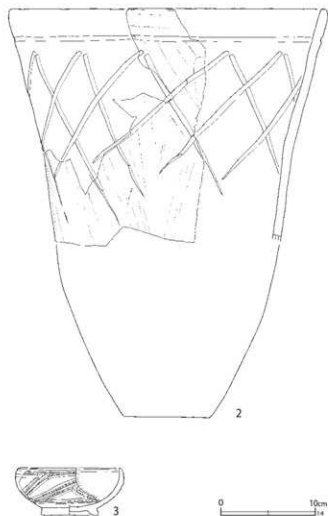
第4類土器(第226～230図)

堀之内2式土器を一括した。

第1種(第226図1～34)

刻みのはいった隆帯があるいは紐線文が見られる口縁部破片で、「8」字状の貼付を持つものを一括した。

1は内面に文様が見られ、外面には縄文施文の横帯が廻る。2は磨消縄文の枠状文が見られる。3、5、10、12、13、23、27、30も縄文施文の横帯が見られる。4は波状口縁の波頂部で沈線の弧線が見られる。6は横帯上端の沈線が見られる。9は横位の沈線が見られる。11は縄文施文の幾何学文が見られる。16は内文と口唇部に突起が見られる。18は「8」字状の貼付文下に「V」字状の沈線が見られる。19は胴部に斜位の沈線が見られる。21は隆帯の交点に円形の刺突とその直上口唇に突起が見られる。22、24は横帯上端の沈線が見られる。26は外面口唇下に細い沈線が、口唇内面には横位の楕円形刺突が見られる。29は胴部に縄文施文でない幾何学文



第222図 グリッド出土縄文後期土器(4)



第223図 グリッド出土縄文後期土器(5)

が見られる。31は口唇部に突起が見られ、直下に3つの「8」字状の貼付が見られる。

第2種(第226図35~43)

刻みのはいった隆帯かあるいは紐線文が見られる胴部破片で、「8」字状の貼付を持つものを一括した。

37は胴部の一次区画文に付着した弧線が見られる。38は内文が見られる。41は隆帯に接統する縦位の縄文施文の弧線が見られる。42は隆帯直下か

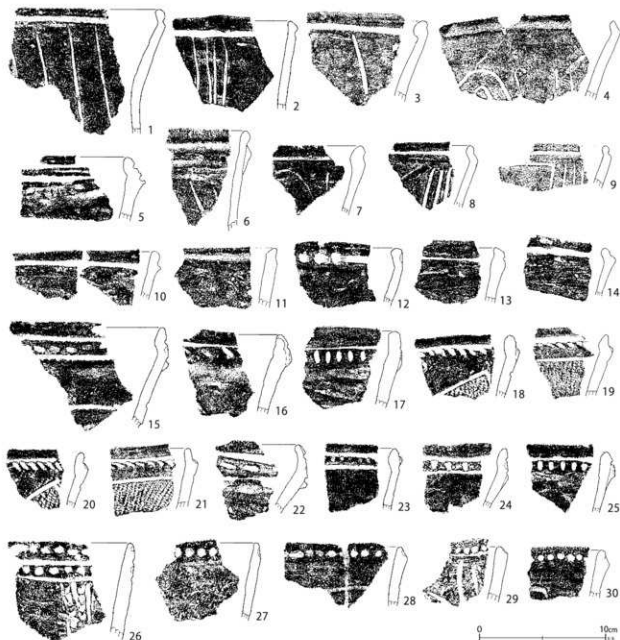
ら縄文が施文されている。

35、36、39、40、43には縄文施文の横帯が見られる。

第3種(第227図1~24)

刻みのはいった隆帯かあるいは紐線文が見られる口縁部破片で、「8」字状の貼付を持たないものを一括した。

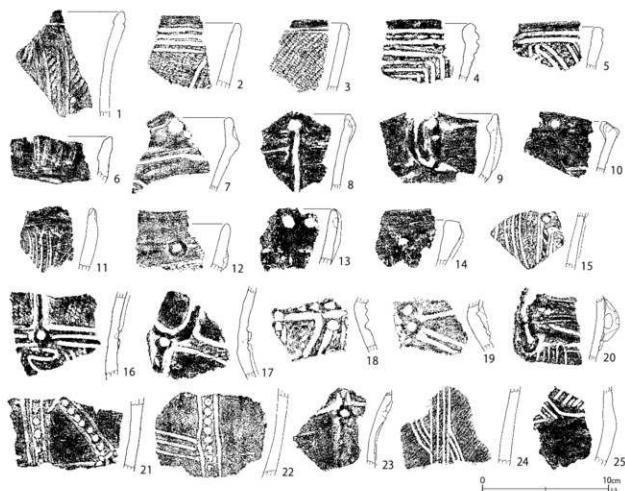
第227図1は口縁部に無文帯が見られ、その下に横位の刻みの入った隆帯が貼り付けられている。縦位の沈線も施されている。2は緩やかな波状口



第224図 グリッド出土縄文後期土器(6)

縁を呈し、口縁部無文帯の下に刻みを加えて擬似的な隆帯を作り出している。その下には横位の沈線と曲線の単位文が認められる。全体に擦痕が見られる。口唇部内面には沈線が見られる。3は口縁部無文帯が見られ、その下に間隔をあけて二条の刻みの加わった隆帯が貼り付けられている。さらに下位には沈線が見られる。口唇内面には沈線が見られる。4は四条の沈線からなる内文を持つ深鉢で口縁部に刻みの入った隆帯が貼り付けられ、下位には縄文の施文された横帯が見られる。隆帯及び口唇部内面にも刻みが見られる。5は口唇部内面がつまみ出されたような形状を示し、口縁部に押圧の入った隆帯が貼り付けられ、下位には縄文の施されたやや幅の狭い横帯が見られる。6は縦位の刻みが入った隆帯が貼り付けられ、下

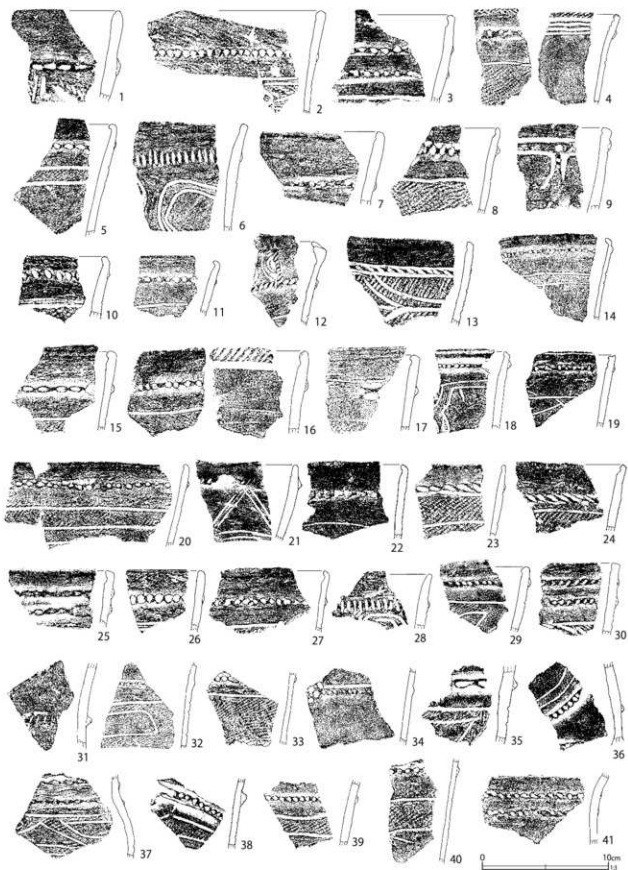
位には二重の沈線による楕円形の単位文が見られる。7は幅広の口縁部無文帯を持ち、下位に押圧の入った隆帯が見られる。口唇部内面には沈線が見られる。8は口縁部無文帯中程に縦位の刻みが入った隆帯が貼り付けられ、下位には、沈線で区画された幅広と考えられる横帯が見られる。口唇部内面には沈線が見られる。9は刻みの入った隆帯が「T」字形に見られる。隆帯の交点には円形刺突が施されている。口唇内面には沈線が見られる。10は口縁部に斜位の刻みが入った隆帯が見られ、下位には縄文が施文された横帯が認められる。口唇部内面は「く」字状を呈している。11も10と同様であるが、横帯に縄文は見られない。12は口縁部に斜位の刻みの入った隆帯が貼り付けられ、この隆帯から口唇部に向けて縦位の隆帯が貼り付けら



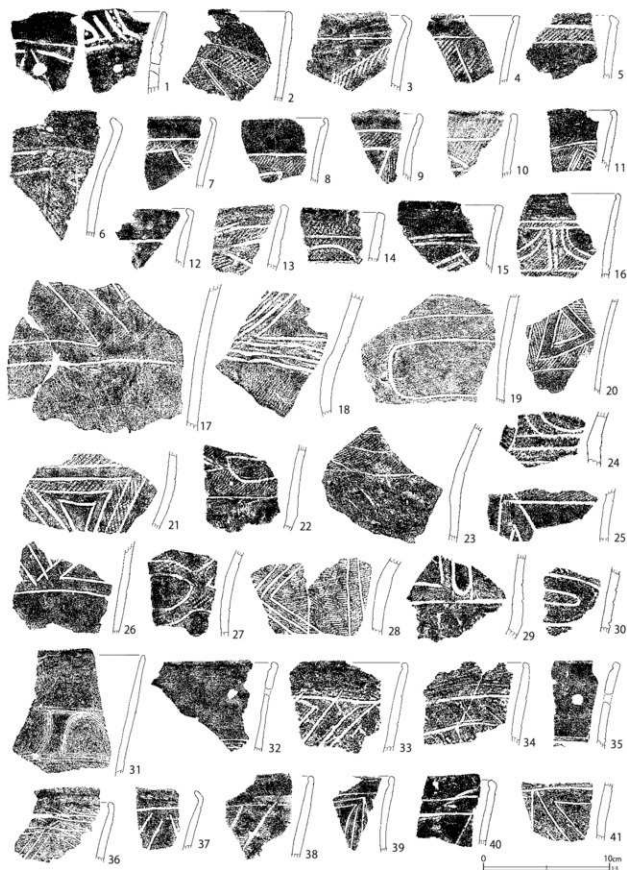
第225図 グリッド出土縄文後期土器(7)



第226図 グリッド出土縄文後期土器(8)



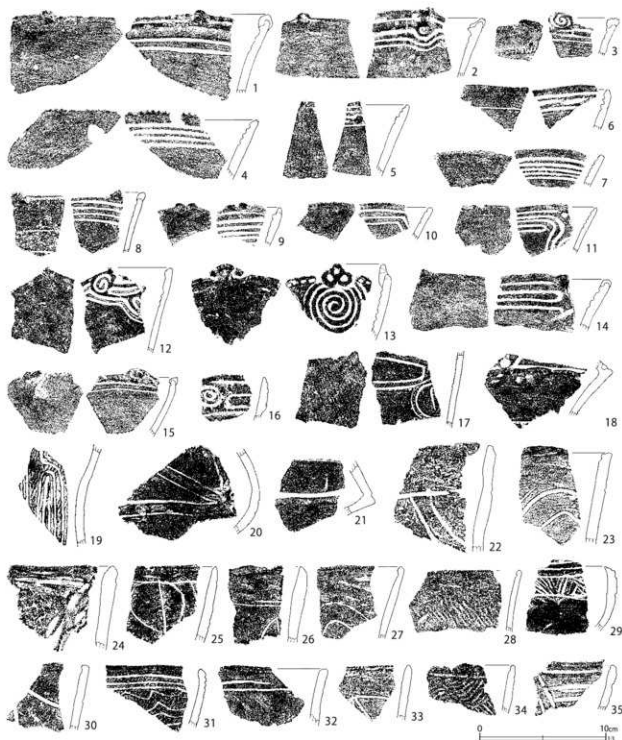
第227図 グリッド出土縄文後期土器(9)



第228図 グリッド出土縄文後期土器(10)

れている。縦位の隆帯横には沈線で半截された二重の楕円形が施され、末端には「凹」形刺突が見られる。口唇部内面は「く」字状を呈し、縦位の隆帯付近では内側に突出が見られる。下位には縄文が施

された横帯が見られる。13は口縁部に沈線で区画され、斜位の刻みが入った擬似的な隆帯が見られる。擬似的な隆帯に接続する二重線で描かれた弧線が上下に見られ、上下の弧線の間にも横位の



第229図 グリッド出土縄文後期土器(11)

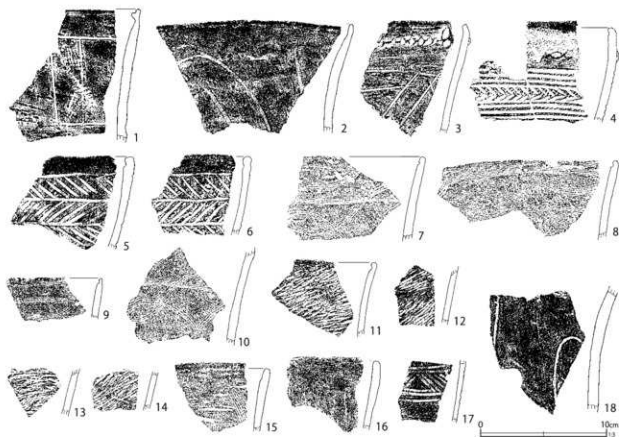
沈線が見られる。横帯の内側は全面的に縄文が施文されている。口唇部内面には沈線が認められる。14は11と同様である。15は口縁部無文帯の中段に横位の押圧が入った隆帯が貼り付けられ、下位には縄文が施文された横帯が見られる。口唇部内面には沈線が認められる。16は口縁部無文帯の中段に縦位の刻みの入った隆帯が貼り付けられ、下位には横位の沈線が見られる。隆帯から下は、擦痕が見られる。口端と口唇部内面には斜位の刻みが見られる。口唇部内面には沈線も見られる。17は15と同様である。18は口縁部に押圧の入った隆帯が貼り付けられ、胴部には間に縄文が施文された二重線で多角形の模様は施されている。口唇部内面は円形に肥厚している。19は隆帯に縦位の刻みが入り、胴部には横位の沈線による区画とこれに接続する斜位の沈線が見られる。20は円形の押圧

を加えた痕跡的な隆帯が見られ、胴部には三条以上の縄文が施文された横帯が廻る。21は沈線による幾何学文が施されている。22は隆帯が脱落した痕跡が見られ、器壁には三角形の押圧が認められる。体部には細い横位の沈線が見られる。23、24は隆帯に斜位の刻みが入り、隆帯直下に沈線で区画された幅広の横帯が二帯以上見られる。

第4種(第227図25~41)

刻みの入った隆帯があるいは紐線文が見られる胴部破片で、「8」字状の貼付を持たないものを一括した。

25は口縁部に隆帯が二条廻り隆帯の上から押圧が施されている。器面には細い単位のミガキが施されている。26は高さの低い隆帯を貼り付けた後、器面にくい込むような刺突によって刺突痕跡周辺に粘土を盛り上げている。隆帯のやや下に二本の

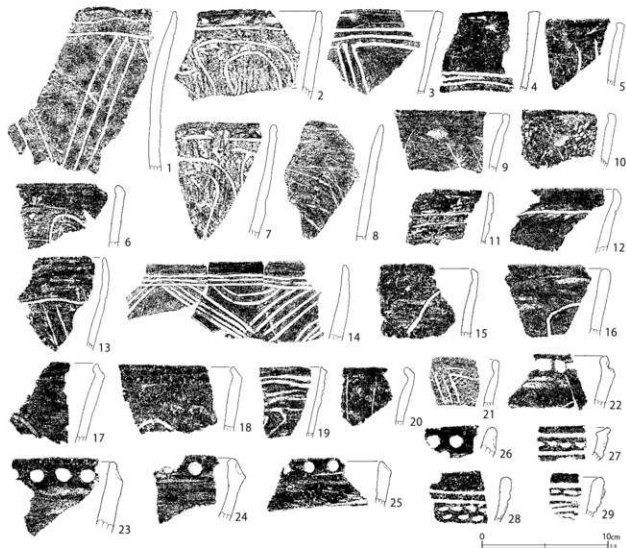


第230図 グリッド出土縄文後期土器(12)

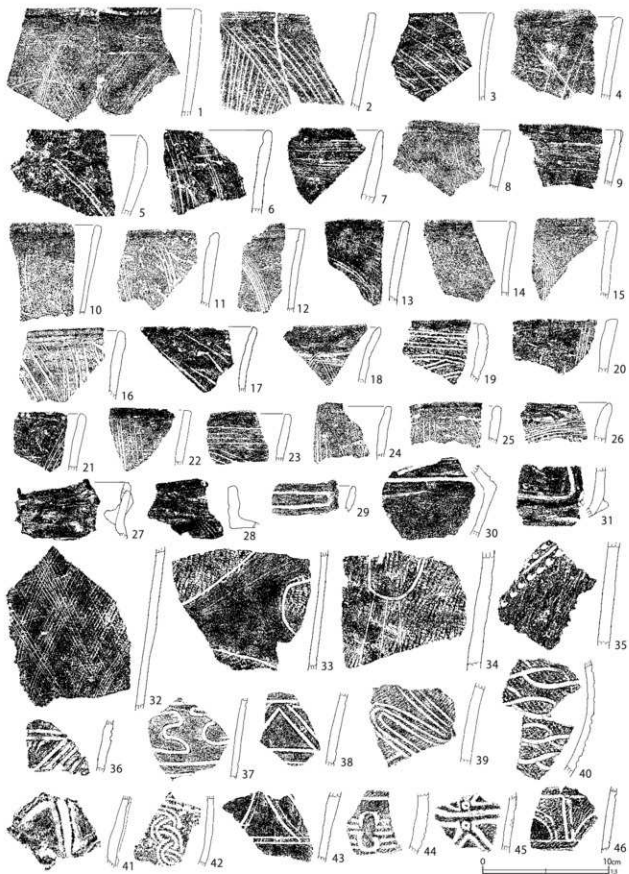
沈線が見られる。27も高さの低い隆帯を貼り付けた後に、刻みを入れている。28は隆帯の下に沈線による曲線的な文様が施され、隆帯上の刻みも同一の工具によって、縦方向に平行に施されている。29は隆帯に斜位の押圧が加えられ、胴部には沈線による模様と磨消縄文が見られる。30は隆帯が二条廻り、隆帯より下位には沈線による文様が描かれ、おそらく磨消縄文が見られる。31は隆帯に縦位の刻みが入る。他の文様要素は見られない。32は細い隆帯に小さな押圧が入り、胴部には縄文が施された横帯と楕円形の棒状文が見られる。33は隆帯に押圧が入り、胴部には沈線で区画された幅

広の横帯が見られる。34は横帯に斜位の押圧が入り、縄文が施された横帯が廻る。35は隆帯に横位の刻みが入り、胴部には磨消縄文の幾何学文が見られる。36は斜位の隆帯に押圧が入り、隆帯に沿って二本の沈線で区画された縄文帯が見られる。37は二本の隆帯に押圧が入り、横位の沈線に接続した弧線が見られる。38は斜位の隆帯に刻みが入り、隆帯と並行して沈線で区画された縄文帯が見られる。39、40は隆帯に押圧が入り、体部には縄文で施文された横帯が廻る。41は二重の隆帯に押圧が入る。

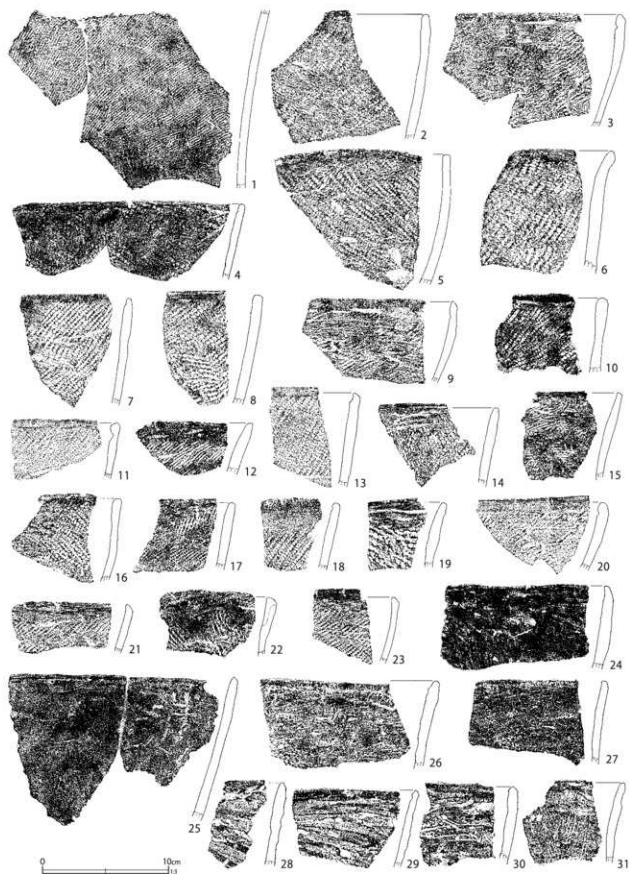
第5種(第28図1～16)



第231図 グリッド出土縄文後期土器(13)



第232図 グリッド出土縄文後期土器(14)



第233図 グリッド出土縄文後期土器(15)

紐線文を持たない磨消縄文が見られる口縁部破片を一括した。

1は口唇内面に文様を持ち、口縁外面に縄文の施文された横帯と斜位の沈線が見られる。2～15は沈線で幾何学文が描かれ、その中に縄文が施文されている。16は二重の沈線で画された文様帯の中に、縦位の二次区画と弧線文が施されている。文様帯の中は、弧線の内側以外が縄文施文されている。

第6種(第228図17～30)

紐線文を持たない磨消縄文が見られる胴部破片を一括した。

17、18、20、21、25、26、28は、三角形の幾何学文が施されている。19、22～24、27、30は楕円形の文様が描かれている。

第7種(第228図31～41)

5種と同様であるが磨消縄文を持たない口縁部と胴部の破片を一括した。

33、36～41は三角形の幾何学文が施されている。

31は沈線で画された文様帯の中で上下交互に一次区画文に付着する弧線文が描かれている。

第8種(第229図1～15)

内文が見られる深鉢と浅鉢を一括した。いずれも外面は無文であり、口唇上に三～七単位程度の貼付文が見られる。円形の貼付文内面には二～数本の沈線を主体とした文様が見られる。12、13は、貼付文の位置の口縁内面に、沈線で円形の文様が描かれている。

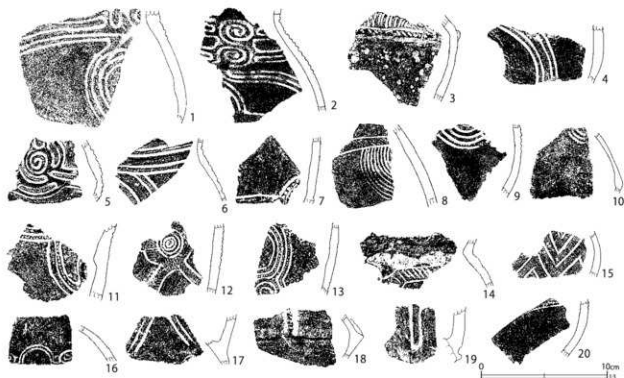
第9種(第229図16～35)

内文が見られないその他の深鉢と浅鉢を一括した。

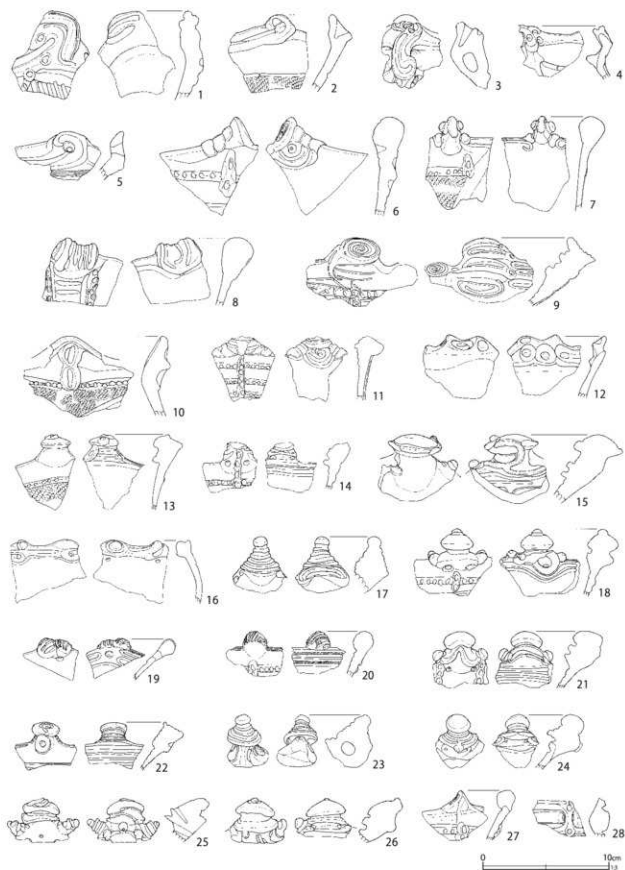
第10種(第230図1～18)

胎土が異質な土器群を一括した。

1は口縁部の文様帯に縦位の沈線を施し、縄文を充填している。2は二本の曲線で文様を描いている。3は口縁部に縦位の刻みの入った隆帯を貼り付け「8」字状の貼付文を持ち、胴部には三角形の幾何学文を施す。4は横帯に交互に斜位の沈線



第234図 グリッド出土縄文後期土器(16)



第235図 グリッド出土縄文後期土器(17)

を矢羽根状に施している。5、6は胴部に横位の沈線を施し沈線間に矢羽根状沈線を施す。6は5と同一個体である。7～10は櫛歯状工具による集合沈線で横位の一次区画文を描き、さらに横位に弧状の文様を施す。11～14は口唇から体部にかけて全面に撚糸文を施す。15は沈線で大きな弧状の文様を描く。16は口縁に無文帯を持ちその下に格子目を施す。

第5類土器(第231～235図)

後期前葉の土器群を一括した。

第1種(第231図1～21)

沈線文の深鉢の口縁部を一括した。

1～21はいずれも沈線を主体とする文様を持つ深鉢の破片である。多くは三角形の幾何学文が施され、縄文が施文されるものとされないものが見られる。2、6、7、16のように、曲線的な文様のものも見られる。

第2種(第231図22～29)

円形刺突列のある口縁部を一括した。

22～26は口縁部外面に円形刺突列、27～29は楕円形刺突列が口縁部沈線直下に見られる。

第3種(第232図1～26)

櫛歯状条線を持つ口縁の深鉢、壺、浅鉢を一括した。1～26は胴部外面に櫛歯状工具による条線が見られる。条線は数本単位で施され斜位で密なものが多いが横位や疎なものも見られる。

第4種(第232図27～46)

その他の深鉢を一括した。

27～46は、各種の模様は施された土器破片であり、27～31は口縁部、32～46は胴部破片である。32は櫛歯状工具による格子目状の沈線が見られる。33、34は沈線で曲線状の模様が施されている。35は竹管による斜位の刺突列が見られる。36、38は三角形の幾何学文が見られ、37、39は曲線の模様が施されている。40は横位の沈線による連続的な楕円形の文様が描かれている。

第5種(第233図1～23)

縄文施文の深鉢を一括した。

1～23は縄文のみが施文された深鉢の口縁部破片である。

第6種(第233図24～31)

無文の深鉢口縁部を一括した。

24～31は無文の深鉢口縁部破片である。

第7種(第221図1、第234図1～20)

注口土器およびその破片を一括した。

第221図1は堀之内2式の注口土器である。二単位の橋状把手を持ち、体部には沈線や刺突列による区画や、渦巻文が施されている。底部には網代痕が残存している。石英・長石を多量に含む、特徴的な胎土をもつ。

第234図1～20は注口土器の破片である。

第8種(第235図1～28)

把手類を一括した。

第6類土器(第236図1、2、4、7、8、第238～244図22)

加曾利B1式土器を一括した。

第1種(第236図1、第238図1～18)

内文を持ち口唇部に円形刺突列のある深鉢を一括した。

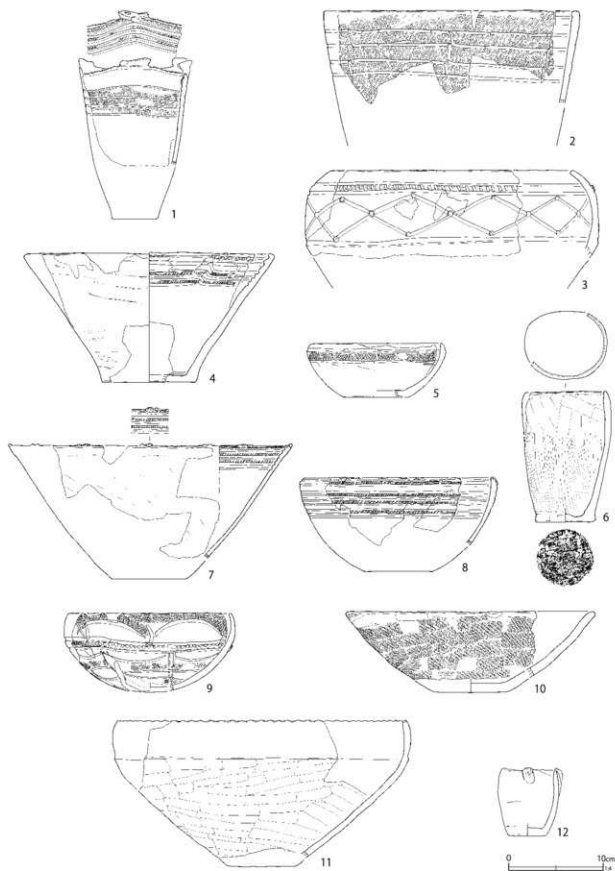
第236図1は三単位の把手を持つ加曾利B1式の深鉢で、同じく三単位の小波状口縁を有している。胴部上半外面にはLRの磨消縄文による横帯文が施されている。口縁部内面には円形刺突列と刻み列による内面文様が施されている。

第238図1～18は、内文を持ち口唇部内面に円形刺突列を持った深鉢である。多くのものでは、外面に横帯文が見られる。横帯文には区切り文が見られる場合と見られない場合がある。口唇部は原則として小波状である。5、10、12、14、15、17、18は波状口縁である。

第2種(第236図4、第238図19～33)

内文を持ち口唇部に円形刺突列のある浅鉢を一括した。

第236図4は加曾利B1式の鉢で、口縁部内面には円形刺突列と刻み列による内面文様が施され



第236図 グリッド出土縄文後期土器(18)

ている。

第238図19～33は、内文を持ち口唇部内面に凹形刺突列をもった浅鉢である。多くの場合、口縁は「く」字に屈曲し、外面はミガキよりも擦痕が見られる。外面に横帯が見られるものは少ない。内文は、深鉢に比べて単位文が見られる場合が多い。

第3種(第239図1～19)

内文を持ち口唇部に貼付文のある深鉢を一括した。

1～19は内文を持ち口唇部に貼付文のある深鉢である。外面には横帯が見られる。横帯には区切り文が見られる場合がある。口唇部は小波状を呈するものもある。

第4種(第236図7、第239図20～33)

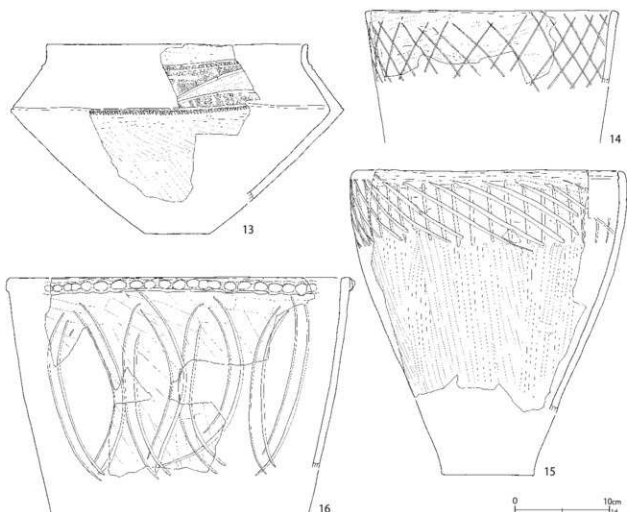
内文を持ち口唇部に貼付文のある浅鉢を一括した。

第236図7は加曾利B1式の鉢で、口縁部内面には凹形刺突列と刻み列による内面文様が施されている。

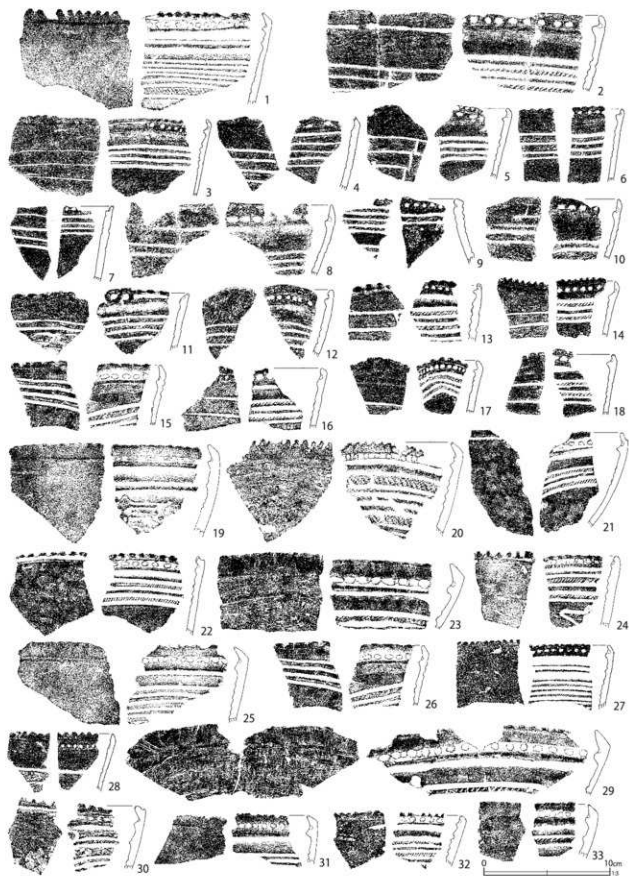
第239図20～33は内文を持ち口唇部に貼付文のある浅鉢である。外面は擦痕が見られる場合とミガキが見られる場合がある。

第5種(第240図1～25)

内文を持ち、凹形刺突や貼付文のない深鉢を一括した。1～25は内文を持ち、凹形刺突や貼付文のない深鉢である。外面には横帯文が見られるこ



第237図 グリッド出土縄文後期土器(19)



第238図 グリッド出土縄文後期土器(20)

とが多く、横帯文には区切り文を伴うものもある。平縁のことが多いが、4、16のように波状口縁のものもある。

第6種(第240図26～42)

内文を持ち、円形刺突や貼付文のない浅鉢を一

括した。26～42は内文を持ち、円形刺突や貼付文のない浅鉢である。外面は擦痕やミガキが見られる。27のように口端部に面を持ち太い沈線を施したのも見られる。

第7種(第241図)



第239図 グリッド出土縄文後期土器(21)



第240図 グリッド出土縄文後期土器(22)

内文を持ち円形刺突列や貼付文の有無がわからない鉢類胴部破片を一括した。

1～25は、内文を持ち円形刺突列や貼付文の有無がわからない鉢類胴部破片である。多くのものは、内文が大きく湾曲しているため、鉢、もしくは浅鉢と考えられる。1、5、7、8のように単位文を持つものも見られる。外面は、横帯文を持つものは見られないが、擦痕やミガキが認められる。

第8種(第242図1～21)

内文が見られない深鉢を一括した。

1～21は、内文が見られない深鉢である。外面

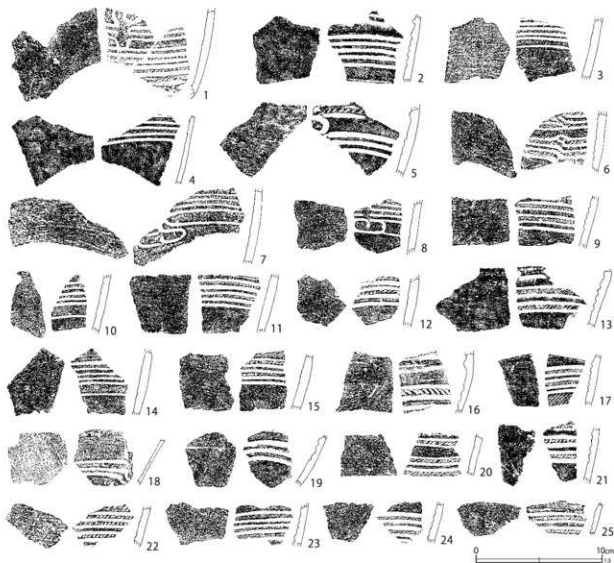
には横帯文が見られ、縄文や刻みが施されている。口端部が「く」字に折れ曲がるものや、口唇に面を持ち沈線が施されるものもある。

第9種(第236図8、第242図22～61)

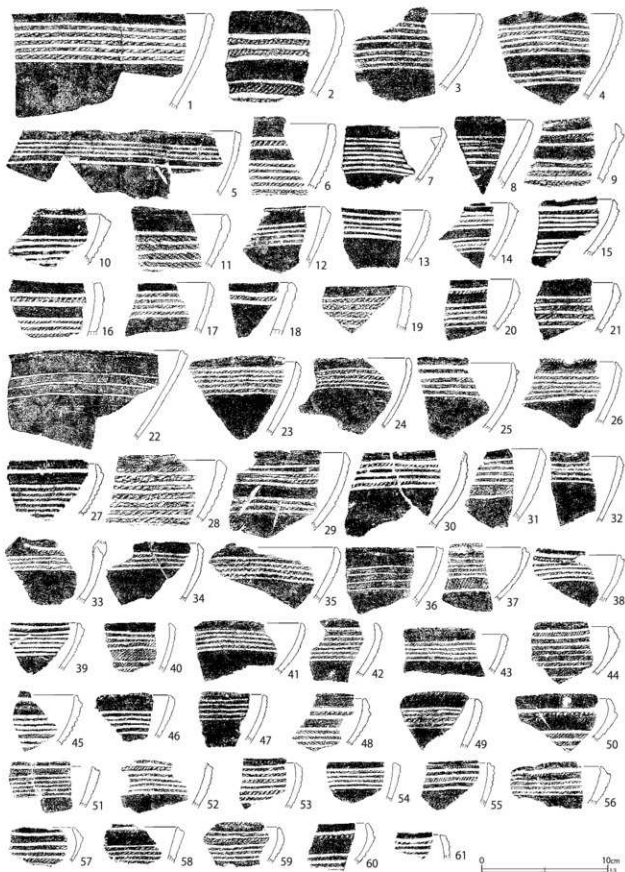
内文が見られない浅鉢を一括した。

第236図8は加曽利B1式の浅鉢で、口縁部には刻み列による横帯文が施されている。

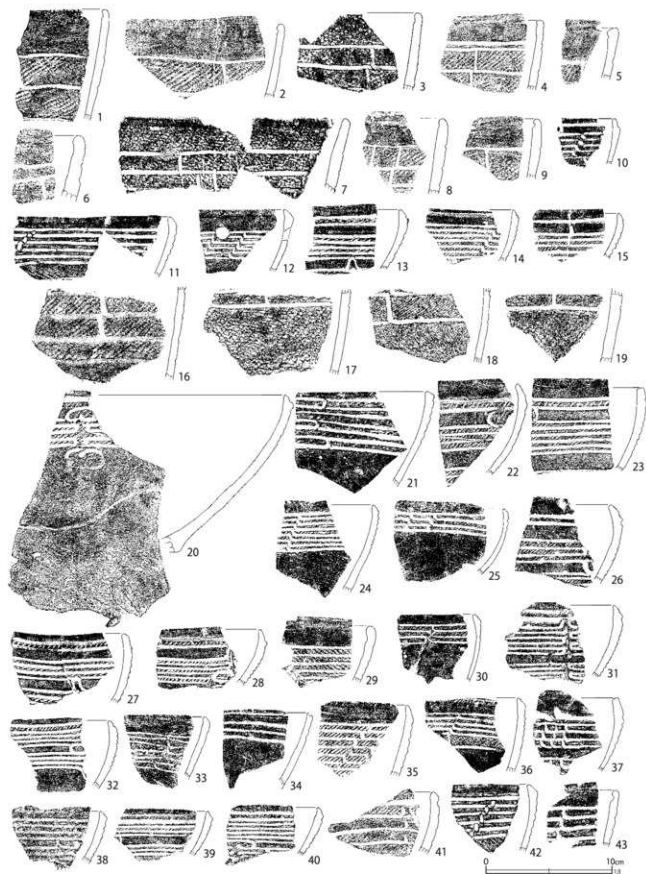
第242図22～61は、内文が見られない浅鉢である。外面には横帯文が見られ、縄文や刻みが施されている。口端部が「く」字に折れ曲がるものや、口唇に面を持ち沈線が施されるものもある。



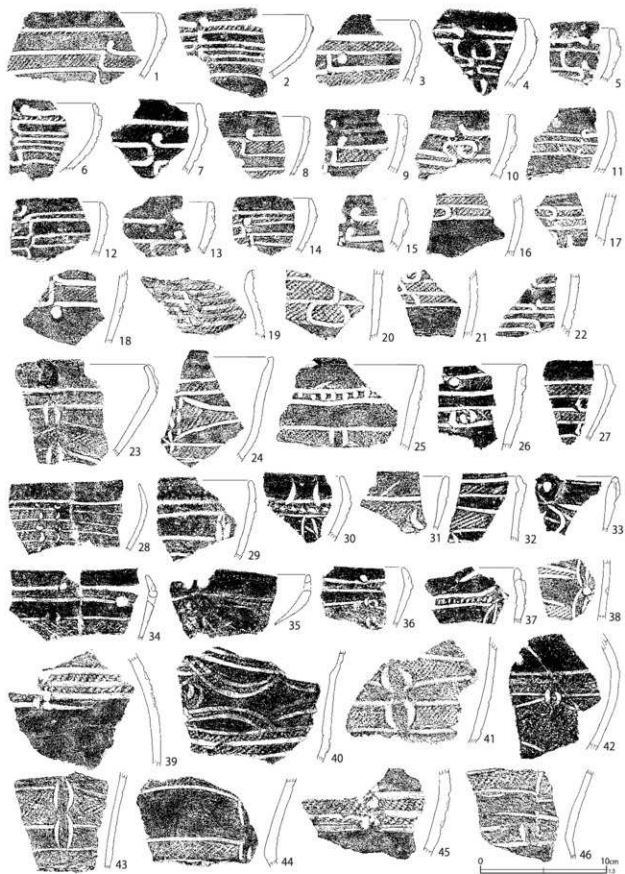
第241図 グリッド出土縄文後期土器(23)



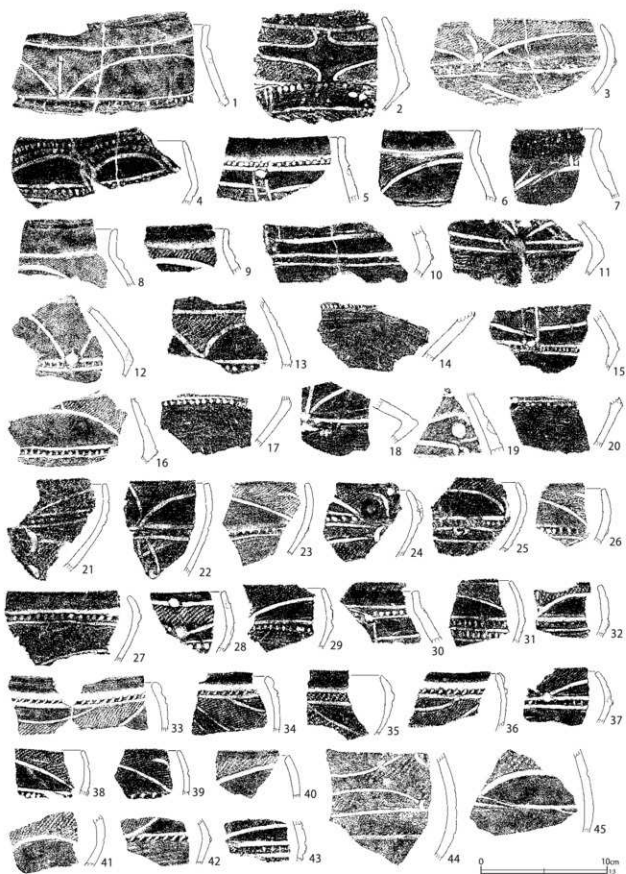
第242図 グリッド出土縄文後期土器(24)



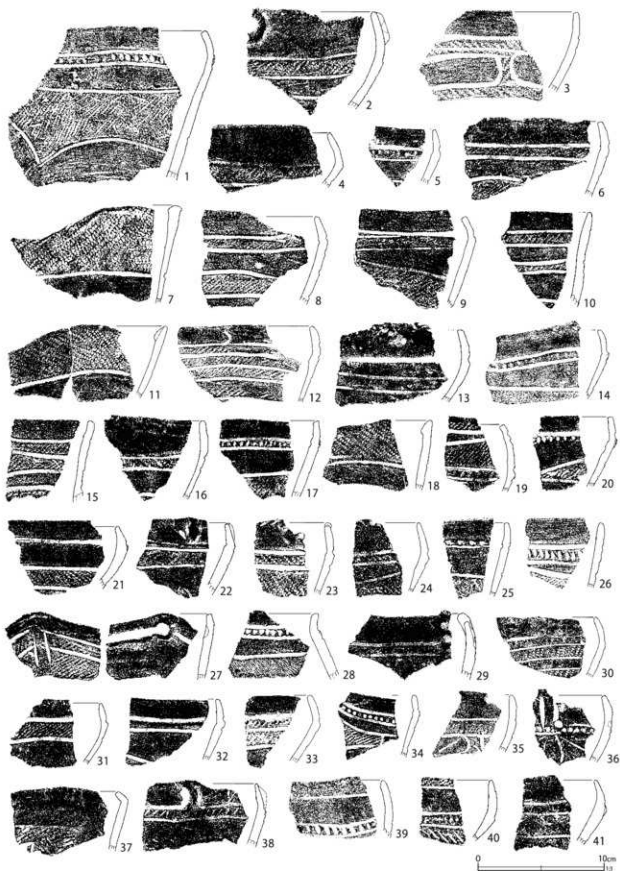
第243図 グリッド出土縄文後期土器(25)



第244図 グリッド出土縄文後期土器(26)



第245図 グリッド出土縄文後期土器(27)



第246図 グリッド出土縄文後期土器(28)

第10種(第236図2、第243図1～19)

横帯文を持ち、区切り文が見られる深鉢を一括した。

第236図2は加曾利B 1式の深鉢で、口縁部にはL R縄文による横帯文と区切り文が施されている。口縁部内面には内面沈線が施されている。

第243図1～19は横帯文を持ち区切り文が見られる深鉢である。1～15は口縁部、16～19は胴部破片である。1～9は幅狭の横帯文が見られ、10～15は幅狭の横帯文が見られる。

第11種(第243図20～43)

横帯文を持ち、区切り文が見られる浅鉢を一括した。20～43は横帯文を持ち区切り文が見られる

浅鉢である。いずれも口縁部破片である。区切り文の他、各種の単位文も認められる。

第12種(第244図1～22)

区切り文がやや新しい特徴を示す鉢類を一括した。1～22は、横帯文を持ち、横帯文に施された区切り文がやや新しい特徴を持つものである。

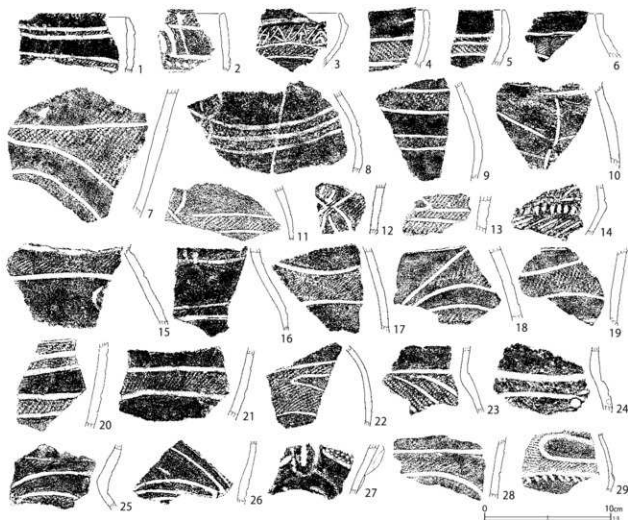
第7類土器(第236図3、6、9～12、第237図13、第244図23～第254図)

加曾利B 2式土器を一括した。

第1種(第244図23～46)

括弧文を持つ鉢類を一括した。

23～46は、横帯文を持ち、横帯文に括弧文が施された鉢類である。



第247図 グリッド出土縄文後期土器(29)

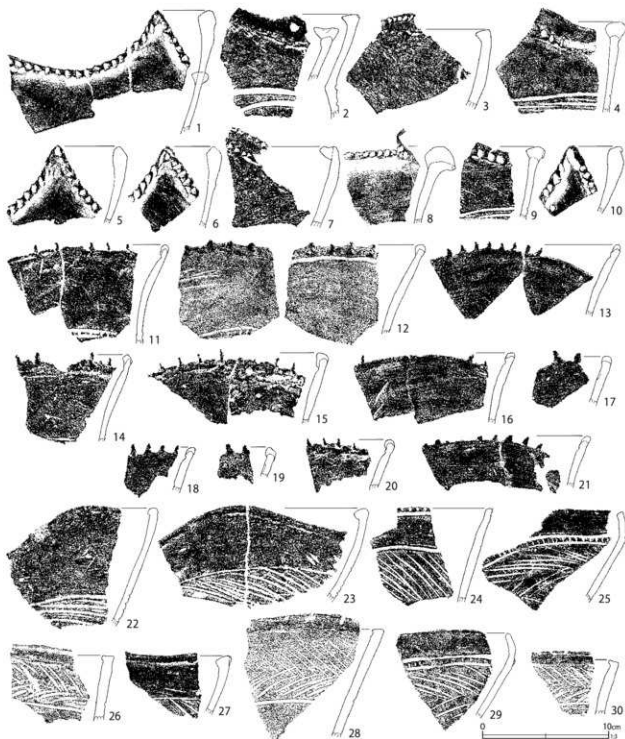
第2種 (第236図9、第237図13、第245図)

弧線を持ち磨消縄文が見られるものを一括した。

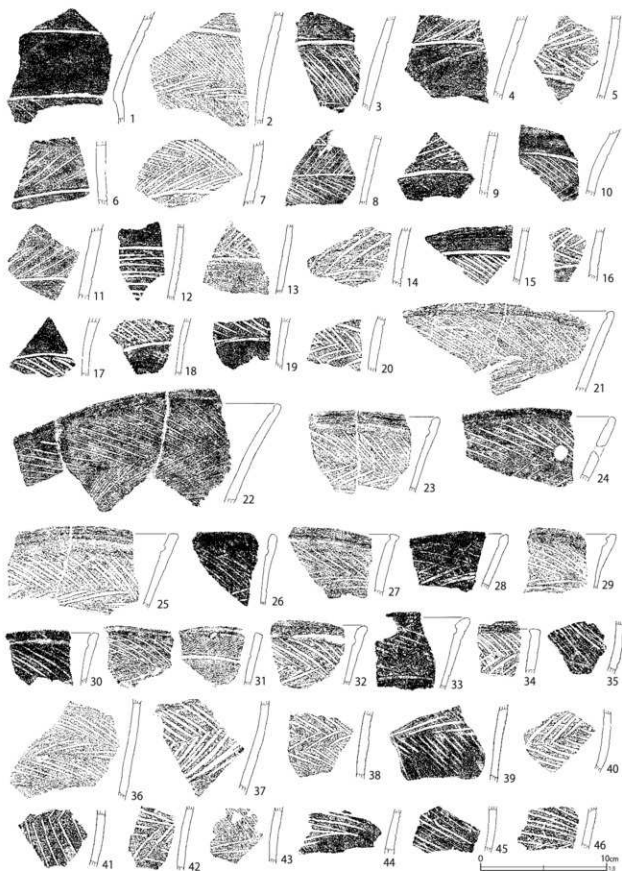
第236図9は加曾利B 2式の浅鉢で、口縁部にはL Rの磨消縄文によるレンズ状文が施されている。

。胴部にはL Rの磨消縄文によるレンズ状文と括弧文が施されている。

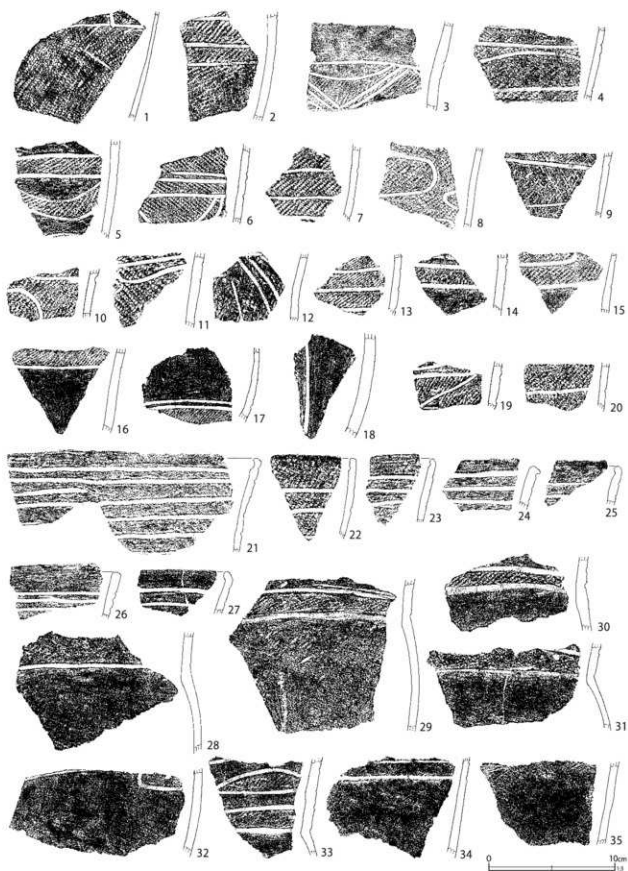
第237図13は加曾利B 2式のソロバン玉形の浅鉢で、口縁部にはL Rの磨消縄文によるレンズ状



第248図 グリッド出土縄文後期土器(30)



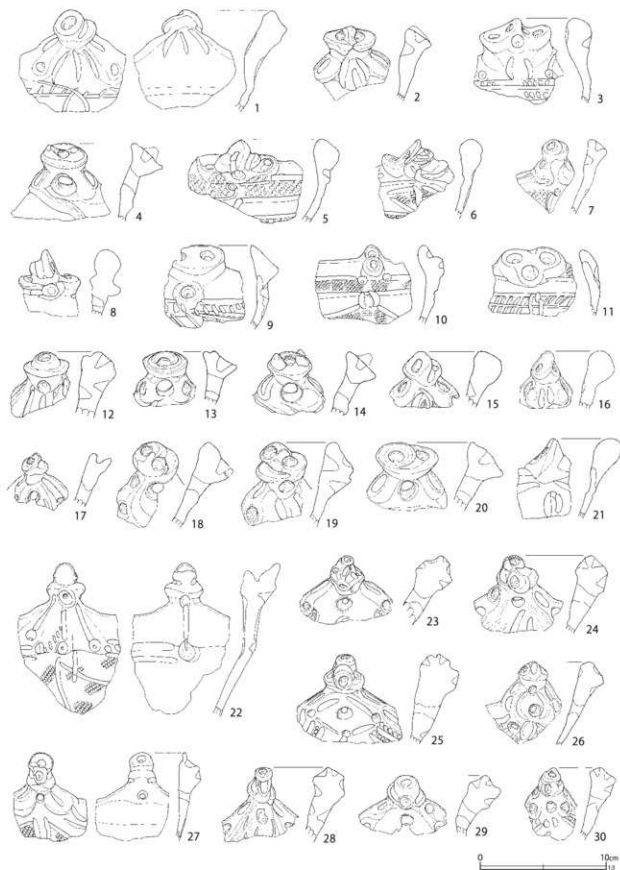
第249図 グリッド出土縄文後期土器(31)



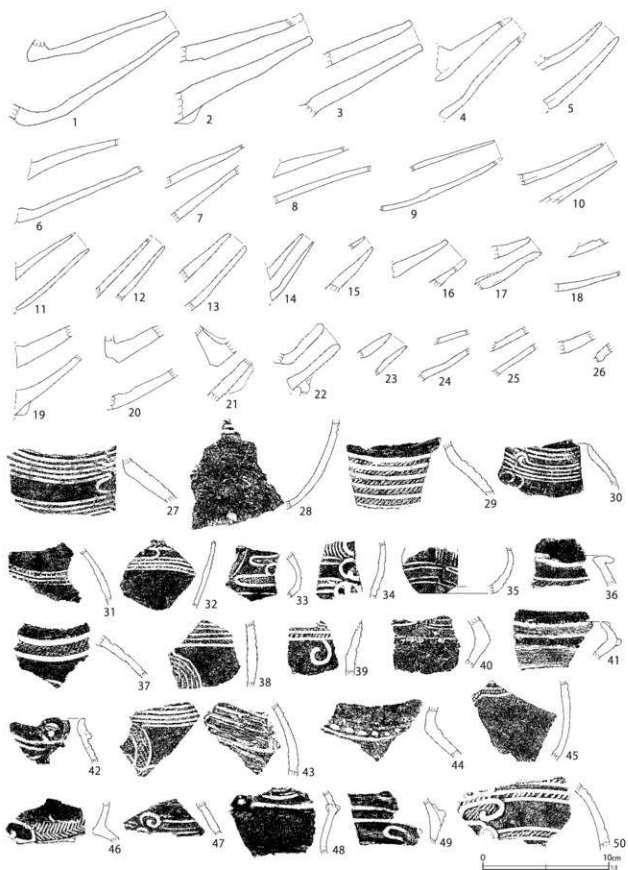
第250図 グリッド出土縄文後期土器(32)



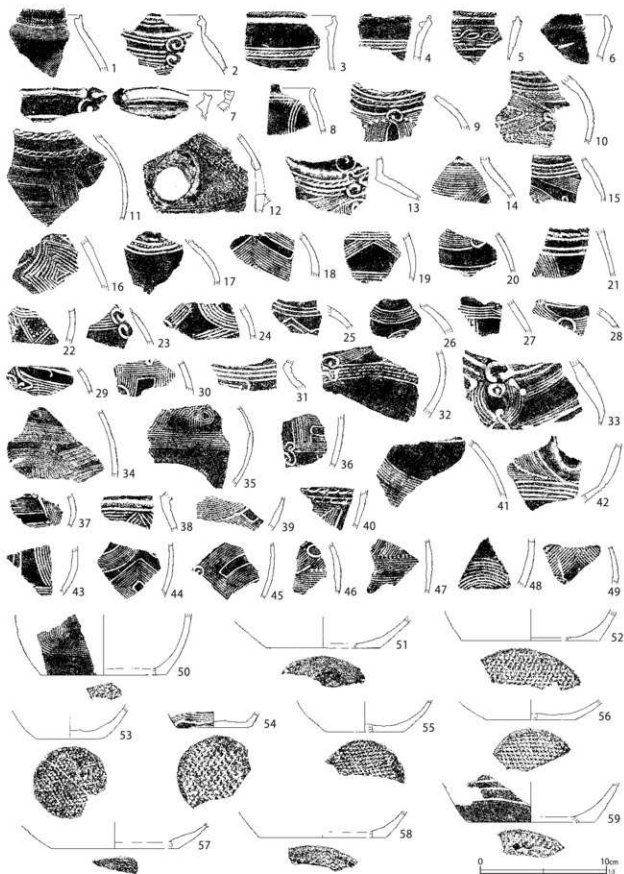
第251図 グリッド出土縄文後期土器(33)



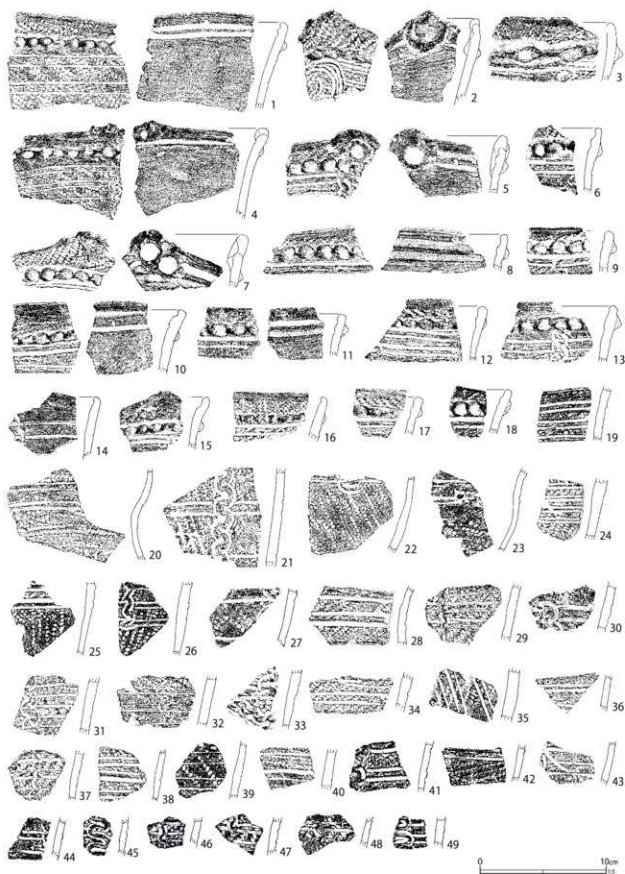
第252図 グリッド出土縄文後期土器(34)



第253図 グリッド出土縄文後期土器(35)



第254図 グリッド出土縄文後期土器(36)



第255図 グリッド出土縄文後期土器(37)

文が施されている。

第245図は弧線文を持ち、磨消縄文が見られるものである。

第3種 (第246、247図)

磨消縄文が見られるものを一括した。

第246、247図は磨消縄文が見られる鉢類である。

第4種 (第248図1～21)

口唇部に突起または刻みの入った貼り付けを持つものを一括した。

1～21は口唇部に突起あるいは刻みの入った貼り付けが見られるものである。

第5種 (第248図22～30)

口縁部に矢羽根状沈線が施された文様帯を持つものを一括した。

22～30は口縁部に矢羽根状沈線が施された文様帯を持つものである。矢羽根状沈線の上下は、一次区画文として横位の沈線で区画されている。

第6種 (第249図)

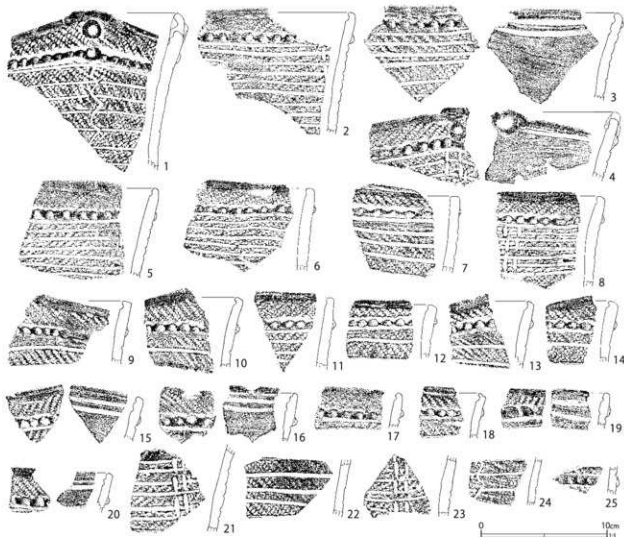
矢羽根状沈線を持つものを一括した。

第249図は矢羽根状沈線を持つものである。第5種とは異なり一次区画文を持たないものである。

第7種 (第250図1～20)

いわゆる中妻系列を一括した。

1～20はいわゆる中妻系列およびそれに近縁な



第256図 グリッド出土縄文後期土器 (38)

土器類である。幅広く縄文施文が認められるものと中妻系列に胎土が近似したものである。

第8種(第250図21~35)

遠部三類を一括した。

21~35は遠部三類および胎土が近似したものである。

第9種(第236図3、6、10~12、第251図)

その他のものを一括した。

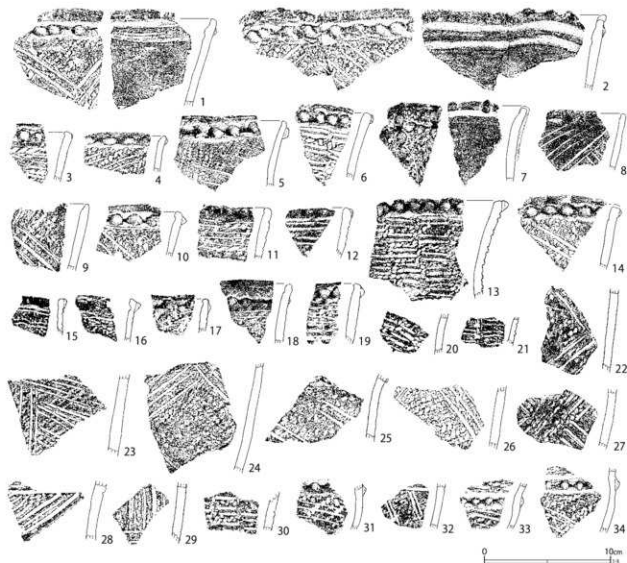
第236図3は加曾利B2式の鉢で、口縁部には円形刺突と沈線による菱形の文様が施されている。6は堀之内2式~加曾利B1式の無文の壺で、底

部には網代痕が残存している。口縁部の平面形は楕円形である。10は加曾利B2式の浅鉢で、口唇部がやや外反しており、体部にはR L縄文が施されている。11は加曾利B2式の無文の浅鉢で、口唇部には刻み列を有し、口縁部に段をもっている。12は堀之内2式のミニチュア土器の壺で、口縁部には三単位の8字状貼付文を施している。口縁部の平面形は楕円形である。

第251図もその他の土器類である。

第10種(第252図)

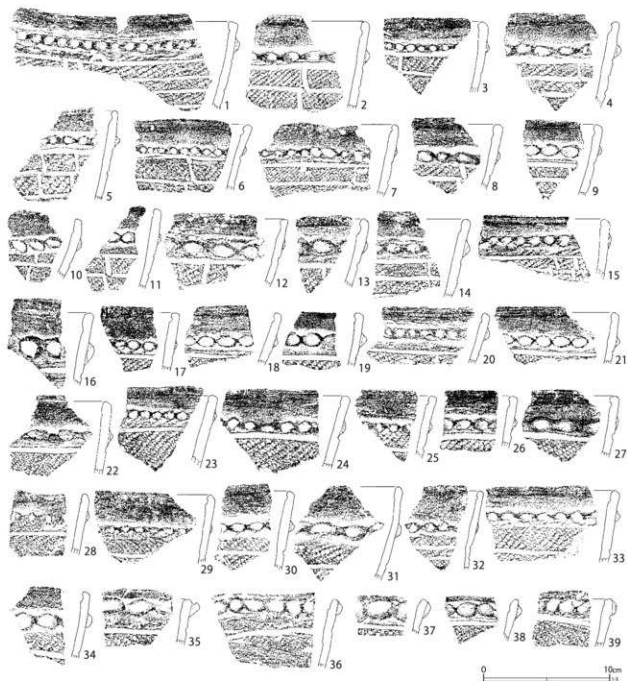
把手類を一括した。



第257図 グリッド出土縄文後期土器(39)

加曽利B 1式の後半から加曽利B 2式にかけての、三単位突起の深鉢波頂部に付けられた把手が主体である。波頂部の下に穴が貫通したものとそうではないものが見られる。主要な系譜毎に説明する。まず、2、20のような左右の穴の輪郭が段差を持った「∞」字状のもの(A)、Aから派生する

ものとして、3のようにAの各穴が二重化したもの(AW)、18、19のようにAの穴がヨコ方向に並ぶのではなく、やや斜位にずれたもの(A 1)、24のように更にずれて縦方向に「8」字形を呈すると共に、円柱状の盤面から「8」字が立体的に浮き上がるようにつくられ、更に19に見られる突起背面



第258図 グリッド出土縄文後期土器(40)

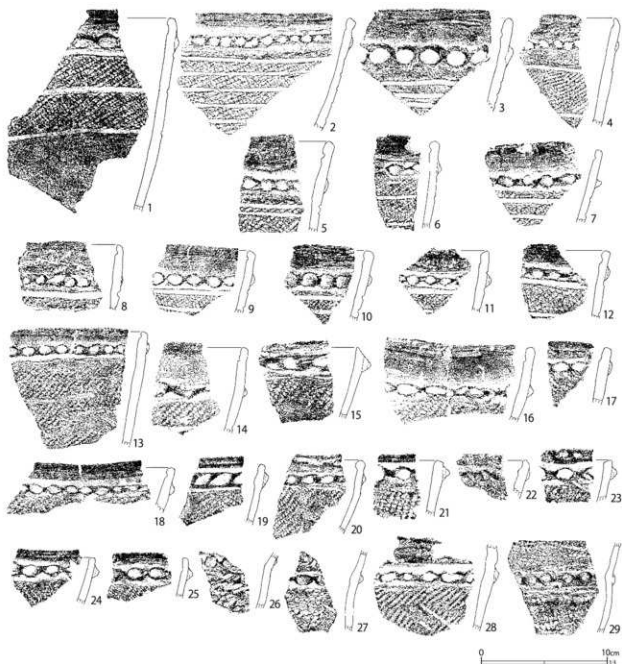
の貫通していない穴が「8」字を構成する二つの穴と等価な形状になっているものが見られる(A2)。Aに続くものとして、15のように、Aでは段差を持っていた左右の穴の一方が各々独立した円柱の本口面につき、下位の円柱の上に、少し横にずれて上位の円柱が位置する形状になったもの(B)、Bから派生するものとして、1、7、17、の

ように、下位の円柱の穴が消失したもの(B1)がある。続いて、16のように突起が先鋭化し側面の穴がほぼ左右対称化したもの(C)、更に片側の穴が消失したもの(D)へと続く。

第11種(第253、254図)

注口土器の破片を一括した。

第8類土器(第237図16、第255～262図)



第259図 グリッド出土縄文後期土器(41)

いわゆる紐線文土器を一括した。

第1種(第255図)

半截竹管を使用したものを一括した。

1～49は、口縁部にやや細い紐線文を持ち、半截竹管を使用した横帯文が施され、胴部に垂下コンパス文が描かれているもの。口縁部まで縄文が施文されている。原則的に波状口縁である。口唇内面には、一～二条の沈線が廻る。焼成が良好で、端正につくられている。

第2種(第256図)

第1種に似るが半截竹管を使用しないものを一括した。1～25は、第1種に類似するが、半截竹

管を使わずに、沈線で文様を施したものである。口縁部まで縄文が施されている。原則的に波状口縁である。第1種に見られた垂下コンパス文は、半截竹管を使用していないため、垂下蛇行文か垂下単沈線文に置き換えられている。

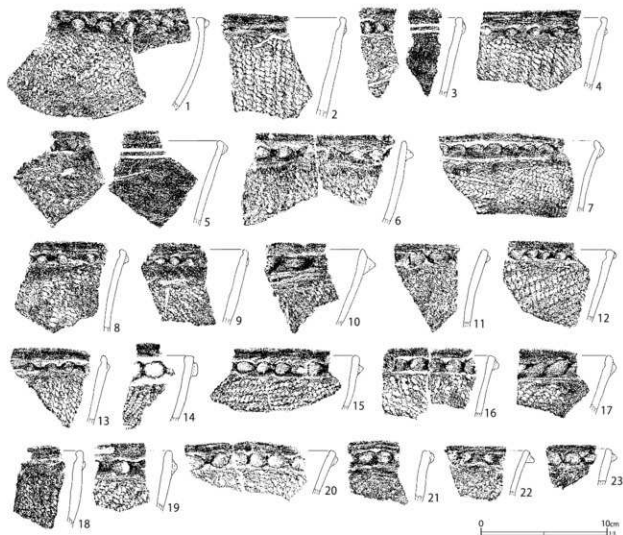
第3種(第257図)

半截竹管を使用し、斜位あるいは横位の短沈線が施されているものを一括した。

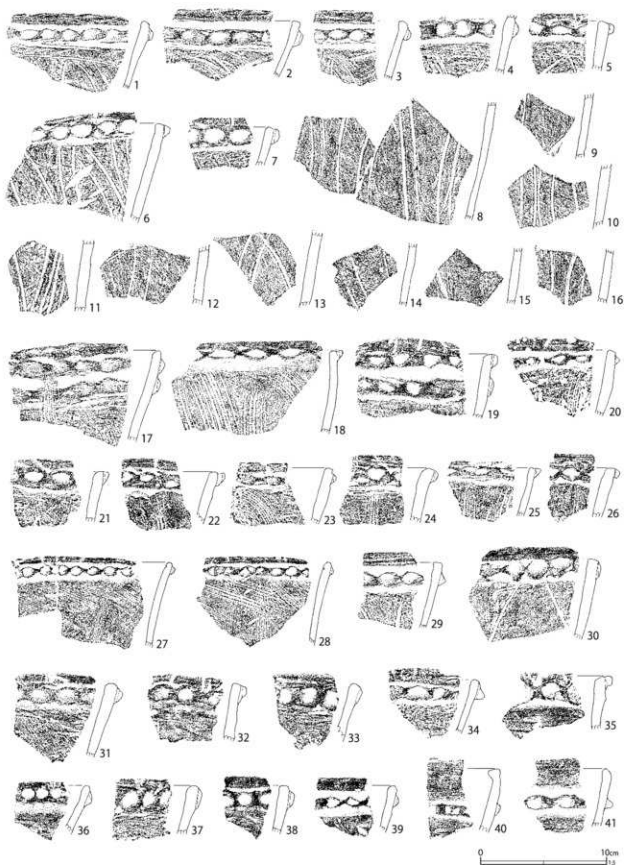
1～34は、半截竹管を使用し、斜位あるいは横位の短沈線が施されているものを一括した。

第4種(第258図1～15)

区切り文を持つ横帯文を一括した。



第260図 グリッド出土縄文後期土器(42)



第261図 グリッド出土縄文後期土器(43)

1～15は、横帯文を持ち、区切り文が見られるものである。

第5種 (第258図16～39)

沈線と縄文が見られるものを一括した。

16～39は、沈線と縄文が見られるものである。

第6種 (第259図1～12)

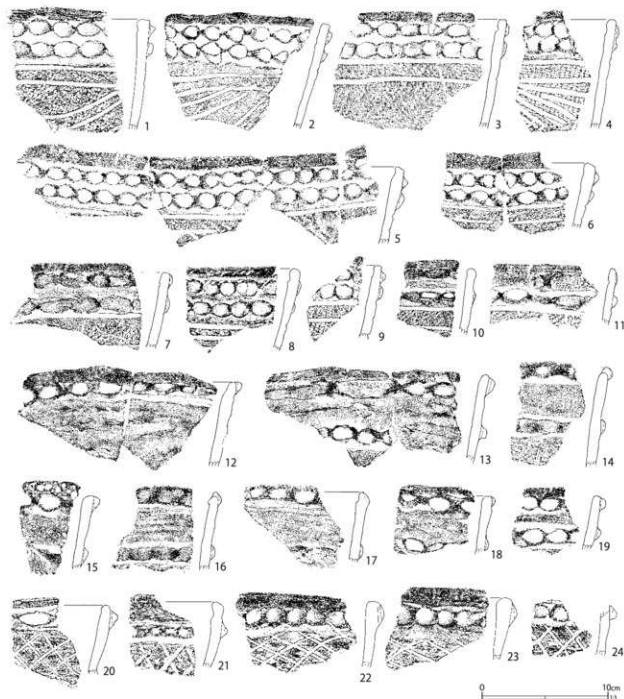
横帯文をもつものを一括した。

1～12は横帯文が見られるものである。

第7種 (第259図13～29)

縄文施文のものを一括した。

13～29は、沈線が見られず縄文が施文されているものである。



第262図 グリッド出土縄文後期土器(44)

第8種(第260図)

縄文施文で、紐線が口縁に近い付着しているものを一括した。

1～23は縄文施文で、紐線が口縁に近い付着しているものである。

第9種(第237図16、第261図1～16)

二重線対弧のものを一括した。

第237図16は加曾利B 2式の紐線文系の深鉢で、口唇部に太い紐線を貼り付け、口縁部から胴部には弧状の沈線が施されている。

第261図1～16は口縁部に紐線文を持ち、紐線文の直下から比較的大きな二重線の対弧が施文されるものである。地文に縄文は見られず、擦痕が施されている。

第10種(第261図17～26)

櫛歯状工具による対弧のものを一括した。

17～26は、口縁部に一重もしくは二重の紐線文をもち、紐線文の直下から櫛歯状工具による集合沈線で比較的大きな対弧が、施文されるものである。地文に縄文は見られず、擦痕が施されている。

第11種(第261図27、28)

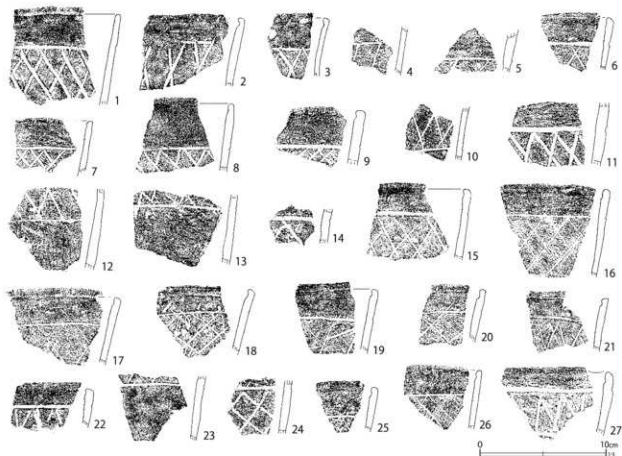
櫛歯状工具による格子のものを一括した。

27、28は櫛歯状工具による集合沈線を格子状に施したものである。27、28は接合しない同一個体と考えられる。地文に縄文は見られず、擦痕が施されている。口唇内面には一条の沈線が見られる。

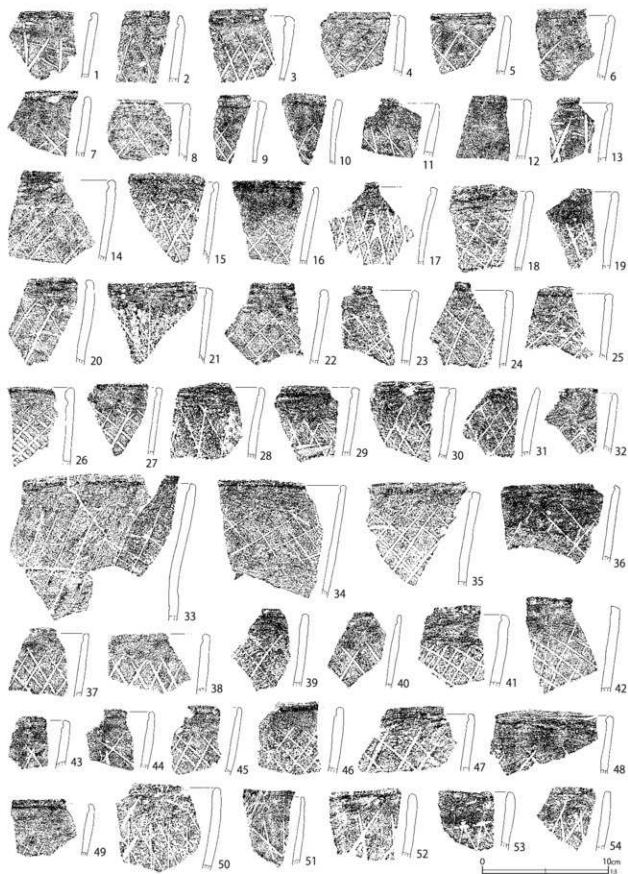
第12種(第261図29、30)

単沈線による縦位弧線のものを一括した。

29、30は単沈線で比較的大きな縦位の弧線が描かれている。一本置きに傾斜の方向を変えて波状の効果を出している。地文には縄文は見られず、擦痕が施されている。口唇部内面には沈線は見ら



第263図 グリッド出土縄文後期土器(45)



第264図 グリッド出土縄文後期土器(46)

れない。

第13種(第261図31~41)

胴部が無文のものを一括した。

31~41は、口縁部に紐線文が見られ、胴部には文様が見られない破片である。

第14種(第262図1~11)

二重紐線のものを一括した。

1~11は、口縁部に紐線文が相互に接して二重に見られるものである。地文には縄文が施され、胴部には横帯文や弧線文が見られる。

第15種(第262図12~19)

無文帯を持つ二重紐線のものを一括した。

12~19は、二重の紐線を持ち、紐線の間に無文帯を持つものである。紐線から下は擦痕が施され、大きな対弧が見られるものがある。

第16種(第262図20~24)

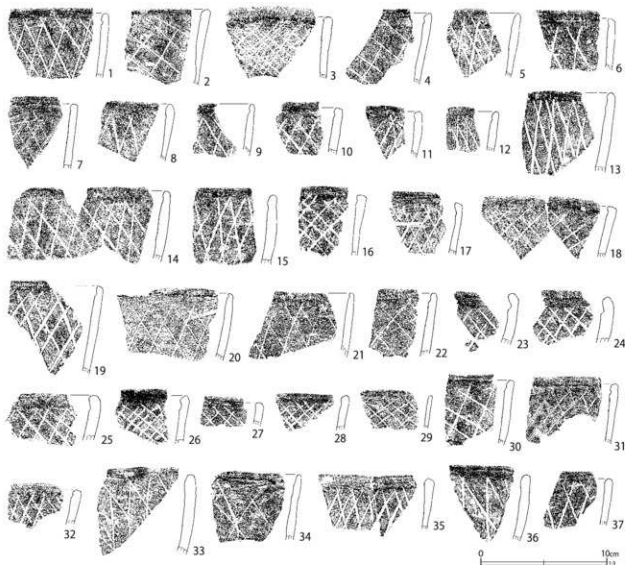
格子目のものを一括した。

紐線の下に沈線の格子が見られる。

第9類土器(第237図14、15、第263~266図)

いわゆる格子目文土器を一括した

細別については、地の擦痕の有無(1:擦痕無し、2:擦痕有り)、口唇部内面の沈線の形状(ア:明瞭、



第265図 グリッド出土縄文後期土器(47)

イ:浅く幅広、ウ:段差、エ:細い線、オ:ほぼ見られない)から分類した。また、ミガキが見られないものは「J」を付した。

第1種(第263図1～5)

充填格子のものを一括した。

1～5は、口縁部に無文帯があり、その下に一次区画文を二本描き、その後に一次区画文の中を格子で充填したものである。(擦痕)→一次区画→格子→ミガキの順で施文と調整が行われている。口縁直下は無文帯で丁寧に磨かれており、格子は口縁からやや下がった位置に施されている。内面口唇部には沈線が廻っており沈線は明瞭で、沈線の下で器壁の高さはほぼ同一である。擦痕のないb 1類(1～3)と擦痕のあるb 2類(4、5)が見られる。また、2、3は口端部のミガキが顕著で端部上面が平らであり、沈線も明瞭である。一

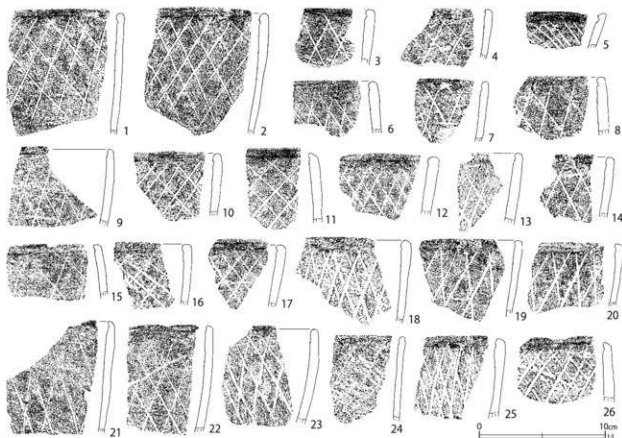
方、1では口端部のミガキが顕著ではなく端部は丸く収められており、沈線も浅く細い。

第2種(第263図6～27)

切断格子のものを一括した。

6～27はc 類(切断格子)である。口縁部に無文帯があり、その下に帯状の格子を廻らせた後に、一次区画文で上下の区画を行ったものである。(擦痕)→格子→一次区画→(ミガキ)の順で施文と調整が行われている。口縁直下は無文帯で丁寧に磨かれており、格子は口縁からやや下がった位置に施されている。擦痕のないc 1類(6～14)と擦痕のあるc 2類(15～27)が見られる。また、後者にはミガキの見られないc 2' 類も存在している。

c 1類では、口唇内面の沈線が比較的明瞭なc 1類ア(6、7)と段差となっているc 1類ウ(8、9)



第266図 グリッド出土縄文後期土器(48)

が見られる。10～14はc 1類胴部破片である。

c 2類でも、口唇内面の沈線が比較的明瞭なc 2類ア(15)と段差となっているc 2類ウ(16～22)が見られる。23、24はc 2類胴部破片である。

口縁部にミガキが見られないc 2'類では、口唇内面の沈線が比較的明瞭なc 2'類ア(25、26)と段差となっているc 2'類ウ(27)が見られる。

第3種(第264図)

解離裸格子のものを一括した。

1～54はd類(解離裸格子)である。

口縁部に無文帯があり、その下に一次区画文をもたない格子が帯状に廻るもの。(擦痕)→格子→(ミガキ)の順で施文と調整が行われている。口縁直下は無文帯で多くの場合丁寧に磨かれており、格子は口縁からやや下がった位置に施されている。擦痕のないd 1類(1～12)と擦痕のあるd 2類(13～54)が見られる。また、後者にはミガキの見られないd 1'類も存在している。

擦痕のないd 1類では、口唇内面の沈線が比較的明瞭なd 1類ア(1～5)と段差となっているd 1類ウ(6、7)、細い線のd 1類エ(8～10)、ほぼ線が見られないd 1類オ(11、12)がある。

擦痕のあるd 2類でも、口唇内面の沈線が比較的明瞭なd 2類ア(13～32)と、段差となっているd 2類ウ(33～49)、ほぼ見られないd 2類オ(50

～53)がある。

口縁部にミガキが見られないd 2'類では、口唇内面の沈線が見られないd 2'類オ(54)がある。

第4種(第237図14、15、第265、266図)

密着裸格子のものを一括した。

第237図14は加曽利B 1式の深鉢で、口縁部には斜格子目文が施されている。

15は加曽利B 1式の深鉢で、口縁部外面には太い沈線で斜格子目文が施されており、口縁部内面には内面沈線が施されている。太い沈線、粗い調整、粗い胎土をもち、他の斜格子目文土器とは異質である。

第265図1～37、第266図1～26はe類(密着裸格子)である。口縁部の無文帯が見られず、格子が帯状に口縁直下を廻るものである。(擦痕)→格子の順で施文と調整が行われている。口縁直下の無文帯は存在していない。擦痕のないe 1類(第265図)と擦痕のあるe 2類(第266図)が見られる。

擦痕のないe 1類では、口唇内面の沈線が比較的明瞭なe 1類ア(1～12)、幅広い溝となっているe 1類イ(13～18)、段差となっているe 1類ウ(19～29)、ほぼ線が見られないe 1類オ(30～37)がある。

擦痕のあるe 2類でも、口唇内面の沈線が比較的明瞭なe 2類ア(1～17)と、幅広い沈線となっているe 2類イ(18～20)、段差となっているウ類(21～26)がある。

第10類土器(第267図1)

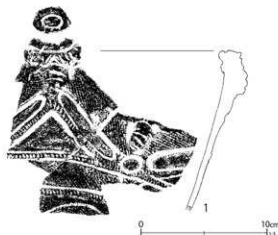
後期後葉の土器群を一括した。

第1種

安行2式を一括した。

第267図1は安行2式の帯縄文系の波状口縁深鉢の口縁部破片である。相互に接合する3片からなっている。波頂部に突起と刻みこぶを有し、RL縄文による隆起帯縄文を施している。

口縁部文様帯には、刻み列による三角形区画を有する。



第267図 グリッド出土縄文後期土器(49)

(7) グリッド出土土製品

1 土偶(第268、269図)

遺構に帰属しない土偶は6点出土している。第268図1～269図5は後期前葉末から中葉、第269図6は晩期中葉のものである。

第268図1は筒形土偶の顔面で、K5-J10グリッドから出土した。顔面の正面形の大きさは8.3cm×8.0cmで、かなり大型の筒形土偶である。完形であれば30cmを超えると考えられ、筒形土偶としてはかなり大型のものになる。眉と鼻は隆帯で表現され、特に鼻腔部はしっかり表現される。両眼は眉の直下に沈線で表現され、頬と眼の下から額にかけては、入れ墨状の沈線が施される。口は鼻の直下に開口しており、さらに下部にみられる開口部は隆帯で縁どられていること、かなり下方にあることなど、胸部に移行する部分の装飾と考えられる。なお、顔面の内部は丁寧に整形されている。色調は淡い褐色で胎土には若干砂粒を含むが、焼成は良好である。後期前葉末の土偶である。

2は筒形土偶の底部であろう。L5-G5グリッドから出土した。底部のみの破片で完形ならば20cm弱の土偶になる。底部径は6.6cm、現存高は1.5cmになる。底部の中央には径0.8cmほどの孔を有する。孔は底面から内側に向けて開けられており、底部の内面には整形の際の指痕(ナデ痕)が残る。土偶の外面にはへら状工具で縦方向にナデられた痕跡が残る。色調は橙褐色で、焼成も良くない。胎土は粗く径3～5mmの小石が目立つ。

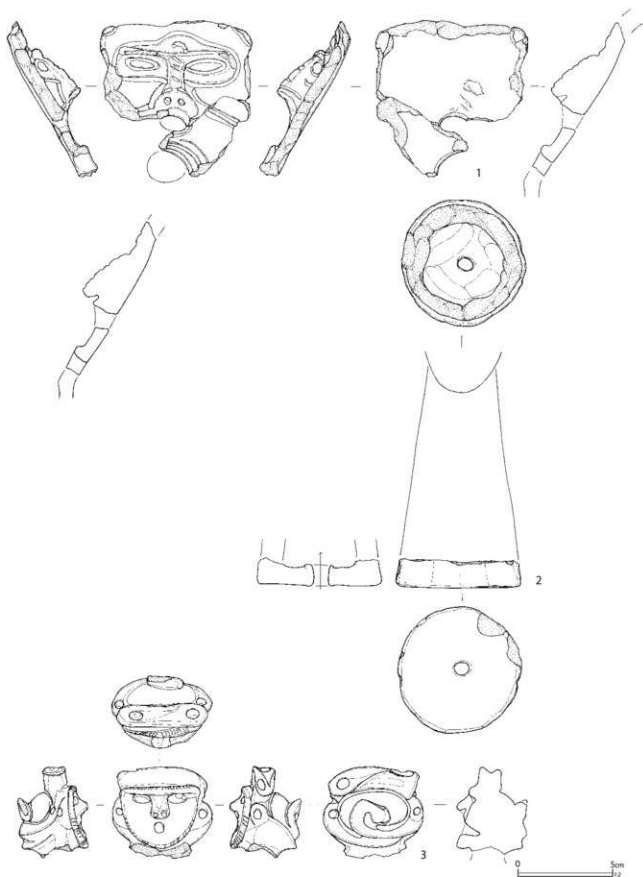
3は土偶頭部で古墳時代の第23号住居跡から出土しているが、偶然落ち込んだものと考えられる。中実土偶の頭部で現存高は4.8cm、最大幅5.3cm、最大厚は3.8cmになる。完形であれば20cm前後の土偶になる。眉と鼻は「T」字状の隆帯で表現され、眉の上面と顔の輪郭には細かい刻みが施される。両眼は眉の直下に楕円形のくぼみで、口は円形の刺突で表現される。耳は貫通する孔で、後頭部は渦巻状の隆帯で立体的な表現がされている。色調

は橙褐色で胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。後期中葉の土偶である。

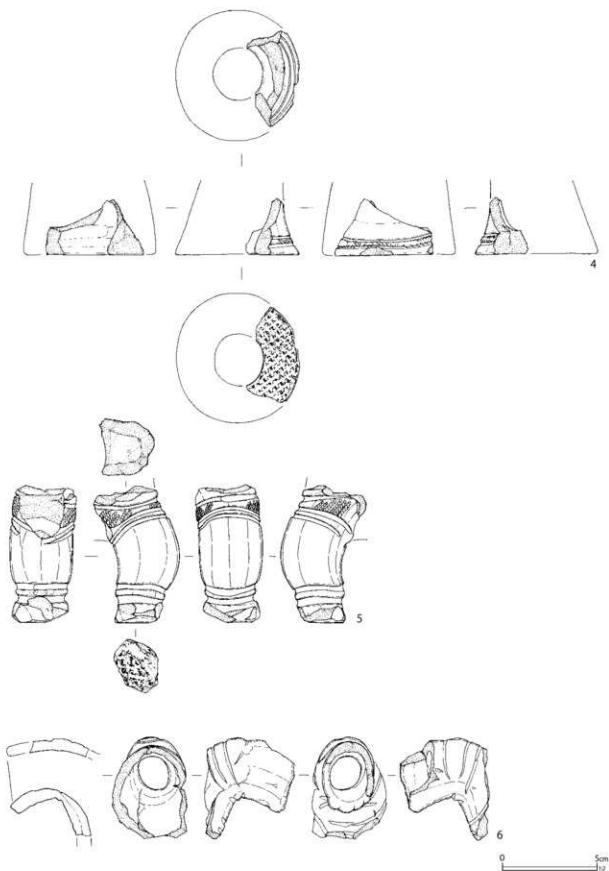
4は中空土偶の右脚で、L5-F5グリッドから出土した。現存高は3.0cm、底部の推定径は6.9cm×6.5cmと、完形ならば25～30cm弱の土偶になると考えられる。脚部の下端には二条の併行する沈線が施され、沈線の内部にはへら状工具の先端を用いた刻みが施される。底部には網代痕が残り、中央部は開口する。割れ口から底部の内側に粘土を重ね、へら状の工具でナデている。色調は橙褐色で、胎土は密で砂粒をほとんど含まず、焼成は良好である。後期中葉の土偶である。

5は中実土偶の左脚である。現存高は7.2cmで、脚部の厚さは約3.0cmである。完形なら25～26cmになると思われる。脚部上面の破損部には、胴部との剥離痕が観察できる。腰部は、あまり張らず、沈線と縄文でパンツ状の表現が見られる。沈線は腰部に一条、鼠蹊部に二条付けられ、L Rの縄文で充填される。足首にも二条の沈線が施される。足底には網代痕が残る。足の周囲は一周とも欠けているが、調査時以前の欠損と考えられる。色調は明るい橙褐色、胎土は密で砂粒をほとんど含まず、焼成は良好である。後期中葉の土偶である。

6は木筵型中空土偶の左肩から腕の破片である。L5-B7グリッドから出土した。現存高は5.4cm、最大幅は4.8cm、腕部の厚さ2.8cmである。完形ならば20数cmになる。風化が激しいが肩部には肩章が表現されている。わずかに残る背面から腋下部には沈線で施文された痕が残る。腕の内面には輪積の痕が明瞭に残っており、腋下部の内面には、腕を固定させるために粘土で補強した痕を観察できる。腕先は開口しており、先端には刻みが入る。色調は橙褐色で、焼成は良好である。胎土は粗く、径1～2mmの小石が目立つ。時期は晩期中葉であるが、周辺からは晩期の遺構や遺物は検出されておらず、南東方向に数十mの地点で晩期の土器が出土している。



第268図 グリッド出土土偶(1)



第269図 グリッド出土土偶(2)

2 土製円盤(第270、271図)

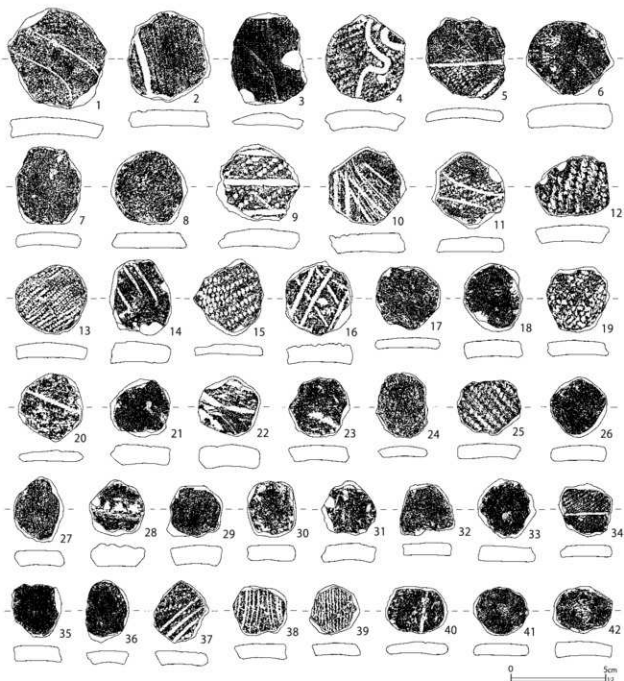
第270図 1～42、第271図43～72に土製円盤を示した。

材料は、ほぼ全てが深鉢形土器の胴部破片であり、これを円形に加工したものであるが、8は底部破片を用いている。円形の粘土板を加工したもの

のは、検出できなかった。

加工については、多くのものは側縁を打ち欠いて円形に調整しているが、13、22、26、62、64、66、69、72では、側面に研磨した痕跡が認められる。

径の大きさは、最大で5.1cm程度、最小で1.8cm程度である。径の大きさが大きいものほど土器の



第270図 グリッド出土土製円盤(1)

厚みがあるものが多く、小さいものほど薄くなる傾向が見られる。

側面に研磨が見られるものについては、粘土円盤であることが明瞭であるが、側縁を打ち欠いたものについては、土製円盤であるか、通常の土器片であるか判断が困難なものも多数見られる。

3 ミニチュア土器(第272図1～7)

グリッド出土のミニチュア土器を1～7に示した。ミニチュア土器は、器面に文様表現や縄文の地文が見られるもの(3, 7)、無文のもの(1, 2, 5, 6)、特殊な器形のもの(4)に分けることが可能である。

1は手捏ね状の浅い鉢形土器である。器肉は厚い。2は深鉢形土器を模してミニチュア化したものの底部と考えられる。3は浅鉢形土器のミニチュアと思われ、外面に沈線で文様を描き、内面にも波状の沈線の模様を描いた中を斜位の沈線で埋める文様が見られる。内面が良く磨かれ、黒色を呈する。4は特殊な器形の土器で1/2程度しか残

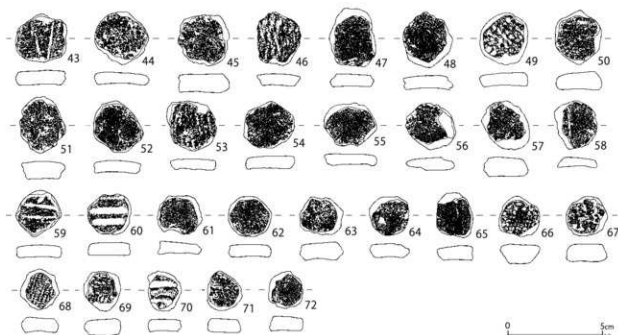
存しておらず全体像は確認できないが、片側を横方向にのびた舟形状の土器である。底部も平らではなく丸みを帯びている。5は浅い鉢形で、口径8.5cm、底径5.5cmである。外面は丁寧にナデが施され、内面は磨かれている。焼成も良好で精緻な作りである。6は鉢形の土器である。内外面ともナデが施されている。7は縄文が施された口縁部破片である。

4 土製品(第272図8)

8は用途不明であるが、二股の脚が付くタケノコ状の土製品である。一脚は欠損している。外面に刺突痕が三箇所見られ、浅い横位の沈線が上部二本、背面二本、脚に近い部分に二本施された上に、弧を描く沈線が一箇所施されている。

5 耳飾(第272図9)

9は土製耳飾の破片である。推定径2.6cm、幅1.5cmである。中型無文で白形であり、中心に円孔を穿孔する形状である。縦断面形状は台形で、上下面中央が緩やかにくぼんでいる。



第271図 グリッド出土土製円盤(2)

6 土器片鍾 (第272図10~16)

10~16に土器片鍾を示した。2~5 cm程度の土器片の長辺両端に切れ目を入れたものである。検出量はさほど多くない。10、12は完形ではないが、11、14と共に楕円形と考えられる。13、15、16は円形に近い。

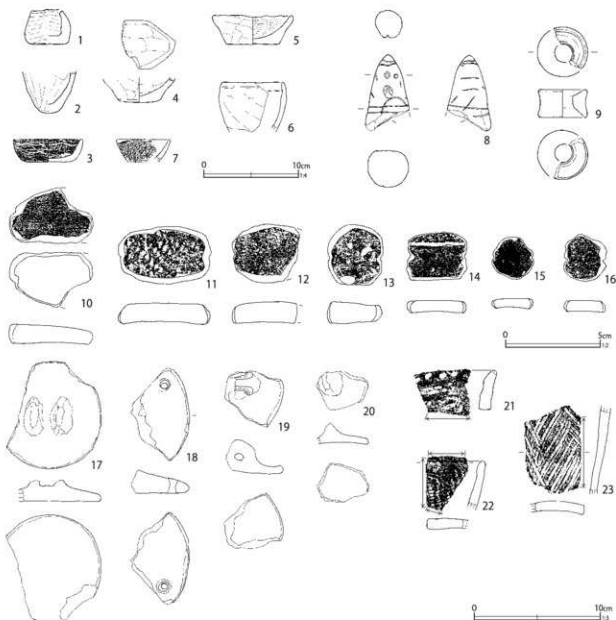
7 土製蓋 (第272図17~20)

グリッドから四点の土製蓋が出土した。17~20に図示した。ツマミの残るものは19のみで、他は

欠失している。17、18は蓋裏側が平らで、18には穿孔が見られる。19、20の直径は17、18に比べて小さいと思われる。

8 転用砥石 (第272図21~23)

21~23は土器片の欠け口に研磨痕が見られるものである。転用砥石と考えられる。いずれも土器欠け口に対して垂直に研磨されているが、21、23は欠け口の一侧縁のみに研磨が見られる。22は欠け口と口縁部に合計3箇所の研磨が見られる。



第272図 グリッド出土土製品

(8) グリッド出土石器

調査区域内から出土した石器の中で、遺構への帰属が明確にできなかったもの、および遺構から

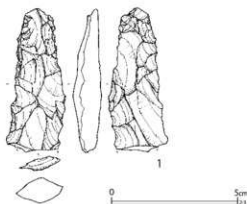
出土しているが、時期的に当該遺構に帰属するとは考えられないものをグリッド出土として一括し、器種毎に示した。

1 尖頭器 (第273図1)

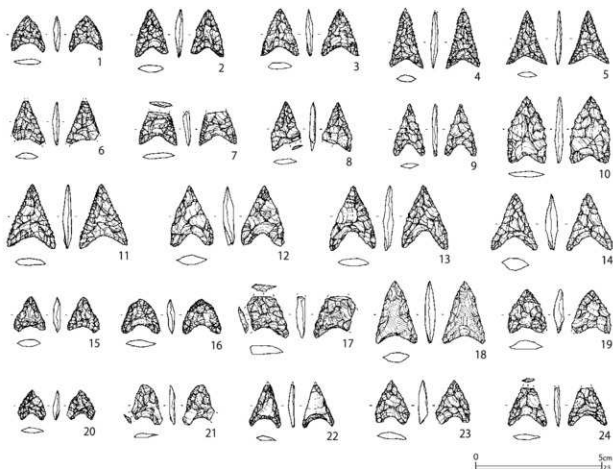
1はチャート製である。加工が平坦剥離で細長いため、尖頭器と考えた。加工により素材の形状は不明である。個別の剥離面が大きく、仕上げの微細剥離痕がほとんど観察できない。先端部があまり加工されていないため先鋭ではない。調整加工の初めの段階で、両側縁を調整中に基部が欠損し、廃棄された可能性が考えられる。

2 石鏃 (第274～276図)

破損品や未製品と考えられるものを含め74点である。基部の形状によって以下の分類を行った。



第273図 グリッド出土尖頭器



第274図 グリッド出土石鏃(1)

- A 無茎で基部が挟まれる 1~48
 A 1 挟りが深い 1~24
 A 2 挟りが緩やかで浅い 25~48
 B 無茎で基部が平坦 49~55
 C 無茎で基部が円弧 58
 D 有茎で基部が逆三角形に突出 56, 57
 E 小破片の縁辺を多少剥離 59~61 (62)
 F 欠損 63, 64
 G 未製品 65~74
 なお、未製品としたものには、
 G 1 未製品
 G 2 製作途中失敗廃棄
 G 3 粗雑な製品とその使用破損品

が含まれている可能性があるが、十分な判別はできなかった。

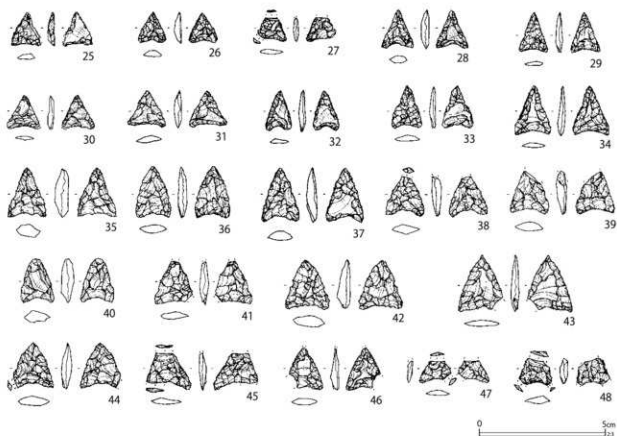
また形態分類とは異なるが、顕著な特徴が見ら

れるものとして以下があげられる。

- ア 鋸歯状側縁 側縁がギザギザしている
 1, 3~7, 11, 27
 イ 局部磨製 部分的に研磨が見られる
 15~18, 25

1~48は無茎で基部に挟りが入る。1~24は深く挟れている。1, 3~7, 11, 27は両側縁が鋸歯縁状に加工されている。

第274図1は両側縁が緩やかに外湾し、挟りは逆「U」字状である。2, 3は両側縁が緩やかに外湾し、挟りは逆「U」字状である。4, 5は両側縁が直線的で長い形をしている。挟りは深く逆「V」字状である。4は僅かに先端部を欠損する。6は先端部と両脚部が僅かに欠損する。7は上半部が欠損する。挟りは逆「V」字状である。8, 9は薄手の剥片を素材として丁寧に調整加工されている。

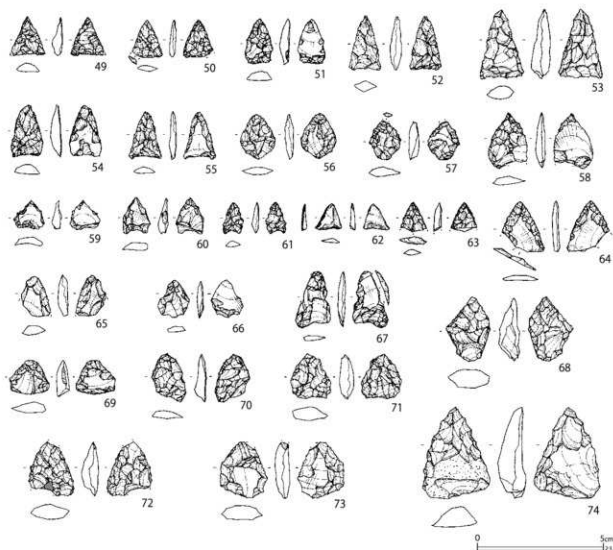


第275図 グリッド出土石鏃(2)

8は右脚部を欠損する。9の袢りは深く逆「V」字状である。10は両側縁が丸みを帯びており、中央が一部鋸歯縁状に加工されている。薄手の剥片を素材として丁寧に調整加工されているため、未製品ではないと考えた。11はかなり入念に調整がなされている。両側縁が直線的で長く、袢りは深く逆「V」字状である。12はやや厚手の剥片を丁寧に調整加工している。袢りは深く逆「V」字状である。13は素材剥片を丁寧に調整加工している。袢りは深く逆「V」字状である。14は厚手だが丁寧に加工されている。袢りは深く逆「V」字状である。

15～18はいわゆる局部磨製石鏃である。袢りは

逆「U」字状である。15は剥片の一次剥離面を残して丁寧に調整加工している。表面の一次剥離面が研磨されている。研磨方向は基本的に長軸方向で、基部の一部には斜め二方向の擦痕が観察できる。袢りは逆「U」字状である。16は両側縁が「く」字状に外湾するが、これは先端部を欠損後再生したものであろう。長軸に対して垂直方向に擦痕が観察できる。17は個別の剥離面が大きく粗雑な印象を受ける。表面の基部の一部と裏面の一次剥離面が研磨されている。長軸方向の擦痕が観察できる。上半部と左脚部を欠損する。18は先端がやや外湾するが両側縁が長い形をしている。加工後、全体



第276図 グリッド出土石鏃(3)

的に光沢が認められるため、周縁部の急角度な加工以外の稜が摩滅してしまい、製作の痕跡がほとんど観察できない。長軸に対して平行な擦痕と、両側縁の加工に対して平行な擦痕が観察できるが、本来はさらに多方向から研磨が行われていたと考えられる。

19～24は逆「U」字状の挟りが見られる。19、20は両側縁が緩やかに外湾する。21は薄手剥片の形状を利用して最低限の加工がなされている。左脚部は僅かに欠損する。22は薄手の剥片に対して一次剥離面を大きく残し、最低限の加工がなされている。先端部は僅かに欠損する。24は薄手の剥片で丁寧に調整加工されている。先端部は欠損する。

第275図25～48は浅く挟れている。25はいわゆる局部磨製石鏃である。挟りは僅かであり平基に近い形をしている。一次剥離面を大きく残し剥片の縁辺には最低限の加工がなされている。表面が研磨されている。長軸に対して垂直方向の擦痕が観察されている。右側面は欠損する。26は丁寧に調整加工されている。27は上半部と左脚部を欠損するが、両側縁が鋸歯縁状に加工されている。28はやや厚手の剥片の一次剥離面を大きく残し、丁寧に調整加工している。29、30は薄手の剥片を丁寧に調整加工している。31は剥片の形状を生かして最低限の加工がなされている。32～34は薄手の剥片の一次剥離面を残して最低限の加工がなされている。35は肉厚な作りである。36は薄手の剥片を丁寧に調整加工している。37は一次剥離面を残し最低限の加工がなされている。38～41は個別の剥離面が大きい。38、39は先端部を欠損する。40は肉厚な作りである。41は薄手の剥片を素材とする。先端部と右脚部を僅かに欠損する。42、43は一次剥離面を残し、加工されている。42は肉厚な作りである。43は薄手の剥片を素材とする。左脚部は欠損する。44は丁寧に剥離されている。45は薄手の剥片を丁寧に加工している。先端部と右脚部は欠損する。46は一次剥離面を残して加工され

ている。先端部と左脚部を欠損する。47は剥片の形状を生かして最低限の加工がなされている。上半部と右脚部は欠損する。48は上半部と両脚部が欠損する。

第276図49～55は無茎で基部が平らなものである。両側縁が長く二等辺三角形に近い形をするものが多い。一次剥離面を大きく残し主に片側から最低限の加工がなされている。49、50は正三角形に近い形である。49、50は共に左脚部が僅かに欠損する。53は剥離面が大きく粗雑な印象を受ける。

56、57は有茎で基部が逆三角形に突出し平面形が菱形となっている。一次剥離面を残して縁辺を加工している。57は先端部をわずかに欠損する。

58は基部が欠損するが、無茎で基部が円弧状に外湾し、平面形が涙滴状である。剥片の主に片側から先端部を中心に調整加工されている。

59～61は小型剥片の縁辺のみ加工したものである。59は素材剥片の主要剥離面を表としており、全体が横に湾曲している。61は石器の中央まで加工が及ぶが、左右非対称で不定形である。

62は小型剥片の末端が先鋭で薄いものを利用している。左側縁と基部が僅かに加工されている。その後、左側縁から右側縁の先端部、基部の一部に外形を滑らかにするように研磨されている。表裏面の一部にも研磨が及んでいる。

63、64は欠損している。63は先端部のみ残されている。64は一次剥離面を残し、最低限の加工がなされている。基部の一部を欠損する。

65～74は未製品である。個別の剥離面が大きく粗雑なものが多い。65～67は縁辺を加工している段階での破損品と推定した。68は分厚い素材のため加工がうまくいかずに廃棄されたと推定した。69、70は縁辺を加工している段階で69は先端が破損し、70は基部が破損したため廃棄したと推定した。71～73は素材が分厚く、加工がうまくいかなかったものと推定した。72は斑品により割れている。74も素材が分厚く、縁辺のみ加工されている。

3 石錐 (第277図)

平面形が三角形、横断面形が菱形を呈している。剥片を利用するものが多いが、つまみ部は作られない。黒曜石が多く使われている。

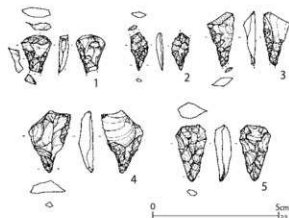
1は小型の剥片を素材としている。素材剥片はところどころ欠損しているが、その一部を錐部として利用している。細部加工の仕方から石錐と考えた。錐部は欠損する。

2も小型の剥片を素材としている。剥片の縁辺を表裏両面から加工している。平面形はごく細い先鋭な形をし、横断面形は菱形である。基部が欠損する。

3は末端が先鋭になる小型の剥片を素材とする。剥片の形状を利用して先鋭部分を中心に表裏両面から加工して錐部を作り上げている。平面形は逆三角形を呈する。横断面形は菱形である。錐部を僅かに欠損する。

4は不定形だが末端が先鋭となる小型の剥片を素材とする。剥片形状を利用してその末端を中心に表裏両面から加工して錐部を作り上げている。平面形は逆三角形、横断面形は菱形である。

5はチャート製である。他よりは分厚い剥片を素材とする。錐部のみならずつまみ部も表裏両面から加工されている。平面形は逆三角形、横断面形は菱形である。錐部先端付近は摩滅が著しい。



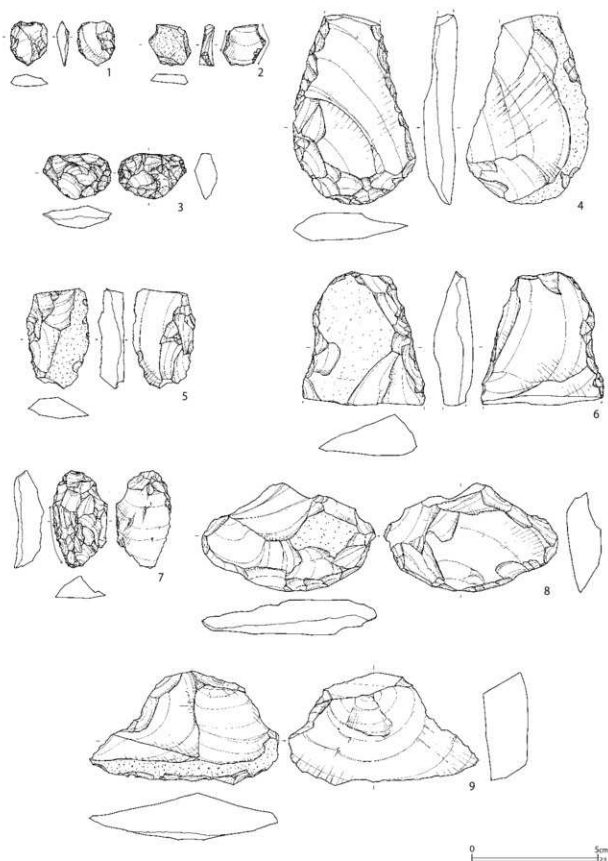
第277図 グリッド出土石錐

4 スクレイパー (第278図)

剥片の縁辺が連続的に調整されているものをスクレイパーとして示した。

1～3、7のように黒曜石の剥片を使用した小型のものと4～6、8、9のようにそれ以外の石材を使用した大型のものがある。剥片の形状を利用して一部を加工したものが多いが、3のように全面加工しているものもある。

1は小型で薄手の剥片を使用している。剥片の形状を利用して縁辺を調整加工している。2は小型で薄手の剥片を利用し、両側縁の縁辺を調整加工している。剥離面が激しく摩耗し、稜が不明瞭になっている。上半部は欠損する。3は両面から調整加工されており、不定形だが楕円に近い形に仕上げられている。4は一部に礫面を残した大型の剥片を使用している。縁辺を中心に片側からのみ調整加工を加えて、末端を円弧状に作り上げている。末端は僅かに剥離面が摩耗しており、刃部として使用されている。大きさと石材から小型の打製石斧の可能性も考えられるが、加工が縁辺部のみであり、刃部が薄いことを考慮して、大型のスクレイパーと考えた。基部は欠損する。5は礫面を一部残した幅広剥片の形状を利用して、打面部分を中心に調整加工が見られる。末端部には微細剥離痕が残されている。6は一部に礫面を残した大型の剥片を使用している。剥片の形状を利用して、縁辺を両面から加工している。4と同様に打製石斧とも考えられたが、やはり刃部が薄いことを考慮して大型のスクレイパーとした。下半部は欠損する。7は小型で肉厚な縦長剥片を利用している。左側縁が加工され、両側縁に微細剥離痕が残されている。8は大型剥片を利用している。周縁部に調整加工が見られる。下端部の一部が僅かに摩耗しているため、刃部として使用されたと考えられる。風化が著しい。9は大型で幅広剥片を利用している。肉厚であることを利用して、末端を調整加工して刃部としている。



第278図 グリッド出土スクレイパー

5 磨製石斧 (第279、280図)

1～8、10～12は、いわゆる定角式磨製石斧である。平面形が長方形、横断面形が隅丸長方形を呈する。側縁部の基部から刃部にかけて稜で画された面が認められる。敲打とその後の研磨によって滑らかに整形、調整されている。

1～5は側面が明確な面で構成された小型の磨製石斧である。1は最も小型であり、光沢が出てくしい石材が用いられている。2、3は全面を滑らかに整形し光沢が見られる。刃部は使用による刃こぼれの痕跡が見られる。基部は欠損している。3は側面も一部欠損している。4は部分的に研磨の痕跡が見えるが、基本的には全面に敲打風の痕跡が見られる。ただし、破断面にまでこの痕跡が認められることから、敲打によるものではなく、風化によるものであると判断した。下半部は欠損する。5は整形により光沢が見られるが、部分的に剥落も認められる。刃部は刃こぼれの痕跡が見られる。上半部は欠損する。

6～8は、明確な側面をもつが薄いため、扁平な印象を受ける。横断面形が扁平な隅丸長方形を呈するので、定角式磨製石斧の範疇で捉えられる。6の刃部は欠損した後、再生した痕跡が見られる。滑らかな面ではなく、全面が僅かに稜線で画された面で覆われている。7、8は整形により全面に光沢が見られる。7の下半部は欠損する。8の刃部は欠損した後、再生されている。

10～12は法量が大きく、大型の磨製石斧と考えられる。1～8と比べ、かなり厚く作られている。

10、11は基部のみ残存する。12は滑らかな整形により全面に光沢が見られる。基部先端に剥落が認められる。刃部は欠損後に再生されている。

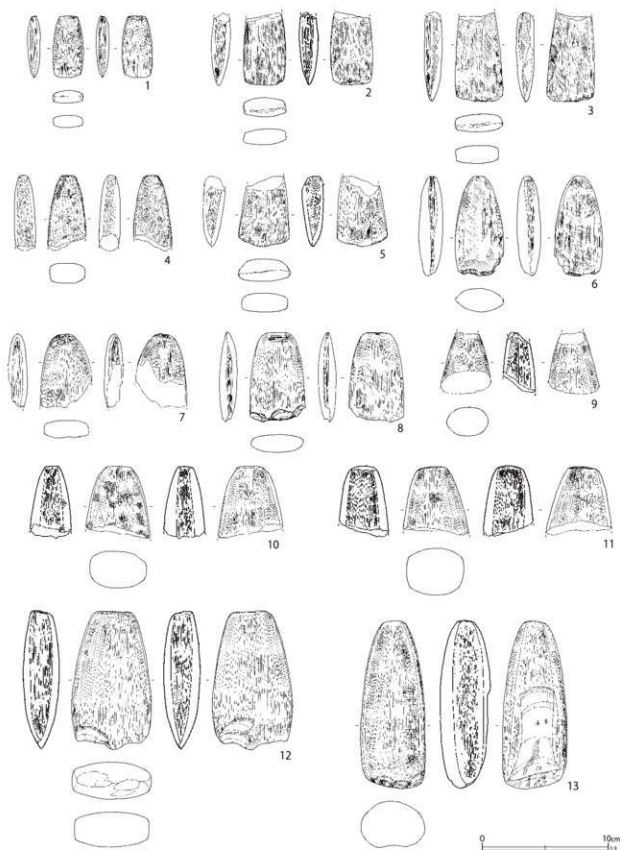
9、13～15はいわゆる乳房状磨製石斧である。平面形は棒状で、横断面形は楕円形を呈する。9は滑らかな整形により全面に光沢が見られる。上下端が欠損しており、基部の一部のみ残存する。13は典型的な形状を示す。刃部は欠損した後、敲

打と研磨により再生した痕跡が見られる。14、15の平面形は長方形に近く、側面が僅かに作られており、横断面形がやや扁平な楕円形を呈するが、乳房状磨製石斧の範疇で捉えた。14は滑らかな整形によって光沢が見られる。刃部は欠損した後、再生されている。基部は欠損する。15は基部が欠損している。

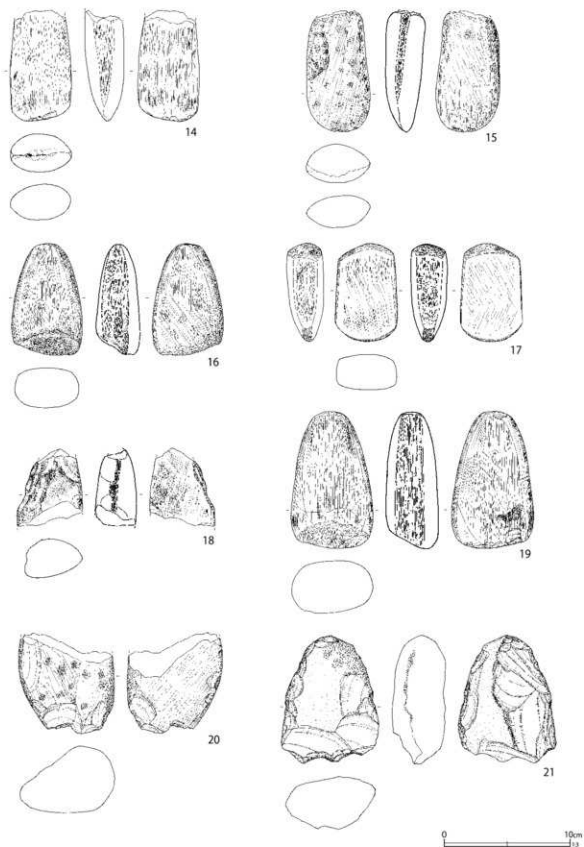
16、17、19は欠損した磨製石斧を別の器種に転用したものである。16、19の横断面形は隅丸長方形に近い形を呈し、元々は定角式磨製石斧であると考えられる。全体的に敲打と研磨によって滑らかに整形されていた。16は刃部が欠損した後、欠損部分に新たな使用による敲打痕と摩耗痕が残されているため、敲石、あるいは磨石として再利用したと考えられる。17も本来は定角式磨製石斧であると考えられるが、刃部と上端部が敲打によって潰されていることから、敲石あるいは楔として再利用された可能性が考えられる。19は一部に鉄錆状の物質が付着している。刃部が欠損した後、欠損部分に新たな使用による敲打痕と摩耗痕が残されているため、敲石、あるいは磨石として再利用したと考えられる。

18、20、21は製作途上で廃棄されたと考えられるものである。18は全体的に敲打と研磨による整形痕が残されている。上下端が破損しており、基部の一部のみが残存する。20は敲打された後、滑らかな研磨によって一部に光沢が見られる。刃部のみ残存する。21は原礫の形状を残し、表面には、原礫面、剥離面、及び敲打が見られることから、製作途中の比較的初期の段階で廃棄されたと考えられる。

小型の磨製石斧は表面に光沢が見られるものが多く比較的薄く作られており、石材の硬度が高いという特徴が認められるため、比較的繊細な用途が想定される。一方、大型の磨製石斧は材質の硬度と共に、その質量、あるいは比重の大きさに特徴が認められる。



第279図 グリッド出土磨製石斧(1)



第280図 グリッド出土磨製石斧(2)

6 打製石斧(第281～287図)

1は凸形、2～17は撓形、18～21は短冊形、22～56は分銅形である。57～69は欠損した資料で形態が復元できないものが含まれている。

1は小型で基部がやや細くなるため凸形の範疇に入ると捉えた。これは後述する分銅形から派生したものと考えられる。最大幅から刃部にかけて部分的に剥離面が摩耗し、機能も同一であると考えられる。

2～12は分割磔または剥片を素材として片面を中心に加工している。平面形は2～6、8、9が楕円形、7、10、11が撓形を呈する。素材、製作技法から撓形の範疇で捉えた。例外もあるが、多くものでは剥離面が摩耗していない。

2、3は磔面に敲打痕や摩耗痕が残されており磨石類を転用したと考えられる。3は両側縁から刃部にかけて部分的に剥離面が摩耗している。

4～6、8、10、11は風化が進んでいるため剥離が不明瞭である。10、11は基部が先鋭であり、凸形の可能性もあるが、撓形の範疇で捉えた。12は小型の楕円磔の縁辺を加工している。磔器の可能性もあったが打製石斧の範疇で捉えた。7は剥片を素材とする。両側縁から刃部付近、石器の中央で部分的に剥離面が風化している。

13～17はいわゆる撓形である。14、16、17は剥片を素材としている。13、15、16は基部が細長く加工されている。

13、16は分割磔を素材として両面を加工している。13は全体的に縁辺が摩耗している。両側縁から最大幅、基部の縁辺の摩耗は激しい。15は棒状磔を素材としている。個々の剥離面は大きく、粗く加工されている。

16、17は風化が進んでいるため剥離が不明瞭である。

18～21は剥片を素材として縁辺を中心に加工し、両側縁が並行した短冊形を呈する。18～21は風化が進んでいて剥離が不明瞭である。19は上下端部、

20は上半部、21は下半部が欠損する。

22～56は両側縁の中央に括れが見られる分銅形である。打製石斧の中で最も出土量が多かった。括れ部は製作時の敲打で潰されており、その上に使用時の痕跡が認められるものもあった。最大幅から刃部にかけて剥離面が摩耗したものが多く、風化が進み、剥離面が不明瞭な資料も見られた。

22、23、25は括れ部が小さく挟り込む挟入形である。22は扁平な磔を素材とし、刃部と括れ部で剥離面が摩耗している。23、25は風化が進んでいて剥離面が不明瞭である。

24、26～48は挟り部が緩やかに湾曲する側湾形である。24、26～29は風化が進んでいて剥離面が不明瞭である。26と28、29は一部欠損する。28は括れ部周辺が部分的に摩耗している。

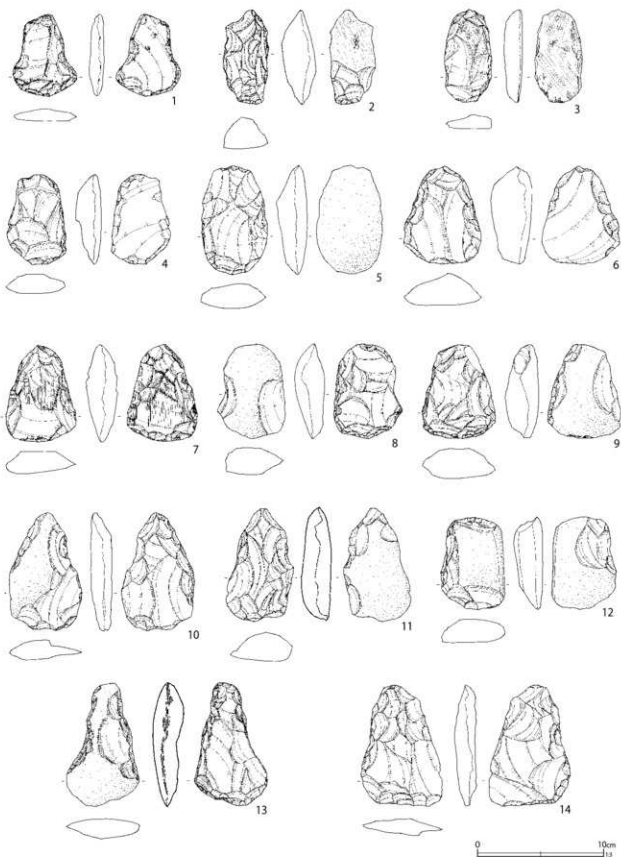
30～32は挟り部分から刃部にかけて顕著に剥離面が摩耗している。33～36は風化が進んでいて剥離面が不明瞭である。37は挟り部が敲打で潰れていて、刃部は摩耗されている。38は挟り部と刃部は摩耗している。37、38は、部分的に鉄錆状物質の付着が見られた。

39～41は挟り部周辺が部分的に摩耗している。39は括れ部が挟入形に見えるが左右非対称のため側湾形とした。45、47は挟り部と刃部が所々摩耗している。42、43、46は挟り部から刃部にかけて剥離面が顕著に摩耗している。44、48は風化が進んでいて剥離面が不明瞭である。43、45、47、48は一部分が欠損している。

49～54は大型で僅かに括られている。49は括れ部が敲打で潰れており、括れ部と上下の刃部が摩耗している。52は僅かながら括られているため、分銅形とした。

51は縁辺から刃部まで敲打で覆われている。51、53は風化が進んでいて剥離面が不明瞭である。

55、56は基部が欠損する。55は挟り部と刃部が摩耗している。56は風化が進んでいて剥離面が不明瞭である。表面が赤化しており、被熱の可能性



第281図 グリッド出土打製石斧(1)

もある。

57～69は欠損したもので、形態の復元が困難であるものが多い。

57、60は剥片の片側を中心に加工している。撥形に近い形状と考えられる。57は基部が部分的に残されている。60は下半部が欠損する。

58、59、62、69は刃部のみ残存した分銅形と考えられる。58は最大幅から刃部にかけて僅かに摩耗している。59は括れ部から刃部にかけて、最大幅から刃部にかけて著しく摩耗している。

61、63は両側縁が並行した短冊形であると考え

られる。61は刃部のみ残存し、63は上半部が欠損する。

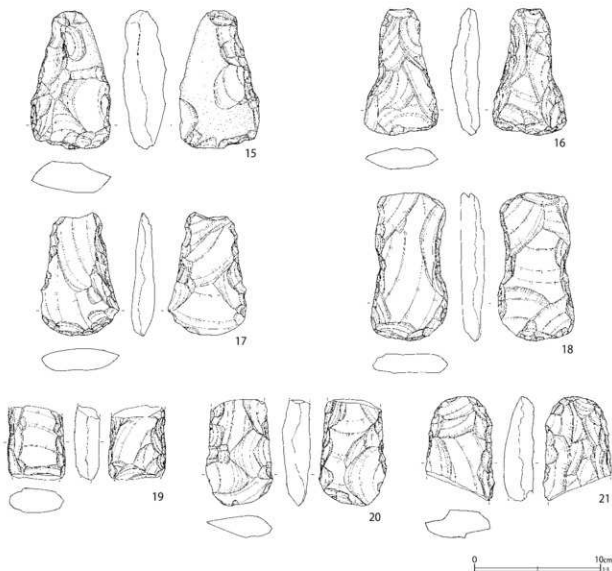
64は元々短冊形であるが、欠損した部分を再加工している。

65は全体の半分が欠損した分銅形と考えられる。

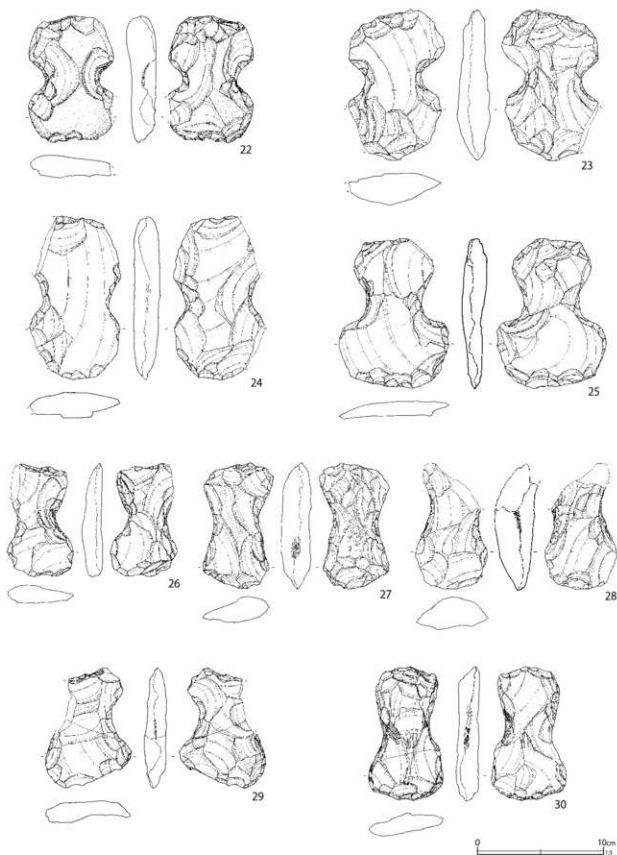
67は括れ部分のみが残された分銅形である。括れ部は著しく摩耗している。

66、68は刃部のみが残されている。風化が進んでいて剥離面が不明瞭である。

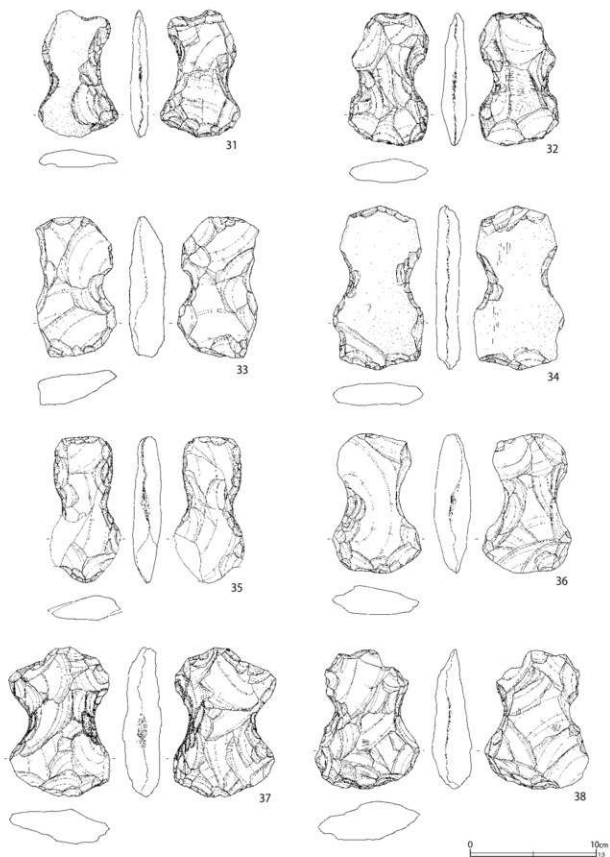
打製石斧は、大型で剥離しやすい石材を使用しているため、他の石器に比べて風化が顕著である。



第282図 グリッド出土打製石斧(2)



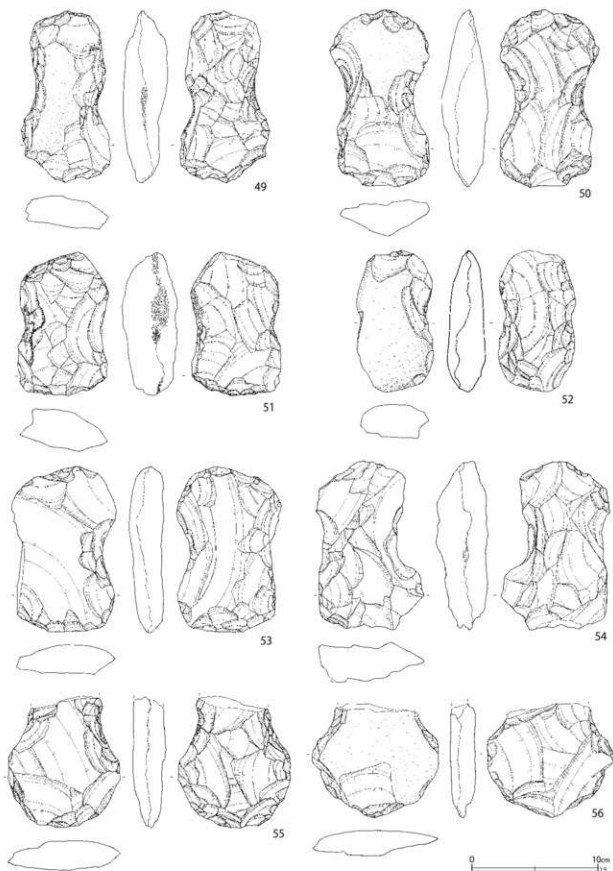
第283図 グリッド出土打製石斧(3)



第284図 グリッド出土打製石斧(4)



第285図 グリッド出土打製石斧(5)



第286図 グリッド出土打製石斧(6)



第287図 グリッド出土打製石斧(7)

7 礫器(第288図)

1～5は礫をそのまま加工したものである。平面形は、1～4は楕円形を呈し、5は円形である。

刃部が作られているため、打製石斧として使用された可能性も考えられるが、今回は礫器の範疇で捉えた。

打製石斧との違いは、側面の加工が全面には見られず一部に止まっていること、左右均等な形に整形されていないこと、断面形態が不定形であること、断面が原礫の厚さのままで厚いこと等である。基本的に原礫の表面を多く残しており、一部のみが剥離によって加工され、部分的に刃が作り出されている。柄に装着することを前提とした形態をしていない。

1は棒状礫を素材として下端部に片面から加工を施し刃部が作られている。素材礫の形状、材質から、敲石の可能性があるが、端部には敲打による潰れが見られず、平坦面に磨面の痕跡も見られ

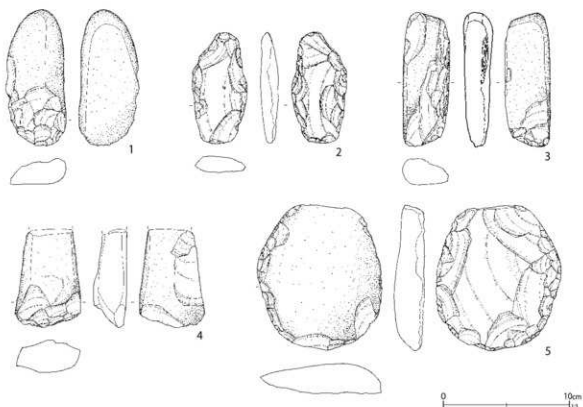
なかったため、礫器とした。風化が進んでおり剥離面が不明瞭であるが、基部に装着痕らしき痕跡が見あたらず、刃部は使用痕らしき摩耗も見られなかった。

2は剥片を素材としており、その縁辺を加工したものである。全体的に風化が進んでおり剥離面が不明瞭である。

3は扁平礫を素材としている。下端部を加工し、刃部が作られている。そのあと、一側縁を敲打で潰している。

4は扁平礫を素材として下端部に片側からのみ加工して刃部が作られている。刃部は摩耗していなかった。上半部は欠損する。礫面に摩耗痕は残されていない。

5は分割礫を素材としてその周縁部を全面加工している。刃部は摩耗していない。若干風化が進んでおり、剥離が不明瞭である。この資料のみ平面形は円形である。



第288図 グリッド出土礫器

8 浮子(第289図)

1、2は軽石質の浮子である。軟らかく、軽く脆い。全面を研磨によって丁寧に整形している。いずれも上部中央が穿孔されており、2では上方に紐による磨減りと考えられる痕跡が認められる。1は上部が欠損しているが、遺存している片面については、紐による磨減りは観察できなかった。

平面形態は、1が楕円形に整形されている。上端の一部が欠損する。2は末広がりの隅丸長方形である。断面形態は横断面で1が楕円形、2が隅丸長方形である。

いずれも指で強く押さえると破損するような柔らかさであり、穿孔部分、体部ともに激しい使用には耐えられないと考えられる。住居跡からも、第9～13号住居跡から2点、第10号住居跡から1点、第15号住居跡から1点検出されており、大木戸遺跡では、縄文時代後期に一定の役割を持って使用されていた石器であると考えられる。大宮台地の他の遺跡でも、報告例が見られる。

9 石鍾(第290図)

1～4は、上下端に「V」字状の切り込みを入れた切目石鍾である。

1は全面が敲打と研磨によって整形され、平面形が菱形になっている。平坦面は製作痕と摩耗痕が見られ、紐かけ痕と考えられる。

2は小型の扁平磔を素材としているが、切り込み以外の整形痕はほとんど見られない。平坦面に摩耗痕が見られ、紐かけ痕と考えられる。

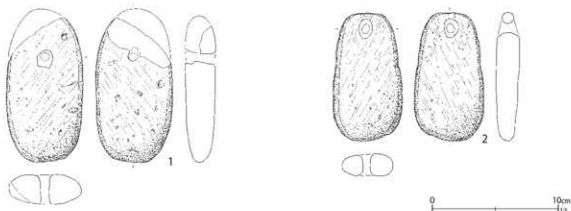
3は、元々扁平な楕円磔の上下端に敲打による挟りを入れた後、「V」字状の切り込みを入れて切目石鍾にしているが、上端部が欠損した後、再び挟りを入れている。

4は扁平な楕円磔を素材とし、平坦面、上下端部に摩耗痕が見られ、紐かけ痕と考えられる。

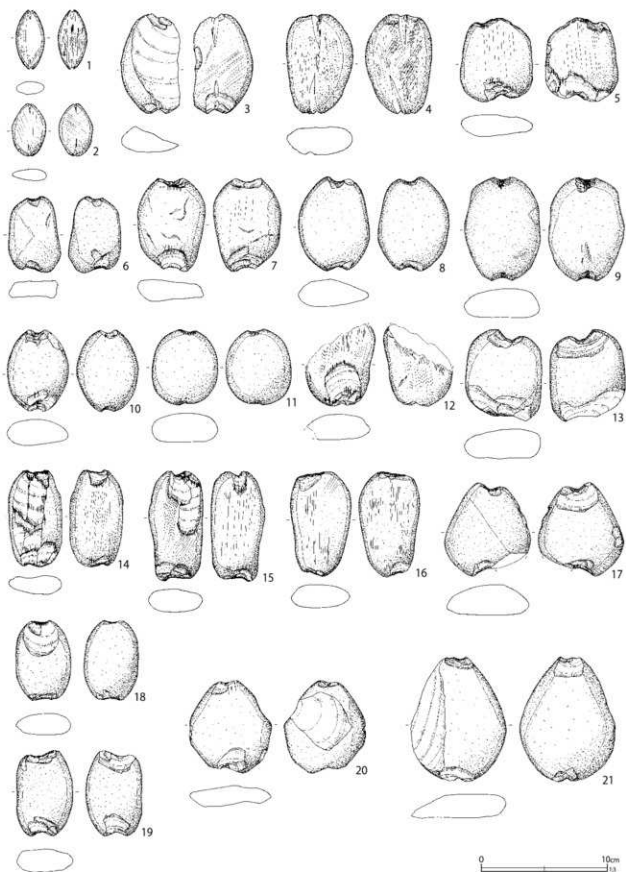
3、4は、1、2と比べると法量が大きく打欠石鍾に近い。

5～21は扁平磔の上下端に敲打による挟りを入れた打欠石鍾である。ほとんどが円磔か楕円磔を素材とし、敲打によって挟りを入れている。挟りは5、8、10のように「V」字状に明確なものもあるが、11、14～16、18のようにほとんど目立たないものもある。ただし、13のように上下端で両方を兼ねているものも見られることから、意識して挟りの形態を作り分けたものではなく、素材の差や打ち欠きの度合いによる結果であると考えられる。

14～16は細長い磔素材を使用している。5、7、9、10、12、14～16は挟り部分や平坦部に摩耗痕が見られ、紐かけ痕と考えられる。12は上端部が欠損する。20は左右端にも若干の敲打による挟りが見られる。一部欠損する。21は表面にひび割れが見られ、被熱した可能性が考えられる。



第289図 グリッド出土浮子



第290図 グリッド出土石錘

10 砥石(第291図)

1～3、8は、平坦面に溝が見られる。

1は、一条の溝が見られる。上半部は欠損する。片側縁に摩耗痕が認められる。平坦面には摩耗痕が見られない。側縁の摩耗痕は基部付近では弱く、残存部の側縁中央付近で顕著である。摩耗痕跡の方向は長軸方向であり扁平な砥石を手にとって、立てて使用したと想定できる。使用面は、やや大きな波状を呈している。使用側縁の反対側も、やや摩耗した痕跡が認められるが丸みを帯びており、使用に伴うものか判断はできなかった。全体に淡い赤色を帯びており、被熱している。片岩質の石材が使用されている。

2も一条の浅い溝が見られる。基部のみが残存している。摩耗痕は残存部分の両側縁と基部、および平坦面に認められる。両側縁と基部は部分的にやや鋭利な稜が作り出されている。1と異なり、摩耗痕跡の方向は短軸方向である。1と同様に全体に淡い赤色を帯びており被熱している。やや硬い砂岩が使用されている。

3は表面に一条、裏面に二条の溝が見られる。上下端は欠損している。摩耗痕は両側縁に認められる。2とは異なり、側縁は鋭利な稜が作り出されておらず、丸みを帯びている。摩滅方向は不明瞭であるが、長軸方向である可能性が高い。斑晶が赤色を帯び、全体的に粒状に風化が見られるため、1、2と同様に被熱している。砂岩が使用されている。

4は溝は見られないものの、同様な砥石であると考えられる。上下端および左側縁は欠損しており、残存部分は僅かである。残存している右側縁と平坦面に摩耗痕が見られる。摩耗痕の方向はやや不鮮明であるが、長軸方向と考えられる。2と同様に、側縁はやや鋭利な稜が作り出されている。残存している稜線は直線的である。1～2と同様に全体に淡い赤色を帯びており、被熱している。砂岩が使用されている。

6は涙滴状の形態で、扁平に作られている。側縁及び平坦面のおおよそ全面に摩耗痕跡が認められる。摩耗痕の方向はやや不鮮明であるが長軸方向と考えられる。両側縁の稜線はやや丸みを帯びているが、波打っていることから剥離をした痕跡である可能性が指摘できる。ほぼ完形であるが、具体的な用途は想定できなかった。全体にわずかに淡い赤色を帯びており、被熱している。砂岩が使用されている。

5、7は同一個体と考えられる。5は上下端と右半分を欠損し、7は上半と左側を欠損した右基部のみの破片である。いずれも平坦面に摩耗痕が認められる。両者ともに中央付近が極めて薄くなるまで摩耗している。5は表面が平坦に、裏面が描鉢状に摩耗しており、7は表裏面共に描鉢状に摩耗している。いずれも被熱の痕跡は認められず、緑色を帯びた片岩が使用されている。

8は三条の溝が見られる。平坦面と左側縁に摩耗痕が見られる。形態的には3と類似している。表面がやや風化している。被熱の痕跡は認められず、砂岩が使用されている。

9は分銅形を呈し、小型の打製石斧に類似している。上下端の刃部が摩耗している。両面使用の痕跡が認められる。片岩が使用されている。

10は側縁、表裏面全体に摩耗の痕跡が見られる。表面はやや平坦であるが、裏面は凹みが著しい。裏面に淡い赤色を帯び被熱している。砂岩が使用されている。

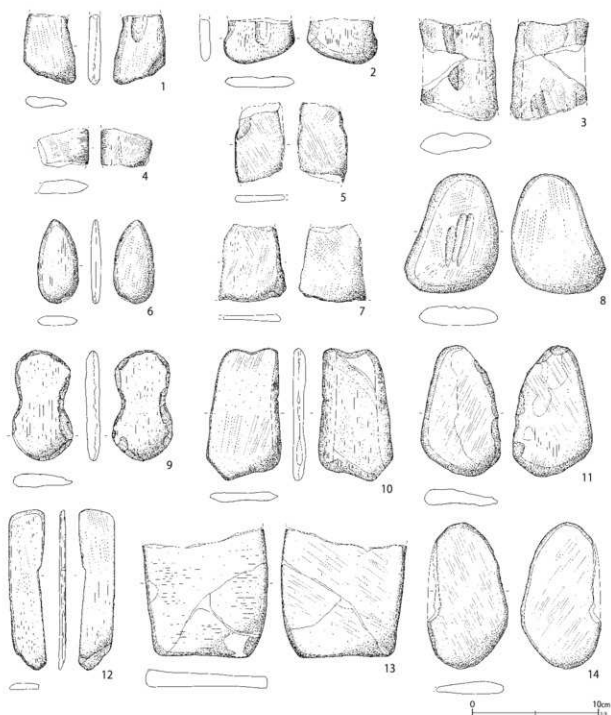
11は扁平な円礫の片側縁に剥離を加え、その後に刃潰し状の摩耗痕が見られる。表裏面も摩耗痕が顕著であり、表面はおおよそ右半分が剥落している。被熱は認められず緑泥片岩が使用されている。

12は細長い円礫の剥離した表面を使用している。表面は摩耗により極めて平滑であり、裏面は摩耗が明確ではない。右側縁に明確な平坦面の作り出しが見られる。被熱の可能性がある。片岩が使用されている。

13は周縁部を敲打と研磨で調整し、平面形と断面形が隅丸長方形を呈している。上半部が欠損している。表裏面共に使用によって極めて滑らかに摩耗している。被熱の痕跡は認められず、砂岩が使用されている。

14は扁平な円盤の片側縁に鋭利な剥離を加え、

その後には刃潰し状の摩耗痕が見られる。11と同様の用途が考えられる。11ほど顕著ではないが、表裏面にも摩耗が見られる。11と異なり、鋭利な剥離を加えていない側縁に5mm程度の摩耗痕が連続して見られる。被熱の痕跡は認められず、緑泥片岩が使用されている。



第291図 グリッド出土砥石

11 敲石(第292図)

平面形が棒状を呈し上下端部に敲打痕を持つものを敲石とした。棒状礫を利用し、側面を敲打や研磨で整形しているものもある。上下端部は敲打で潰されている。平坦面は使用による摩耗痕が見られ、磨石としても利用されたと考えられる。

1の上端部は、滑らかな摩耗が見られる。欠損面をそのまま敲面として利用している。2、3は

下半部を欠損し、3、6～9は礫の側面を敲打と研磨で整形している。5は扁平礫を素材とし、上下端部を中心に縁辺部は敲打されている。6の平坦部は、滑らかな摩耗が見られる。8は横断面形が楕円形を呈し、平坦面がほとんど無いが縁辺が摩耗している。欠損面を敲面として利用している。10～12は先鋭であり、石器製作時の敲石の可能性はある。12の平坦部は摩耗痕が見られる。



第292図 グリッド出土敲石

12 磨石(第293～295図)

1～10、12～14は周縁部を敲打、研磨し、横断面形を隅丸長方形に整形している。

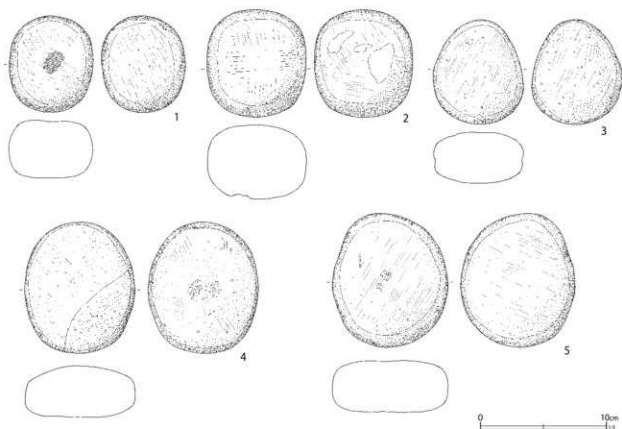
3～6、12は平面形が円形を呈する。1、2、7、8、10、13は隅丸長方形を呈する。平坦部は使用によって滑らかに摩耗している。

1はわずかに敲打で凹んでいるが、滑らかに摩耗し光沢が見られる。2も1と同様の石材で硬質である。3はやや軽く多孔質な石材を使用している。4はやや扁平であり片面に僅かな凹みが認められる。一部に鉄錆状の付着がある。5もやや扁平であり、表裏面に僅かな凹みが見られる。6は一部赤化し剥落しているため、被熱したと考えられる。7、8の平坦部は滑らかに摩耗し光沢が見られる。7は下端部が敲打によって潰れており、磨石としても使われていたと考えられる。7のみ緑色の石材が用いられている。9の平坦部は敲打

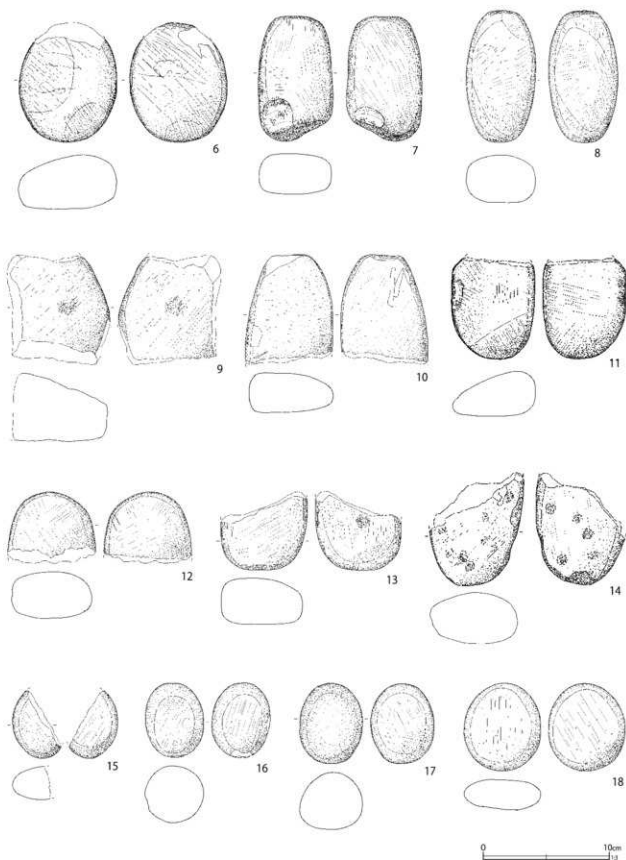
で僅かに凹んでいる。破損により一部のみ残存するが、本来は掌以上のサイズであり、石皿の可能性はある。10、12は、下端部が欠損する。11、13は上端部が欠損する。11、13の平坦部は敲打によりわずかに凹んでいるが滑らかに摩耗している。10は、縁辺を加工し明瞭な面が見られる。11は平坦部が片側に向かって緩やかに傾斜しているため横断面形は隅丸三角形である。原礫の形状を反映していると考えられる。12は部分的に黒色化している。13は片面に僅かな凹みが見られる。14は下端部に向かって緩やかに刃部状に整形され、磨製石斧と類似するが、石材が脆いため、磨石の範疇に捉えた。風化が進んでいる。

15～27は基本的に礫をそのまま利用している。平坦部は使用によって僅かに摩耗している。

15～20、22は円礫を、21、23～26は楕円礫を利用している。18～20は、部分的に整形されている。



第293図 グリッド出土磨石(1)



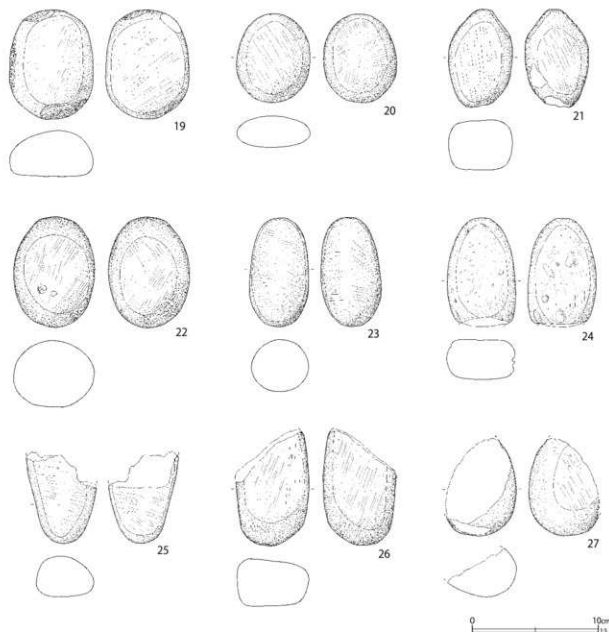
第294図 グリッド出土磨石(2)

22～24、26、27は滑らかに摩耗している。15はやや扁平である。16、17は断面形態が円形に近く平坦面をほとんど持たない。18はかなり扁平である。19は上下端を部分的に剥離し、小さな磨面を複数作り出している。20はかなり扁平であり風化している。21は側面の一部も摩耗している。かなり厚くやや角張った多角形である。全面が赤化しており、被熱していると考えられる。22は円礫に近く、

僅かに平坦面が認められる。23は横断面が円形に近く平坦面をほとんど持たないが、滑らかに摩耗している。部分的に黒色化している。

24は下半部を、25、26は上半部を欠損している。15、27は一部のみ残存している。

25は部分的に黒色化している。26は片面が凹んでいる。27は円礫で赤化が見られることから被熱していると考えられる。



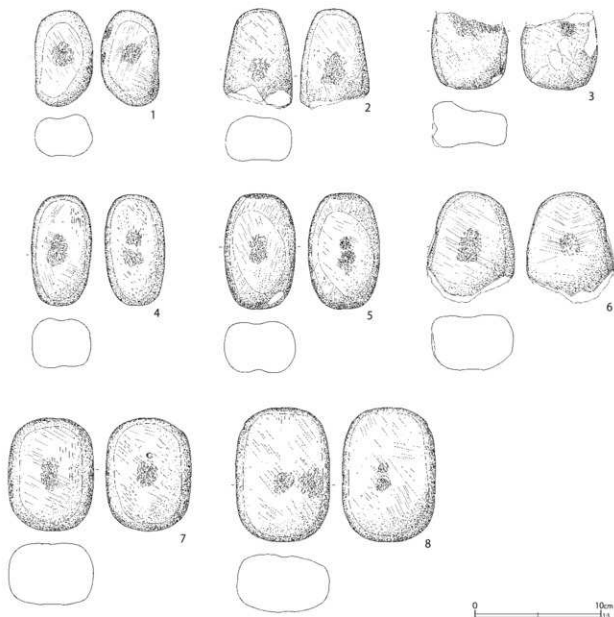
第295図 グリッド出土磨石(3)

13 凹石(第296図)

平坦部に敲打による凹みが残されているものを一括した。同時に滑らかな摩耗痕も残されているため、磨石としての機能も持っていたと考えられる。周縁部は敲打と研磨で整形されている。

1はほとんど整形されていない。全体的に赤色化し、表面に剥落が見られることから、被熱した可能性がある。2は表面が一部黒色化している。

2、6の下半部、3の上半部は欠損している。3は軽く、やや軟質の石材が使用されている。4、5はやや小さめの凹みが多数残されている。7、8は平面形態の特徴から、石鏡形と呼ばれているものである。平坦部の中央は、敲打によって僅かに凹んでいる。8は他と比べるとやや硬く斑晶の大きな花崗岩質の石材が用いられており、凹みも他に比べて僅かである。



第296図 グリッド出土凹石

14 石皿(第297～302図)

完形のものではなく、全て破片で出土した。本来の形状や大きさを可能な限り推定したが、困難だったものもある。

1～3は大型の扁平礫を素材とし、ほとんど整形せず平坦面をそのまま皿部として使用しており、使用によって滑らかに摩耗している。

1は下半部を欠損する。2は縁辺を敲打で若干整形している。上半部は欠損する。3は上半部を欠損する。

4～9、11、19は全体的に敲打で整形されて、縁部、皿部を意図的に作り出したものである。平面形も意図的に隅丸長方形又は楕円形に作り出しており、いわゆる定形的なものと考えられる。特に4～6、8、9は縁部が明確に形成され、皿部が「コ」字状を呈する。いずれも破片で出土し、4の平面形はかろうじて隅丸長方形と推定されるが、5～8は残存度が低く、形状は不明である。4は底面から上面にかけて外側に反するように整形されている。6は脚部をもついわゆる脚付石皿である。漏斗状の凹穴が何箇所も見られる。7は4と同様に底面から側面にかけて外側に反するように整形されているが、縁部を作らないため、皿部は緩やかな「U」字状に凹んでいる。9は小破片だが、縁部、皿部の形状から8と同形であると考えられる。

11は僅かに縁部を作り出しており、皿部は「コ」字状に近い形状である。19の平面形は楕円形である。縁部から皿部は緩やかな「U」字状に凹んでいる。上半部は欠損するが、掃き出し口が残されている。

10、12～18は全体的に敲打で整形されているが、縁部を意図的に作り出さず、皿部、平面形に統一性が見られないものである。いわゆる不定形と考えられる。10は縁部を作り出していないが、皿部を明確に作り出し、緩やかな「U」字状に凹んでいる。12～14は縁部を作らないが、皿部を明確に作

り出し、縁部から「U」字状に凹んでいる。底面は基本的に平坦で使用により摩耗しているが、13、14は僅かながら凹んでいる。平面形は楕円形と推定される。13は漏斗状の凹穴が多数見られる。

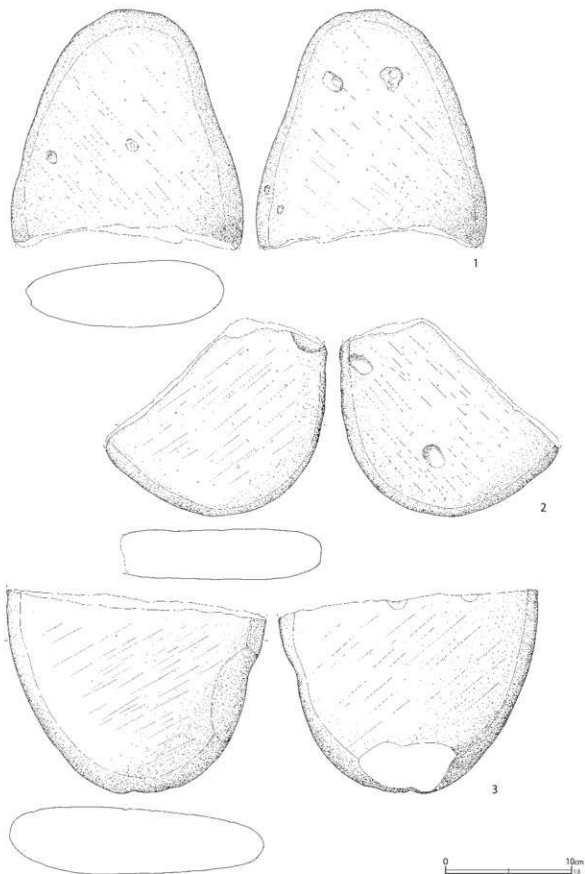
15～18は縁部が作られず、皿部に向かって緩やかに「U」字状に凹んでいる。15の平面形は楕円形と推定されるが、16～18は残存度が低く形状は不明である。15、16、18は漏斗状の凹穴が見られる。

20～25はこの中でもさらに元々の形状を推定することが難しいものである。20、21は全面欠損している。20の皿部は緩やかに凹むため、「U」字状と推定される。漏斗状の凹穴が見られる。21の皿部は僅かに凹んでいる。敲打で作られた浅い凹みが見られる。

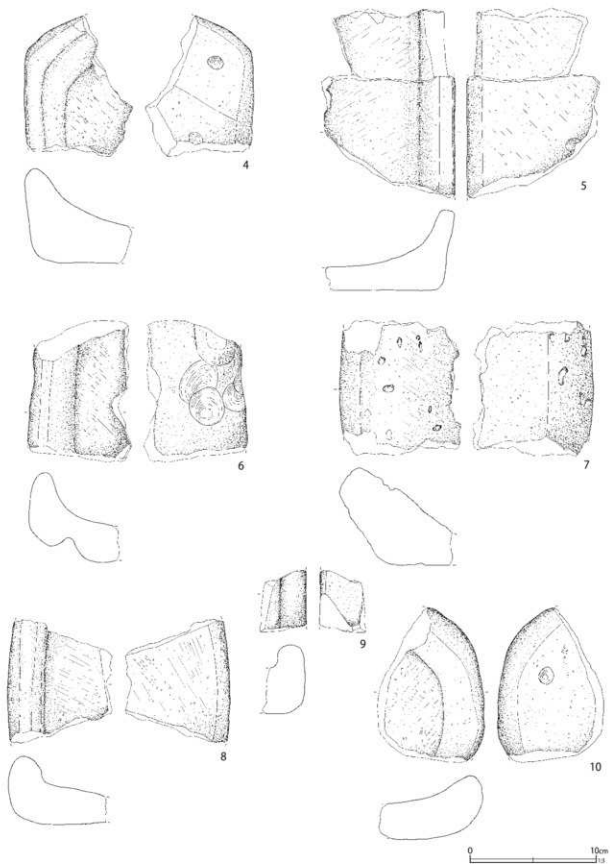
22、24、25は縁辺が残っているが、元々の形状、大きさは不明である。基本的に自然礫を敲打で整形せずそのまま利用し、縁部や皿部は作り出されていない。ただし、22はかなり分厚くかなり大型のものと推定される。皿部は使用によって摩耗しているがほとんど凹んでおらず、1～3と同類と考えられる。24、25の皿部は使用によって僅かに凹んでいる。24は大型礫を利用する。22、25は漏斗状の凹穴が見られる。

23は縁辺を敲打によって整形している。皿部は使用によって僅かに凹んでいる。

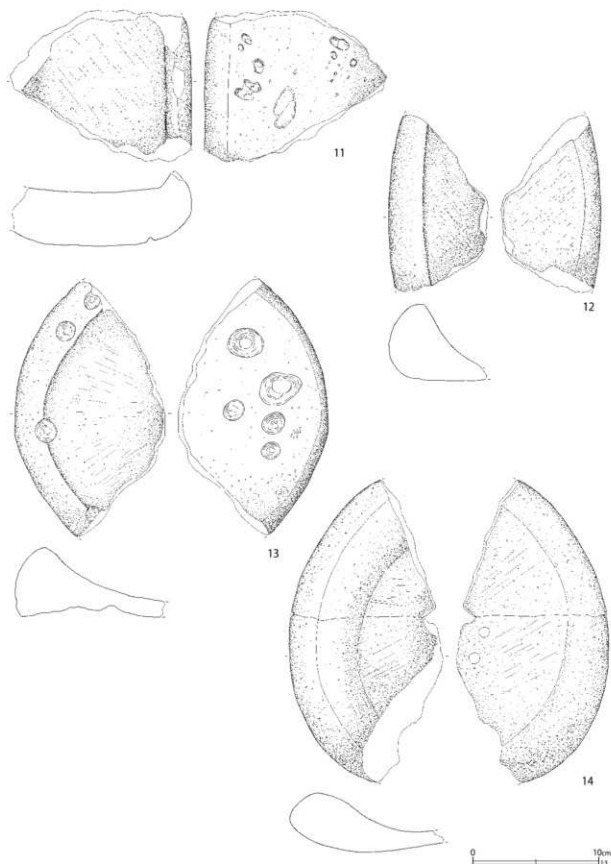
26～29は緑泥片岩製の大型な扁平礫を利用し、縁辺を敲打で整形している。かなり大型のものと推定されるが、本来の大きさ、形状は不明である。皿部は明確に作り出されて凹んでいる。26～29は漏斗状の凹穴がみられる。26は皿部が使用による摩耗で欠損している。側面は加工成形されていない。27は縁辺のみ残存しており、かなり肉厚で側面は丁寧に加工成形されている。28は僅かに皿部が残存しており、使用により滑らかな局面となっている。側面には、剥離による加工が見られる。29はきわめて薄く、皿部が使用による摩耗で欠損している。



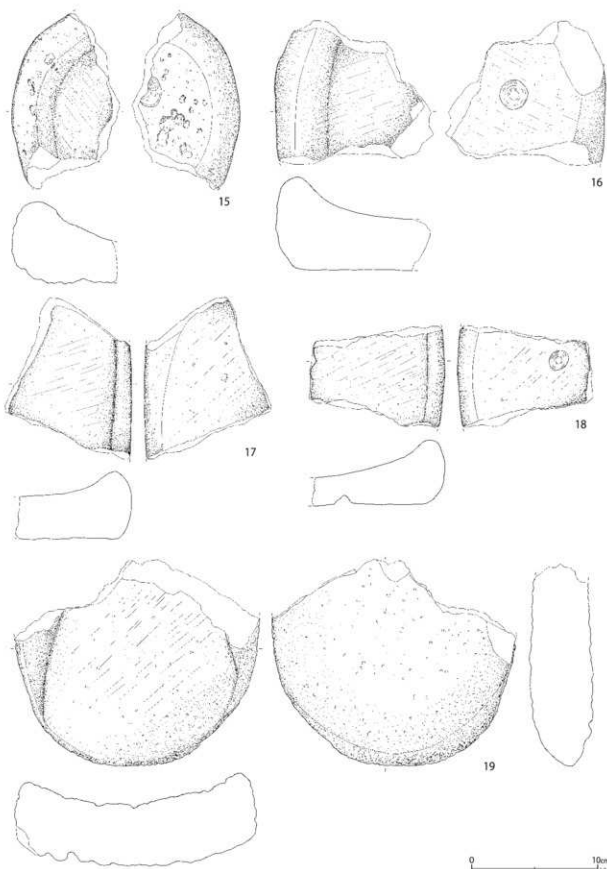
第297図 グリッド出土石皿(1)



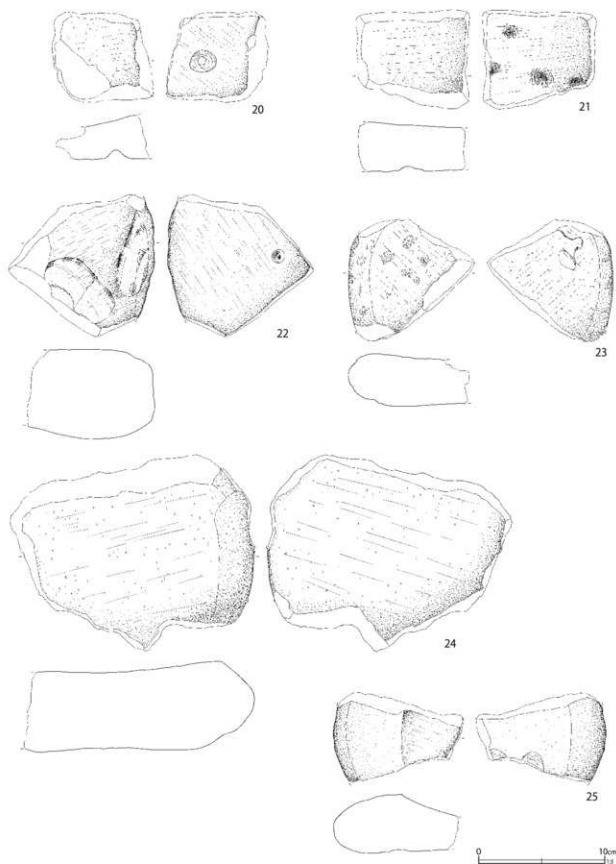
第298図 グリッド出土石皿(2)



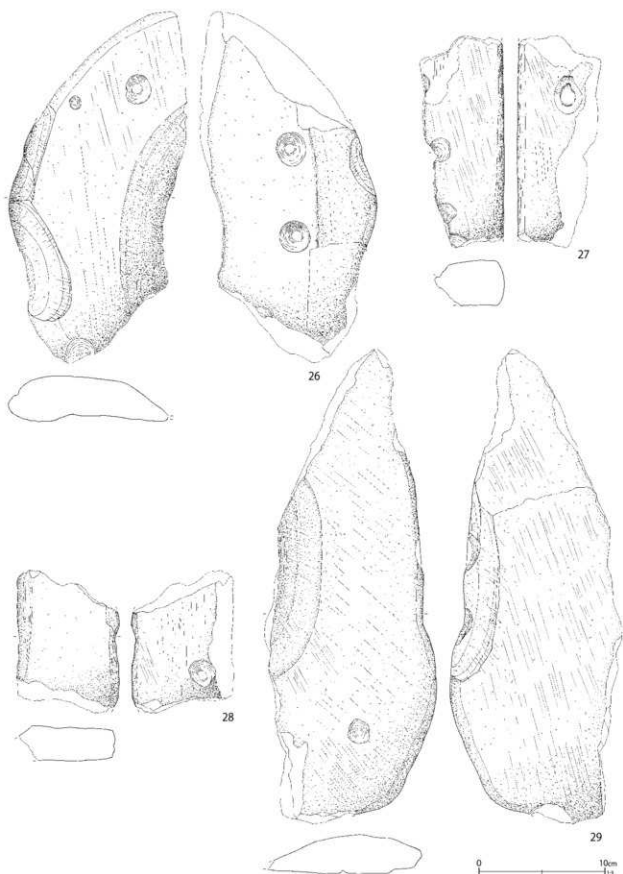
第299図 グリッド出土石皿(3)



第300図 グリッド出土石皿(4)



第301図 グリッド出土石皿(5)



第302図 グリッド出土石皿(6)

15 石棒、石剣(第303図)

1、3、4が石棒、2が石剣である。全て破片で出土した。

1は上下端が欠損する。割れ口はあまり鋭利ではなく摩耗した痕跡が若干認められるが、自然の風化によるものか、あるいは人為的に研磨等が行われているかについては、判断できなかった。製作された表面は滑らかであり、破損は完成後と考えられる。横断面形はやや扁平な円を呈する。縦断面形は僅かに台形であり、先端に向けてやや細くなると考えられる。

他の石棒類は暗色の岩石が使用されているが、この資料は安山岩である。被熱や赤彩の痕跡は見られなかった。

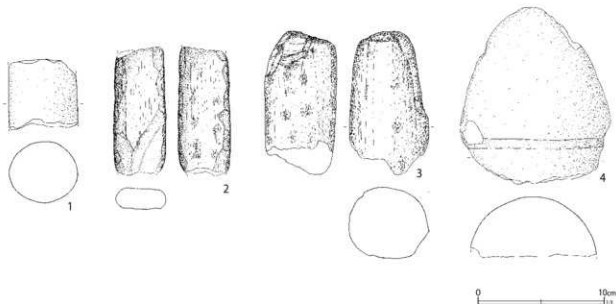
3、4は緑泥片岩製で全面に多数の敲打痕が残されている。

3は表面の風化により、明確な研磨痕は見られない。敲打痕が残る程度に研磨されて仕上げられていたのか、あるいは敲打の工程で廃棄されたものか判断できなかった。横断面形態は円形に近い隅丸方形であり、上下にやや平らな面が識別でき、他の面は曲線的である。縦断面形態は先端の欠け

た円錐形であり、残存部上端付近から急激に丸みを帯び、先端は2cm以下の長さで欠損していると考えられる。基部の破損部分長さは不明である。被熱痕跡は見られなかった。

4は大型の石棒の先端部破片であり、大部分は欠損している。3と同様に風化によって不明瞭となっているが、研磨痕はある程度識別できる。部分的に円形の剥落が認められる。横断面形態は円形と推定される。括れ部以下ではあたかも工具痕のように多角形の面が認められるが、この面は先端部まで連続している。従って、使用されている緑泥片岩が、互層状に風化したことによるものであり、人為的な加工痕ではないと判断した。被熱痕跡は見られなかった。

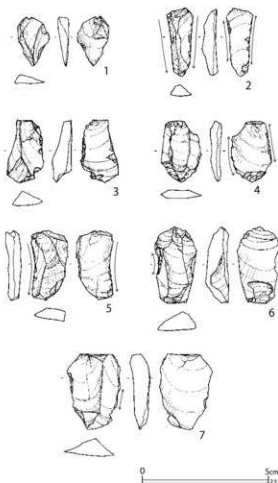
2は横断面形がかなり扁平な楕円形であり、縁辺が刃部加工されている石剣である。上下端部は欠損する。横断面形態は極めて扁平な円形である。縦断面形態は長方形である。平面形態は短冊形であり、先端部に向けて緩やかに幅が減少している。表面は比較的平坦であり、裏面はやや凹凸が目立つ。左側縁は表裏からの剥離が見られ、右側縁は表面からの剥離が主である。



第303図 グリッド出土石棒、石剣

16 微細剥離のある剥片(第304図)

1は小型で先鋭な剥片を使用し、右側縁に部分的に微細剥離痕が見られる。2は細長い剥片を使用し、両側縁に微細剥離痕が見られる。3は右側縁を中心に微細剥離痕が見られるが末端が僅かに加工されている。4は剥片の末端が裏面加工され、両側縁に微細剥離痕が見られる。5は左側縁に微細剥離痕が見られる。右側縁も微細剥離痕が残されている可能性があるが、表面が発泡して、稜が不明瞭である。6は小型だが肉厚な剥片を利用している。末端は剥離時の衝撃によって割れている。左側縁の一部を抉るように加工が見られる。7のみチャート製である。小型剥片の右側縁には部分的に微細剥離痕が、左側縁には部分的な加工が見られる。



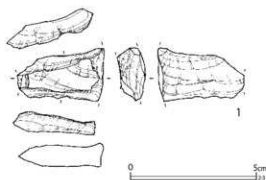
第304図 グリッド出土微細剥離のある剥片

17 翡翠剥片(第305図)

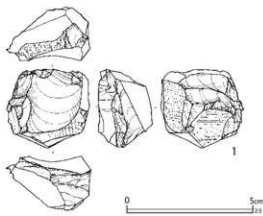
1は白い石基の中に緑色の鉱物がまだらに見える岩石片で、分析を行った結果、翡翠と判断したものである。全体的に剥離面でおおわれているが、表面が粒状であり剥離の方向が不明瞭である。上下の端部が欠損しているため、打点や末端の様子は明確ではないが、わずかに見えるリング、フィッシャーからあまり大きくない剥片であると考えられる。石器製作の初期段階を示す原礫面は確認できなかった。また、製品製作の痕跡を示す敲打痕や研磨痕なども見当たらなかった。

18 石核、原石(第306～310図)

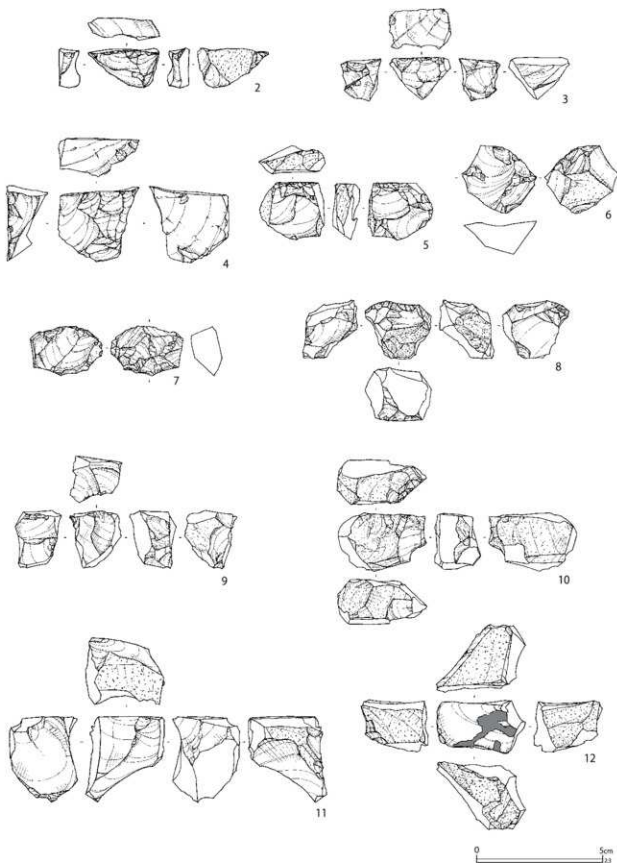
1～15は黒曜石、16～22はチャートである。黒曜石は3cmほどの小礫を素材とすることが多い。



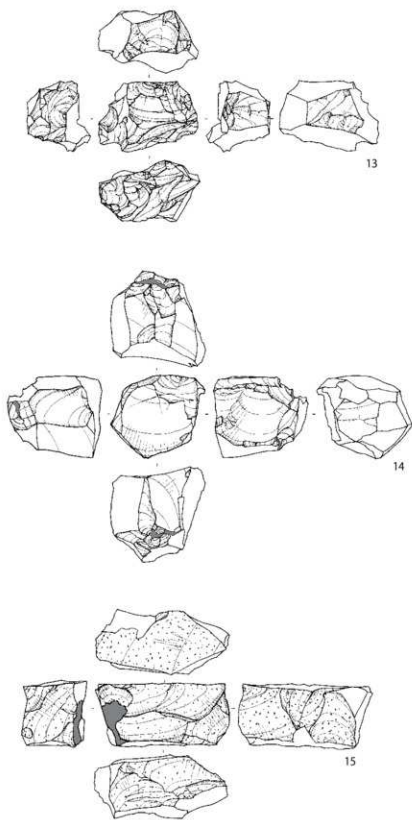
第305図 グリッド出土翡翠剥片



第306図 グリッド出土石核、原石(1)



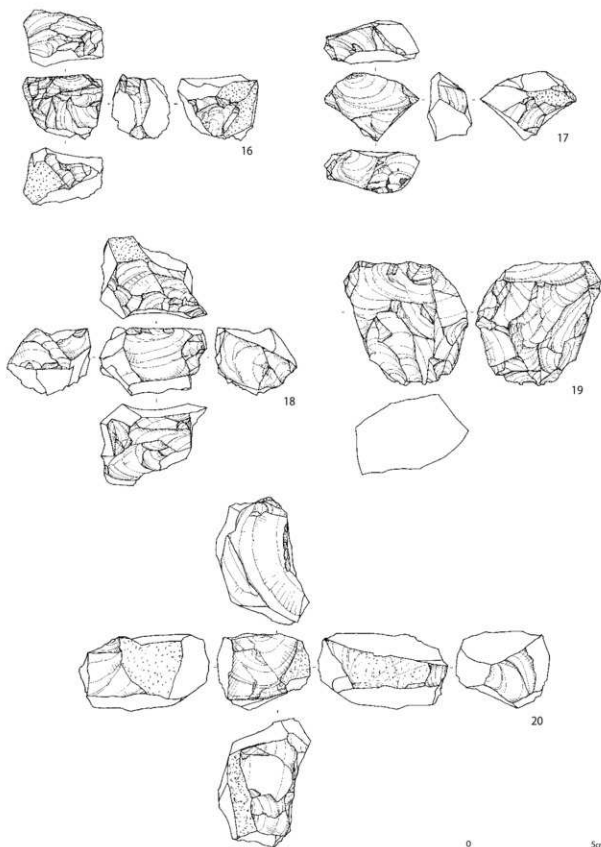
第307図 グリッド出土石核、原石(2)



第308図 グリッド出土石核、原石(3)

礫面や風化面を打面とすることが多く、打面調整はほとんど確認できなかった。素材の制約によって剥離面からは小剥片しか得られなかったと考えられる。一方チャートはより大きな礫を素材としている。ただし、単剥離打面が多く、打面調整は行われていない。黒曜石よりも大きな剥片が剥離されている。多くの作業面が一面で終わっている。

1は小礫を素材としている。打面は礫面で打面調整は見られなかった。作業面は二面であり、90度打面転移して最終作業面で剥片剥離を行っている。2は小型の剥片を素材としている。打面は単剥離打面であるが折面の可能性もある。打面調整は行っていない。作業面は一面のみで、極小の剥片が剥離されている。3は分厚い剥片を素材とし、主要剥離面をそのまま打面として打面調整は行われていない。同一打面で二方向から作業を行っている。4は大きめの剥片を素材としている。打面は剥片の折れをそのまま利用し、打面調整は行っていない。作業面は一面で、左側縁が斑晶によって折れたことで作業が終了している。

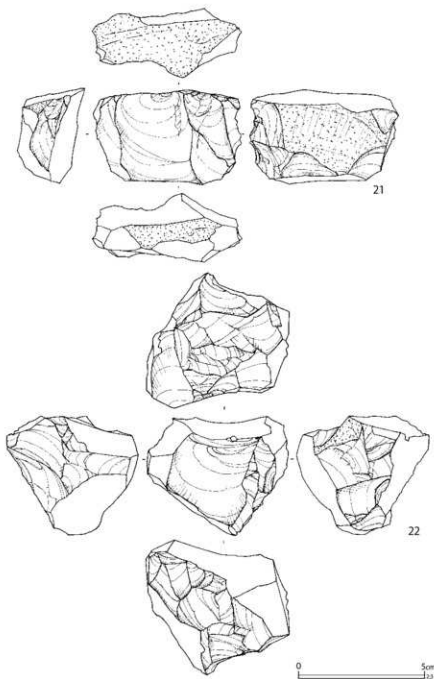


第309図 グリッド出土石核、原石(4)

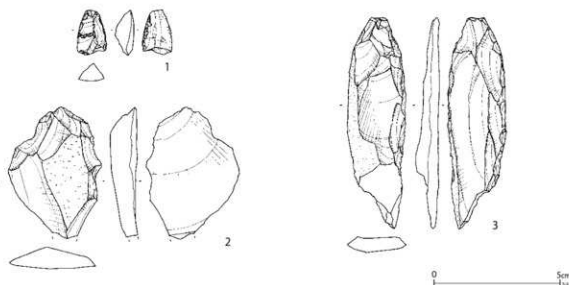
5は風化面でおおわれた扁平な礫を素材とする。風化面を打面とするが打面調整は行っていない。作業面は同一打面からの表裏二面である。6は風化面でおおわれた小礫を素材とする。打面は風化面で、打面調整は行っていない。剥離の結果半分に割れている。7は小礫を素材としている。打面は風化面で打面調整は見られない。作業面は一面

のみである。その後裏面を二次的に加工している。8は風化面でおおわれた小礫を素材としている。作業面は少なくとも三面で、最終作業面は最初の作業面を打面としている。打面調整は確認できなかった。9は小礫と考えられる。最終作業面の打面は複剥離打面であり、打面調整は確認できなかった。打面転移しながら、剥片剥離されている。

打点が明確にわかる作業面は同一打面を用いた二面である。10は風化面でおおわれた角礫を素材とする。打面は風化面であるが打面調整らしき剥離面が確認できる。そこから数度の剥片剥離を行っているが、斑晶により折れて作業を終了している。11は風化面でおおわれた角礫を素材とする風化面で打面調整は行っていない。同一打面から数度剥離されている。12は風化面でおおわれた角礫を素材とする。打面は風化面で打面調整は行っていない。最終作業面は一面で一回の剥離で終了している。13は剥離面でおおわれている。打面転移しながら剥離している。最終作業面の中でも打点が多方向に移動しており、頻繁に打面転移している。14は風化面でおおわれた礫



第310図 グリッド出土石核、原石(5)



第311図 グリッド出土その他の石器

を素材とする。打面は風化面で打面調整は行われていない。作業面は一面でほぼ一回の剥離で終了している。15は角礫で風化が激しく、明確に剥離した痕跡が見当たらない。16は単剥離打面で打面調整は行っていない。作業面は一面であるが、90度打面転移している。17は単剥離打面で、折れた面をそのまま打面に使用している。打面調整は行われていない。作業面は一面でほぼ一回の剥離で終了している。18は単剥離打面で打面調整は行われていない。作業面は一面でほぼ一回の剥離で終了している。19は単剥離打面で打面調整は行われていない。作業面は一面である。20は分割された剥片を素材とする。打面は単剥離打面で打面調整は行っていない。作業面は一面でほぼ一回の剥離で終了している。21は礫面を打面としている。打面調整は行っていない。作業面は一面で同一方向から数度の剥片剥離が行われている。22は単剥離打面で打面調整は行っていない。複数箇所に作業面痕跡と思われる剥離面が見える。各箇所で剥片剥離を行ったがうまく剥片が抜けない面が多く、明確に作業面が残らなかったと思われる。

19 その他の石器 (第311図)

二次的な加工が見られるため何らかの用途に使われたと思われる石器を一括した。

1は黒曜石製で、かなり小型の剥片を使用している。粗雑な石製の可能性もあるが、小さいこと、肉厚なこと、基部の加工がないことなどから石製ではないと判断した。両側縁のみならず、全体的に剥離面の稜が潰れている。2は黒色頁岩製である。礫面を一部に残した剥片に対して、打面部を中心に二次的な調整加工がなされ、打面が除去されている。個別の剥離が大きい。裏面側には二次的な加工はない。素材剥片、製作方法から旧石器時代のナイフ形石器の可能性も考えられるが、先端部が先鋭であるとは想定しがたく、加工も粗いためナイフ形石器ではないと考えた。3は頁岩製である。扁平な礫から剥離された剥片である。縁辺が片面ずつ二次的に加工されている。平面形はレンズ状であるため、尖頭器かと思ったが、先端がほとんど加工されていないため、先鋭になっていないこと、そして石材の質から尖頭器ではない可能性がある。

第43表 グリッド出土石器観察表(1)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
1	尖頭器	チャート	[5.7]	2.3	1.2	12.1	L5-A5	134-1
1	石鏃	黒曜石	1.5	1.9	0.3	0.4	L5-E5~6	134-2
2	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.6	L5-B7	134-3
3	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.3	0.5	SR2 2区 東溝	134-4
4	石鏃	黒曜石	[2.3]	1.4	0.3	0.5	L5-E5	134-5
5	石鏃	チャート	2.2	1.6	0.3	0.5	SR1 2区 南溝	134-6
6	石鏃	黒曜石	[1.7]	[1.3]	0.3	0.4	SR1 1区	134-7
7	石鏃	チャート	[1.3]	1.6	0.3	0.5	K5-J7	134-8
8	石鏃	チャート	2.0	1.2	0.3	0.4	SR1 4区	134-9
9	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.2	0.4	SJ16 B	134-10
10	石鏃	黒曜石	2.7	1.6	0.3	1.2	SR1 3区 西溝	134-11
11	石鏃	黒曜石	2.6	1.9	0.4	0.9	SR1 1区	134-12
12	石鏃	黒曜石	1.9	1.7	0.5	1.3	L5-A5	134-13
13	石鏃	チャート	2.6	1.9	0.4	1.2	SJ18	134-14
14	石鏃	頁岩	2.3	1.9	0.5	1.1	L5-B6	134-15
15	石鏃	黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.4	SR2 2区 局部磨製石鏃	134-16
16	石鏃	黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.5	SR1 4区 局部磨製石鏃	134-17
17	石鏃	黒曜石	[1.7]	[1.7]	0.4	0.8	L5-E6 局部磨製石鏃	134-18
18	石鏃	チャート	2.5	1.7	0.4	1.5	SR2 2区 局部磨製石鏃	134-19
19	石鏃	黒曜石	1.7	[1.6]	0.4	0.8	L5-B7	134-20
20	石鏃	黒曜石	1.2	1.1	0.3	0.3	SR1 主体部ベルト	134-21
21	石鏃	黒曜石	1.6	[1.3]	0.2	0.3	L5-A7	134-22
22	石鏃	黒曜石	[1.8]	1.3	0.3	0.3	SR1 2区 南溝	134-23
23	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.4	0.7	L5-C7	134-24
24	石鏃	チャート	[1.6]	1.6	0.3	0.5	SJ22	134-25
25	石鏃	黒曜石	1.3	[1.2]	0.3	0.4	SR1 1区 局部磨製石鏃	134-26
26	石鏃	黒曜石	1.2	1.2	0.3	0.3	L5-B~C5	134-27
27	石鏃	黒曜石	[0.9]	1.2	0.2	0.2	SR1 4区	135-1
28	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.4	0.4	SR1 2区	135-2
29	石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.3	L5-E5	135-3
30	石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.3	L5-B5	135-4
31	石鏃	チャート	1.5	1.6	0.4	0.5	L5-A6	135-5
32	石鏃	黒曜石	1.6	1.1	0.3	0.3	L5-A7	135-6
33	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.4	SR2 2区	135-7
34	石鏃	チャート	2.0	1.4	0.3	0.6	SR2 1区 北溝	135-8
35	石鏃	チャート	1.9	1.6	0.6	1.3		135-9
36	石鏃	チャート	2.0	1.4	0.4	1.0	SR1 4区	135-10
37	石鏃	チャート	2.2	1.5	0.5	11.0	L5-E7	135-11
38	石鏃	チャート	[1.6]	1.6	0.4	0.9	SR1 4区	135-12
39	石鏃	チャート	[1.7]	1.6	0.4	1.0	L5-C7	135-13
40	石鏃	チャート	1.8	1.3	0.5	1.0	L5-C7	135-14
41	石鏃	玉スイ	[1.7]	[1.5]	0.4	0.8	SR1 主体部覆土	135-15
42	石鏃	チャート	1.9	1.75	0.6	1.5	L5-B6	135-16
43	石鏃	安山岩	2.3	[1.8]	0.4	1.1	K5-J7	135-17
44	石鏃	黒曜石	1.3	[1.7]	0.4	0.8	SR2 2区	135-18
45	石鏃	黒曜石	[1.5]	[1.8]	0.3	0.6	L5-A8	135-19
46	石鏃	黒曜石	[1.7]	[1.4]	0.4	0.4	L5-A8	135-20
47	石鏃	黒曜石	[0.9]	[1.2]	0.2	0.2	L5-B8	135-21
48	石鏃	黒曜石	[1.1]	[1.4]	0.4	0.4	SR1 4区	135-22
49	石鏃	黒曜石	1.5	[1.4]	0.4	0.4	SR2 2区	135-23
50	石鏃	黒曜石	1.5	[1.2]	0.3	0.4	SR1 4区	135-24
51	石鏃	黒曜石	1.8	1.1	0.4	0.8	L5-E5	135-25
52	石鏃	安山岩	2.2	1.3	0.5	0.9	SR1 4区	135-26
53	石鏃	チャート	2.8	1.7	0.8	2.7	L5-B7	135-27
54	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.5	1.1	SR1 1区 北溝	135-28
55	石鏃	チャート	1.9	1.3	0.3	0.6	K5-J7	136-1

第44表 グリッド出土石器観察表(2)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
56	石鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.4	0.7		136-2
57	石鏃	黒曜石	[1.5]	1.3	0.4	0.7	K5-J8	136-3
58	石鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.4	1.1	L5-A8	136-4
59	石鏃	黒曜石	1.2	1.2	0.4	0.3	L5-B6	136-5
60	石鏃	黒曜石	1.4	1.1	0.4	0.5	L5-C7	136-6
61	石鏃	黒曜石	1.2	1.8	0.3	0.2	SR1 3区	136-7
62	石鏃	黒曜石	1.1	1.0	0.2	0.2	SJ18	136-8
63	石鏃	チャート	[1.2]	[1.1]	0.3	0.3	SR1 2区	136-9
64	石鏃	黒曜石	2.0	[2.7]	0.3	0.8	SR2 2区 東溝	136-10
65	石鏃	チャート	[1.6]	[1.2]	0.4	0.7	未製品	136-11
66	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.4	SR1 3区 西溝 未製品	136-12
67	石鏃	黒曜石	2.3	1.4	0.3	0.7	L5-A9 未製品	136-13
68	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.9	2.9	SJ19 未製品	136-14
69	石鏃	黒曜石	1.4	1.6	0.5	1.0	未製品	136-15
70	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.5	0.8	SR1 東溝 未製品	136-16
71	石鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.6	1.5	SR3 未製品	136-17
72	石鏃	黒曜石	[2.2]	1.8	0.7	1.8	SR3 1区 未製品	136-18
73	石鏃	チャート	[2.2]	1.9	0.6	2.5	L5-B7 未製品	136-19
74	石鏃	チャート	3.7	2.7	1.2	8.4	L5-B8 未製品	136-20
1	石鏃	黒曜石	[1.5]	1.2	0.4	0.6	L5-B5	136-21
2	石鏃	黒曜石	[1.5]	0.7	0.3	0.2	SR4	136-22
3	石鏃	黒曜石	[1.7]	1.1	0.5	0.6	L5-A8	136-23
4	石鏃	黒曜石	2.5	1.7	0.6	1.6		136-24
5	石鏃	チャート	2.2	1.3	0.7	1.6	L5-D8	136-25
1	スクレイパー	黒曜石	1.3	1.5	0.5	1.1	L5-B6	136-26
2	スクレイパー	黒曜石	1.7	1.7	0.6	1.4	SR4 1区 北溝	136-27
3	スクレイパー	黒曜石	1.9	2.7	0.9	3.3	L5-A8	136-28
4	スクレイパー	黒色頁岩	[7.6]	4.9	1.4	45.7	K5-I8	137-3
5	スクレイパー	頁岩	4.9	2.5	1.0	9.8	L5-B9	137-1
6	スクレイパー	頁岩	[5.3]	4.8	1.5	36.9	K5-J7	137-4
7	スクレイパー	黒曜石	3.9	2.3	1.2	6.9	K5-J9	137-2
8	スクレイパー	頁岩	4.3	6.8	1.4	36.9	SR4	137-5
9	スクレイパー	ガラス質黒色安山岩	4.5	7.5	1.9	52.0	L5-B10	137-6
1	磨製石斧	トレモラ閃石岩	4.9	2.9	1.0	19.0	SR2 方台部	137-7
2	磨製石斧	緑色岩	[5.8]	3.3	1.5	48.2	L5-A9	137-8
3	磨製石斧	トレモラ閃石岩	[7.0]	3.7	1.4	64.6	L5-F6	137-9
4	磨製石斧	翡翠輝石岩?	[6.0]	3.1	1.7	50.5	K5-J9	137-10
5	磨製石斧	翡翠輝石岩	[5.6]	4.0	1.7	58.9	SR1 方台部	137-11
6	磨製石斧	緑色岩	7.9	3.8	1.9	83.8	L5-B8	137-12
7	磨製石斧	トレモラ閃石岩	[5.9]	[4.0]	1.5	45.1	L5-B7	137-13
8	磨製石斧	緑色岩	7.1	4.3	1.4	68.7	L5-B7	137-14
9	磨製石斧	角閃岩	[4.9]	[4.0]	2.5	61.6	L5-B7	137-15
10	磨製石斧	翡翠輝石岩	[5.7]	[5.2]	3.3	144.7	L5-B5	138-1
11	磨製石斧	火成岩	[5.5]	[5.2]	4.0	151.6	L5-C7	138-2
12	磨製石斧	角閃岩(直閃岩)	11.0	6.3	2.9	322.4	L5-D4	138-3
13	磨製石斧	火成岩	13.3	5.1	3.9	415.7	L5-B7	138-4
14	磨製石斧	変成岩	[8.8]	4.9	3.1	202.7	SR1 方台部	138-5
15	磨製石斧	バンベリー岩	[9.6]	5.0	3.1	234.2	L5-B8	138-6
16	磨製石斧	火成岩?	8.8	5.7	3.5	266.8	SR1 方台部 敲石、楔に転用	138-7
17	磨製石斧	角閃岩	7.7	4.9	2.9	201.4	試掘 T3 敲石、磨石に転用	138-8
18	磨製石斧	角閃岩	[6.1]	5.1	3.3	126.5	L5-A9 未製品	138-9
19	磨製石斧	角閃岩	10.8	6.5	4.1	485.5	SR1 方台部 敲石、磨石に転用	138-10
20	磨製石斧	角閃岩	[8.0]	7.5	5.3	368.0	K5-J7 未製品	138-11
21	磨製石斧	安山岩?	10.1	7.7	4.2	370.6	S11 未製品	138-12
1	打製石斧	頁岩	6.5	5.0	1.1	36.2	K5-J7	138-13
2	打製石斧	頁岩	7.5	3.6	2.7	66.4	K5-J8 磨石を転用	138-14

第45表 グリッド出土石器観察表(3)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
3	打製石斧	安山岩	7.4	3.7	1.4	52.7	SK13 磨石を転用	138-15
4	打製石斧	ホルンフェルス	7.1	4.6	2.0	71.4	L5-B8	139-1
5	打製石斧	黒色頁岩	8.6	5.2	2.4	116.9	K5-J9	139-2
6	打製石斧	ホルンフェルス	7.8	6.1	3.3	165.4	L5-B6	139-3
7	打製石斧	頁岩	7.7	5.5	2.5	94.7	L6-A1	139-4
8	打製石斧	ホルンフェルス	7.5	5.4	2.3	103.8	SJ22	139-5
9	打製石斧	ホルンフェルス	7.4	5.8	2.7	118.3	L5-B7	139-6
10	打製石斧	黒色頁岩	9.4	5.7	1.7	93.0	SR1 方台部	139-7
11	打製石斧	ホルンフェルス	9.0	5.3	2.5	118.2	L5-A7	139-8
12	打製石斧	ホルンフェルス	7.4	5.1	2.3	116.7	L5-D6	139-9
13	打製石斧	頁岩	9.8	5.7	2.3	113.6	L5-A9	139-10
14	打製石斧	ホルンフェルス	9.6	6.3	1.7	100.7	L5-A7	139-11
15	打製石斧	黒色頁岩	11.0	6.3	3.4	231.8	K5-J7	139-12
16	打製石斧	ホルンフェルス	10.1	5.8	2.3	120.9	L5-A9	139-13
17	打製石斧	黒色頁岩	9.7	6.3	1.8	115.9	L5-B6	139-14
18	打製石斧	緑泥片岩	11.8	6.0	1.9	204.4	SJ16 C	139-15
19	打製石斧	頁岩	[5.9]	4.5	2.0	78.8	K5-J7	140-1
20	打製石斧	ホルンフェルス	[8.5]	5.3	2.2	115.1	K5-J9	140-2
21	打製石斧	ホルンフェルス	[8.3]	5.4	2.3	113.1	L5-A7	140-3
22	打製石斧	砂岩	10.0	[6.8]	2.4	183.0	L5-F6	140-4
23	打製石斧	頁岩	11.9	[7.9]	2.7	232.5		140-5
24	打製石斧	ホルンフェルス	12.9	[7.3]	2.2	238.5	K5-J9	140-6
25	打製石斧	頁岩	11.8	8.7	1.9	174.5	L5-C5	140-7
26	打製石斧	黒色頁岩	9.0	[5.3]	1.7	80.3	表採	140-8
27	打製石斧	ホルンフェルス	10.0	5.5	2.4	139.8	L5-E7	140-9
28	打製石斧	ホルンフェルス	[10.0]	[5.8]	3.2	166.4	L5-A8	140-10
29	打製石斧	頁岩	9.5	[6.9]	1.8	100.9	L5-B7, A8	140-11
30	打製石斧	頁岩	10.6	6.0	1.8	130.7	K5-J7	140-12
31	打製石斧	黒色頁岩	10.1	6.3	1.4	95.6	L5-B7	140-13
32	打製石斧	黒色頁岩	10.5	6.4	2.0	138.6	表採	140-14
33	打製石斧	黒色頁岩	11.1	6.5	2.9	238.2	L5-E5	140-15
34	打製石斧	緑泥片岩	12.9	7.3	2.0	244.7	K5-J9 表土	141-1
35	打製石斧	砂岩	11.6	[5.6]	2.3	158.9	L5-A6	141-2
36	打製石斧	黒色頁岩	11.0	7.2	2.9	226.6		141-3
37	打製石斧	黒色頁岩	11.7	8.1	3.1	275.1	L5-J4~6	141-4
38	打製石斧	ホルンフェルス	10.9	8.3	3.2	258.1	C5-B9	141-5
39	打製石斧	ホルンフェルス	7.3	6.3	1.4	73.1	表採	141-6
40	打製石斧	砂岩	8.3	6.3	2.4	112.1	L5-A8	141-7
41	打製石斧	片岩	8.9	7.2	2.0	165.1	L5-B7	141-8
42	打製石斧	緑泥片岩	9.3	6.7	1.7	164.0	L5-A9	141-9
43	打製石斧	ホルンフェルス	9.8	[7.9]	2.0	159.0	SK141	141-10
44	打製石斧	砂岩	9.5	6.9	2.0	158.9	L5-A9	141-11
45	打製石斧	ホルンフェルス	9.6	[8.7]	2.4	201.3	SJ18	141-12
46	打製石斧	砂岩	9.7	8.2	3.1	250.4	L5-A9	141-13
47	打製石斧	頁岩	9.6	[7.1]	2.7	195.0	SR1 方台部	141-14
48	打製石斧	砂岩	11.3	[7.7]	2.6	229.6	L5-A7 K5-18	141-15
49	打製石斧	頁岩	13.5	7.2	3.5	368.2	L5-A8	142-1
50	打製石斧	ホルンフェルス	13.9	7.9	3.8	361.9	L5-B5 №15	142-2
51	打製石斧	砂岩	11.3	7.2	4.5	445.8	L5-B6~7	142-3
52	打製石斧	ホルンフェルス	11.3	6.0	3.0	245.9	L5-A8	142-4
53	打製石斧	ホルンフェルス	13.0	8.4	2.8	374.3	L5-A9	142-5
54	打製石斧	黒色頁岩	13.3	8.6	4.2	455.5	L5-E6	142-6
55	打製石斧	ホルンフェルス	[10.3]	8.9	2.7	282.0	L5-A9	142-7
56	打製石斧	安山岩	[9.0]	10.1	2.0	202.4	L5-A5 赤化	142-8
57	打製石斧	ホルンフェルス	[6.6]	3.7	1.9	54.3	L5-A9	142-9
58	打製石斧	片岩	[5.3]	6.7	1.3	49.6		142-10

第46表 グリッド出土石器観察表(4)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
59	打製石斧	ホルンフェルス	[6.6]	7.4	2.1	111.4	SR1 4区 西溝	142-11
60	打製石斧	片岩	[7.3]	3.6	1.6	46.2	表採	142-12
61	打製石斧	砂岩	[5.1]	5.3	2.1	62.7	L5-E6	142-13
62	打製石斧	砂岩	[6.9]	8.0	2.4	136.7	L5-E6	142-14
63	打製石斧	ホルンフェルス	[5.6]	4.6	1.6	44.2	SR1 方台部	142-15
64	打製石斧	ホルンフェルス	6.6	5.4	2.5	115.9	SJ23	143-1
65	打製石斧	砂岩	[7.9]	[6.9]	2.8	151.5	K5-J9	143-2
66	打製石斧	黒色頁岩	[7.6]	7.4	2.9	166.7	SR1 方台部	143-3
67	打製石斧	頁岩	[8.3]	[7.5]	2.1	108.8	L5-F5	143-4
68	打製石斧	安山岩	[8.1]	7.9	3.0	187.5	L5-A7	143-5
69	打製石斧	頁岩	[6.8]	10.4	2.6	235.0	K5-J8	143-6
1	礫器	砂岩	10.7	4.9	3.5	239.6	K5-J9	143-7
2	礫器	砂岩	8.8	4.3	1.5	65.3	SR1 方台部	143-8
3	礫器	頁岩	10.6	3.7	2.4	121.4	L5-E4	143-9
4	礫器	安山岩	[7.8]	5.2	2.7	153.8	L5-A8	143-10
5	礫器	砂岩	11.5	10.0	2.4	345.9	L5-A8	143-11
1	浮子	軽石	[11.4]	6.1	2.4	64.7	L5-B7	143-12
2	浮子	軽石	10.1	5.5	1.9	33.8	L5-A7	143-13
1	石錘	頁岩	4.7	2.3	1.0	15.2	SJ16 D	143-14
2	石錘	頁岩	4.2	2.7	0.9	13.6	K5-J9	143-15
3	石錘	頁岩	7.9	4.8	2.0	80.1	K5-J9	144-1
4	石錘	安山岩	7.9	5.3	2.2	117.5	L5-F6	144-2
5	石錘	頁岩	6.6	5.8	1.7	91.5	L5-B8	144-3
6	石錘	砂岩	6.1	4.2	1.4	51.2	L5-B7	144-4
7	石錘	頁岩	7.4	5.5	1.6	99.7	K5-J9	144-5
8	石錘	砂岩	7.5	5.7	2.2	126.0	L5-B6-7	144-6
9	石錘	頁岩	8.2	6.1	2.3	174.1	K5-I8	144-7
10	石錘	頁岩	6.5	4.9	2.1	86.4	SK126	144-8
11	石錘	砂岩	6.0	5.3	2.3	110.9	K5-J8	144-9
12	石錘	頁岩	[6.5]	5.5	2.0	81.7	L5-F7	144-10
13	石錘	ホルンフェルス	7.3	6.1	2.4	140.7	K5-J9	144-11
14	石錘	頁岩	7.7	4.2	1.5	82.5	L5-A9	144-12
15	石錘	頁岩	8.7	4.3	1.8	114.0	K5-I~J8	144-13
16	石錘	頁岩	8.3	4.9	1.8	107.1	L5-B7	144-14
17	石錘	砂岩	7.4	6.9	2.4	138.9	L5-B7	144-15
18	石錘	砂岩	6.3	4.4	1.7	67.1	L5-B6	145-1
19	石錘	片岩	6.8	4.5	1.9	77.2	L5-A8	145-2
20	石錘	ホルンフェルス	7.3	6.5	1.7	100.7	SD2	145-3
21	石錘	片岩	9.9	7.6	1.9	169.1	SR1 2区 南溝 被熱	145-4
1	礫石	片岩	[5.5]	4.1	1.0	32.6	SR1 主体部 被熱	145-5
2	礫石	砂岩	[3.6]	5.6	0.9	21.5	SR1 1区 北溝下層 被熱	145-6
3	礫石	砂岩	[8.0]	6.2	1.7	75.7	L5-B7 被熱	145-7
4	礫石	砂岩	[3.0]	[4.1]	1.1	13.7	SR1 3区 西溝 被熱	145-8
5	礫石	緑泥片岩	[6.3]	[4.0]	0.6	28.4	L5-E4 Gトレンチ 7と同一個体	145-9
6	礫石	砂岩	6.6	3.3	0.8	17.2	SR1 方台部 被熱	145-10
7	礫石	緑泥片岩	[6.2]	[5.3]	0.6	32.6	5と同一個体	145-11
8	礫石	砂岩	9.5	7.5	1.5	116.2	SR2 4区	145-12
9	礫石	片岩	8.7	4.8	1.2	59.4	SR1 1区 北溝	145-13
10	礫石	砂岩	10.5	5.9	1.0	68.2	K5-J6 被熱	145-14
11	礫石	緑泥片岩	10.4	6.3	1.4	107.8	表採	145-15
12	礫石	片岩	12.6	2.9	0.5	31.3	SR2 2区 東溝 被熱	146-1
13	礫石	砂岩	[10.2]	10.0	1.3	196.4	L5-E4 Jトレンチ	146-2
14	礫石	緑泥片岩	11.6	[6.4]	1.0	115.2	表採	146-3
1	礫石	砂岩	6.2	5.2	3.8	183.2	SJ16 D	146-4
2	礫石	安山岩	[5.8]	4.4	3.4	103.0	K5-J9	146-5
3	礫石	安山岩	[7.8]	4.4	3.0	147.8	K5-I~J8	146-6

第47表 グリッド出土石器観察表(5)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
4	敲石	閃緑岩	9.2	4.6	3.8	240.3	L5-B7	146-7
5	敲石	砂岩	10.9	5.5	2.6	232.3	SR1 方台部	146-8
6	敲石	砂岩	9.4	4.8	3.7	269.1	SR3 3区 南溝	146-9
7	敲石	安山岩	9.7	5.0	3.7	238.6		146-10
8	敲石	安山岩	11.8	4.8	3.7	369.9	L5-A9	146-11
9	敲石	安山岩	11.8	5.0	3.8	334.2	L5-A9	146-12
10	敲石	片岩	[7.5]	[3.4]	2.0	66.7	SR1 方台部 石器製作用?	146-13
11	敲石	片岩	[10.8]	2.7	2.4	115.5	L5-A9 石器製作用?	146-14
12	敲石	緑色岩	12.2	4.7	3.7	339.9	石器製作用?	146-15
1	磨石	閃緑岩	7.7	6.7	4.6	391.6	SR1 3区 西溝	147-1
2	磨石	閃緑岩	8.5	7.9	4.0	641.1	SR1 4区 北溝	147-2
3	磨石	安山岩	8.3	7.2	4.0	282.8	表採	147-3
4	磨石	安山岩	10.3	8.9	4.0	590.6	L5-B7 鉄鋳縁物質付着	147-4
5	磨石	安山岩	10.5	9.2	4.1	671.3	L5-B8	147-5
6	磨石	安山岩	[9.6]	7.7	4.3	416.5	被熱	147-6
7	磨石	緑色岩	9.8	6.0	3.2	389.7		147-7
8	磨石	火成岩	10.4	5.5	3.8	382.4	L5-B6	147-8
9	磨石	閃緑岩	[8.7]	[8.3]	5.3	560.3	L5-B6 №8	147-9
10	磨石	閃緑岩	[8.7]	7.0	3.2	330.3	K5-I6	147-10
11	磨石	閃緑岩	[7.9]	6.6	3.5	294.2	L5-B6 №17	147-11
12	磨石	安山岩	[5.7]	[7.0]	3.7	247.7	L5-B6~7	147-12
13	磨石	閃緑岩	[6.3]	[6.9]	3.7	241.2	SR2 方台部	147-13
14	磨石	安山岩	[8.8]	[7.6]	4.1	325.5	SR1 1区	147-14
15	磨石	安山岩	[5.4]	[3.9]	2.7	55.9	SK1	147-15
16	磨石	閃緑岩	[5.8]	4.7	4.5	165.8	L5-B8	148-1
17	磨石	閃緑岩	6.4	5.0	4.5	224.8	SJ17	148-2
18	磨石	安山岩	7.0	6.1	2.4	146.1	SK84	148-3
19	磨石	閃緑岩	8.6	6.6	3.6	334.8	L5-A9	148-4
20	磨石	砂岩	7.5	5.9	2.5	132.9	SR3	148-5
21	磨石	砂岩	7.7	5.1	3.9	237.9	L5-F6 被熱	148-6
22	磨石	安山岩	8.8	6.5	5.2	435.3	SD2	148-7
23	磨石	砂岩	8.5	4.8	4.1	245.3	SJ20 №2 黒化	148-8
24	磨石	安山岩	[8.5]	5.5	3.1	252.3	K5-J7	148-9
25	磨石	安山岩	[7.2]	[5.6]	3.2	145.3	SR1 方台部 黒化	148-10
26	磨石	花崗岩	[9.2]	5.3	3.8	315.3	SK5-5	148-11
27	磨石	安山岩	[7.7]	[5.6]	3.8	167.4	SR2 2区 東溝 被熱	148-12
1	凹石	安山岩	7.6	4.8	3.3	134.3	K5-J7 被熱	148-13
2	凹石	閃緑岩	[7.7]	5.6	3.5	224.0	L5-B7	148-14
3	凹石	安山岩	[6.1]	6.1	3.6	160.0	L5-F7	148-15
4	凹石	安山岩	8.7	4.8	3.9	260.3	L5-A9	149-1
5	凹石	閃緑岩	9.1	5.6	4.0	364.9	SR1 4区 西溝	149-2
6	凹石	砂岩	[8.7]	7.0	4.3	395.0	L5-A9	149-3
7	凹石	安山岩	8.9	6.8	4.8	504.6	L5-B7	149-4
8	凹石	花崗岩	10.6	7.5	4.6	627.4	SR2 B区 南トレンチ	149-5
1	石皿	安山岩	[18.9]	18.4	5.3	2524.5	L5-A9	149-6
2	石皿	安山岩	[15.6]	[17.5]	4.0	1506.1	L5-A7	149-7
3	石皿	閃緑岩	[16.0]	[20.5]	5.4	2434.1	L5-E5	149-8
4	石皿	安山岩	[11.1]	[8.7]	7.4	523.9	L5-F6	149-9
5	石皿	安山岩	[14.8]	[10.5]	6.3	602.1	L5-A9, E6	149-10
6	石皿	安山岩	[11.2]	[8.2]	7.1	400.8	K5-J10	149-11
7	石皿	安山岩	[10.6]	[9.6]	7.6	868.1	SR1 方台部	149-12
8	石皿	安山岩	[9.6]	[8.4]	5.4	410.6	SD10	149-13
9	石皿	安山岩	[4.9]	[3.7]	5.5	110.8	L5-E5	149-14
10	石皿	安山岩	[12.3]	[8.5]	5.0	469.2	L5-B7	149-15
11	石皿	安山岩	[11.9]	[14.4]	5.7	1028.5	L5-A9	150-1
12	石皿	安山岩	[14.0]	[7.9]	6.0	658.0	L5-A7	150-2

第48表 グリッド出土石器観察表(6)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
13	石皿	安山岩	[20.3]	[11.7]	5.5	1013.4	L5-B9	150-3
14	石皿	安山岩	[23.8]	[12.1]	4.6	1044.0	L~K5-B7, J7	150-4
15	石皿	安山岩	[3.8]	[8.5]	6.5	616.0	L5-B8	150-5
16	石皿	安山岩	[11.3]	[12.7]	7.3	1062.9	K5-J7	150-6
17	石皿	安山岩	[12.6]	[10.1]	5.3	705.0	L5-A8	150-7
18	石皿	安山岩	[7.9]	[10.9]	5.1	450.2	L5-A7	150-8
19	石皿	安山岩	[16.2]	[19.3]	7.3	1821.6	L5-F5 №26	150-9
20	石皿	安山岩	[7.2]	[8.1]	3.5	260.4	L5-J7	150-10
21	石皿	安山岩	[7.8]	[9.1]	3.9	428.2	L5-B8	150-11
22	石皿	閃緑岩	[11.1]	[11.6]	7.0	1153.9	L5-B7	150-12
23	石皿	安山岩	[9.5]	[10.1]	4.1	487.5	K5-J7	150-13
24	石皿	安山岩	[15.5]	[19.3]	7.2	2728.6	表採	150-14
25	石皿	安山岩	[7.0]	[10.4]	4.6	382.8	L5-A8	150-15
26	石皿	緑泥片岩	[27.6]	[14.1]	3.6	1390.8	SR1 方台部	151-1
27	石皿	緑泥片岩	[16.7]	[6.7]	3.6	667.7	SR1 方台部	151-2
28	石皿	緑泥片岩	[11.2]	[8.2]	2.8	392.1	L5-A10	151-3
29	石皿	緑泥片岩	[37.3]	[13.6]	3.0	1703.3	K5-J7	151-4
1	石棒	安山岩	[5.5]	5.5	4.8	205.1	K5-J8	151-5
2	石剣	緑泥片岩	[10.1]	4.2	1.7	141.5	SR1 方台部	151-6
3	石棒	緑泥片岩	[11.5]	5.7	6.3	612.5	L5-A9	151-7
4	石棒	緑泥片岩	[14.1]	[11.9]	4.9	1233.2	L5-B7	151-8
1	微細剥離剥片	黒曜石	1.9	0.4	0.5	0.7	L5-B6	151-10
2	微細剥離剥片	黒曜石	2.7	1.1	0.6	1.2	L5-A8	151-11
3	微細剥離剥片	黒曜石	2.5	1.5	0.8	1.8	L5-A8	151-13
4	微細剥離剥片	黒曜石	2.5	1.7	0.5	1.7	L5-D8	151-12
5	微細剥離剥片	黒曜石	2.7	1.5	0.7	2.6	L5-A8	151-14
6	微細剥離剥片	黒曜石	3.0	1.6	1.0	4.0	L5-A8	151-15
7	微細剥離剥片	チャート	3.0	2.1	0.9	4.1	L5-A9	151-16
1	剥片	翡翠	[2.1]	3.4	1.1	9.9		151-9
1	石核	黒曜石	3.1	3.3	2.1	19.0	L5-C7	152-3
2	石核	黒曜石	1.0	3.8	0.9	3.2		152-4
3	石核	黒曜石	2.2	2.5	1.6	5.2	L5-A9	152-5
4	石核	黒曜石	3.2	3.1	1.6	10.5	SR1 方台部	152-6
5	石核	黒曜石	2.3	2.6	1.1	6.1	SR4 2区 南溝	153-1
6	石核	黒曜石	2.7	3.0	1.3	7.3	L5-G6	153-2
7	石核	黒曜石	2.9	2.0	1.4	5.8	L5-E6	153-3
8	石核	黒曜石	2.3	2.7	2.1	11.2	K5-J9	153-4
9	石核	黒曜石	2.2	2.1	1.9	7.2	L5-A8	153-5
10	石核	黒曜石	2.8	3.5	1.8	15.3	L5-B5	153-6
11	石核	黒曜石	3.4	3.1	2.7	22.2	L5-C6	154-1
12	石核	黒曜石	2.1	3.5	2.7	16.8	SR4	154-2
13	石核	黒曜石	2.8	3.9	2.5	22.0	L5-A9 №1	154-3
14	石核	黒曜石	3.3	3.8	3.8	45.1	SR1 方台部	154-4
15	原石	黒曜石	2.6	5.4	2.6	40.1	L5-A7	154-5
16	石核	チャート	3.2	2.6	2.3	19.3	SK32	154-6
17	石核	チャート	2.7	3.8	1.7	13.3	L5-A9	155-1
18	石核	チャート	2.7	4.3	3.3	36.2	L5-A8	155-2
19	石核	チャート	5.0	5.0	4.7	87.0	L5-A7	155-3
20	石核	チャート	3.1	3.7	5.1	61.7		155-4
21	石核	チャート	3.7	5.9	2.7	57.1	SK149	155-5
22	石核	チャート	4.7	5.7	5.3	133.6	SK169	155-6
1	使用痕のある剥片	黒曜石	1.7	1.2	0.8	1.3	SR2 2区	151-17
2	剥片	黒色頁岩	5.2	3.7	1.1	18.6	SJ17	152-1
3	尖頭器か?	頁岩	8.4	2.3	0.9	14.6	L5-B10	152-2